

A vertical glass tube is positioned in the center of the frame. At the bottom of the tube, a large, clear water droplet is suspended. The background is a light blue gradient with a bright sun flare on the right side. The title '沈艺冰' is written in white, stylized Chinese characters across the top of the image.

沈艺冰

小川真知貴

1. 本文

目次

- 第一章 高萩への赴任
- 第二章 袋田の滝
- 第三章 凍った沼
- 第四章 氷の不思議
- 第五章 過去の亡霊
- 第六章 おどる政治家の影
- 第七章 駆け引き
- 第八章 影の人物

『沈む氷』

第一章 高萩への赴任

こやなぎちはる たかはぎ
小柳千春は高萩中央署の裏庭にいた。空には真夏の太陽が容赦なく照りつけている。

千春は駐車場に停めた車に近づくとドアをあけた。炎天下にとめていた車の室内からは、ムツとする熱気が吐き出された。一瞬、顔をしかめた千春ではあったが、そのまま室内に入った。茹^ゆだるような暑さに千春の身体からは、あっという間に汗が噴き出した。

「こりゃ、暑いわ」

千春は小さな声で独り言を口にしながら、キーを回しエンジンをかけ警察署をでた。

小柳千春の勤務する高萩中央署は、茨城県北部高萩^{たかはぎし}市にある小さな警察署であった。

高萩市は、東側は太平洋に面し海岸線に沿って広がる平地に市街地を形成しているが、西に数キロ向かえば多賀山地から伸びる標高四、五百メートル位の小高い山岳地帯となり、高低差を持つ自然豊かな地形をしている。高萩中央署は、すぐ近くに海を望める市街地のなかに置かれていた。

千春は市街地を抜けると、国道四六一号線に車を向けた。国道四六一号は高萩から、ほぼ東西に走る国道である。そのために市街地を抜けて西に少し走れば、山沿いの道になる。そのまま山沿いの道を西に進むと隣接する^{だいごまち}大子町に行ける。大子町に入ってすぐのところに、茨城県の観光地として有名な^{ふくろだ たき}袋田の滝がある。

千春の運転する車は僅かな時間で、市街地を抜け山地へと向かった。両側に山林を抱きながら、しばらく走ると車は農村地帯へと出た。

この辺りは、高萩市と大子町との境に近く、ちょうど袋田の滝の上流に位置した山間部の小さな集落が幾つかある場所になる。集落を過ぎると千春は、車を国道から山裾を走る細い道路へと進めた。すでに何度か走っているのだろう。迷いのない運転であった。

やがて千春は人気のない山中で車を止めると、車の中で上着やネクタイを外し車からでた。千春は車のトランクから運動靴を取り出し、履いていた革靴と履き替えながら周囲を見回した。周囲には走る車もなければ、人の気配もなかった。そこは静かな山間の奥まった場所であった。

自分を納得させるように、一つ頷いた千春は車のトランクから、リュックザックを取りだして背負った。ついでに首に白いタオルを一本、無造作に引っかけると、とめた車のそばから延びる細い山道に向かって歩き出した。

「全く、^{あいつ}何で彼奴なんだ。^{おじき}叔父貴もどうかしている」

小柳千春、何かその名前からは、女子を思わせるような弱々しい響きがあるが、千春は高萩中央署に務める三十二になる男子警察官であった。ただ、警察官としては、それほど上背もなく、少し長目の髪に人の良さそうな顔をしているために、私服で歩いている千春を見て警察官だと見る人は、そうはいないだろう。その千春が、ぶつくさと訳の判らない独り言を呟きながら、細い山道を歩いていた。

いつしか細い山道も途絶えた。それでも千春は僅かに残る道らしき跡を頼りに、更に山奥に進んで行った。

歩いている道は細い山道のため木々が覆い被さり、おおかたは日陰であった。しかし、真夏の日中であるのに変わりはない。汗が^{あせ} ^{ほとばし} 迸る。千春は首に掛けてきたタオルで時折、吹き出る汗を拭った。

しばらくすると覆い被さっていた木々がぽっかりと空き、青空が広がった場所にでた。

青空の下には、空を写した沼が山の中に横たわっていた。千春は、沼の岸辺で立ち止まると、沸き上がる額の汗をタオルで拭きながら、注意深く周囲を見回していた。

夕刻、署に戻ってきた千春は刑事課の向かいにある、刑事課分室と表示された部屋に入った。刑事課の分室、おかしな名称を持った部屋であるが、それには理由があった。

小柳千春は、元々は警視庁に勤務していた。千春の転勤については、当初、人事を司る警察庁から打診をうけた高萩中央署の長沢署長も困惑を隠せなかった。警視庁で何があったのかは知らないが、小柳千春は公務員一種試験に合格したキャリアであり階級は警視。まだ若いと云え階級だけ見れば小さな警察署であれば、署長にも就ける階級にある。

小柳千春の移動は通常の人事異動とは異なっていた。警察庁人事課からは、茨城転勤は本人たっての申し出につき、部署は何処でもよいから、受け入れて貰えないかという、おかしな話で舞い込んできた。

当初、長沢署長も次長職程度のものは必要かと考えていたが、本庁からは、それには及ばないとの話もあり、そこで長沢は苦肉の策として、刑事分室課長との肩書で千春を受け入れた。それは今年の春先の事であった。

刑事課長の杉幸雄も、そのときは困ったと思った。しかし、署長の計らいで直接刑事課と距離をおく一人課長であれば、余計な人間が一人増えた程度に思えばよかっただけに、小柳千春に関しては拘わりを持たないような形で、当初は仕事を進めていた。

始めて署員の前に立った小柳千春を見た時の署員の感想は、それほど上背はないが、顔は、それなりに整っている。しかし、警察官が持つ精悍さや力強さとのイメージからは離れていた。無造作に伸ばした少し長目の髪、大きな二重瞼の目と男にしてはやや長い^{まつげ} 睫毛。そして眉も決して濃くはない。これらが千春の顔から力強さを奪い、穏和な表情に見せていたのかも知れない。まあ、人を安心させるような顔、それが高萩中央署の署員が千春を見たときの第一印象であったようだ。それだけに警視庁の捜査課にいた風格なども、微塵も感じられないというものであった

。そんな人の良さそうな顔をした千春であったが、好奇心が旺盛で何にでも首を突っ込んでくる男であった。最初は、うっとうしく感じた署員も千春と云う男を知るにつけて、結構気さくな良い青年であると知り安心をした。

千春の良いところは階級を意識させない人柄と、温和な人当たりであった。長い話でも、うん、うんと頷き話を聞き話の腰を折ったり、自分の意見を強く主張するでもない。それでいて捜査員などが、見落としているようなものには良く気づく。しかも、それらを話すときでも、何気なく話のなかに織り込んでくる。それが自然であるから、相手もなるほどと感じ、妙な反感を覚えたりしない。

その様な性格が幸いしてか、高萩中央署にきて日は浅かったが、今では、春さんと呼ばれ署員のなかに、すんなりと溶け込んでいた。刑事課長の大杉でさえ、人手が足りないときなどは、気軽に応援を求める間柄になっていた。

その大杉が数日前に、また、署長の長沢に呼ばれた。長沢は角張った厳つい顔に、何処か笑いを忍ばせた、意味深な表情で小柳千春について聞いていた。

千春が警察仲間と、うまくやっているとは大杉が告げると、長沢はホッとしたのか笑顔を見せて、それは良かったと返事をした。

「なあ、大杉君、あと一人面倒を見てもらえないか？」

大杉はえっと思って長沢を見た。長沢は少し困った顔をしていたが、その顔には笑いが含まれていた。捜査畑にいる大杉にすれば、捜査に当たれる人間が増えるのは歓迎であった。ただ、署長の笑いを含んだ顔は、曲者だと知る大杉は自然と身構えた。

「署長、また本庁ですか？」

少し大杉は眉をひそめながら長沢に尋ねた。

「まあ、そんなところだ」

小柳千春は良かった。しかし、今度も小柳の様な気さくな男がくるとは限らない。それにしても、まとも本庁からというのも、おかしい話だと思った。

「今度は、女だ」

長沢が申し訳なさそうに大杉に述べた。ここまできたら既に話は決まっているとはいえ、女子と聞いて大杉も多少戸惑った。

「また、キャリアさんですか？」

「そうなるな」

長沢が顔に苦笑いを浮かべ、とぼけた調子でいった。

「本庁人事の兼松は、俺の同期なんだ。なんとか頼まれてくれないか？」

「定期異動でもない時期ですよ。問題を抱えたキャリアさんじゃないでしょうね」

「それはないと思う。結構優秀だとは聞いているが、まあ本庁の考えだ。良くはわからない」

「……いやですよ。性格に問題があるような女では？」

「大丈夫だろう。兼松も、小柳君に特別室を与えていると話したら、そこに押し込めば良いだろうと言ってきた」

「小柳君と同じ部署にするのですか？」

「まあ、そのように考えている。仕方ないだろ。今度来る女子は警視正だからな」

「小柳君の上司という訳ですか？」

「それで良いと思うのだが」

階級では、今度くる女子の方が大杉よりも上になる。正直、余り歓迎できる話しではなかった。ただ、ここまで長沢が話したからには、すでに話しは上層部で決まっている。これは単なる所長からの報告であり、大杉が嫌だといっても、今更変わるものでもないと思うと、大杉は渋々ながらも署長の言葉に頷くしかなかった。

署長室から戻ると大杉は千春の部屋に行き、署長からの話を伝えた。

その話を聞き千春の表情が次第に曇っていくのを、大杉は不思議そうに見ていた。

「どうした、春さん？」

「……悪夢か、これは」

「悪夢？ なんだそれは？」

「堂本美佐子だけは、いかんです！」

普段、温厚な千春には珍しく、吐き捨てるようにいった。

「いかんといってもな、それより春さんは、堂本美佐子を知っているのか？」

その様子に、少し驚きながら大杉は聞き返した。

「知っています。幼なじみですから」

「それなら、何も問題はあるまい」

「だから駄目なんです」

二人の関係はよくわからないが、すでに決まった事である。

「まあ仕方あるまい。上が決めたものだ。うまくやってくれよ」

温厚な千春がこうも嫌がる姿勢を見せるだけに、大杉は多少不安な気持ちになった。

二

二週間後、高萩中央署に堂本美佐子が赴任してきた。署員を前に署長から紹介された美佐子は、誰の目にも均整の取れたスタイルに黒髪が、良く似合う美しい女性に映った。新任の挨拶も、これといった気負いもなく、そつなくまとめた上手い挨拶をしていた。そこからは、さすがキャリアと思わせるものがあつた。

千春から話しを聞いていた大杉は美しいという事を除けば、これといって問題を起こすような女性とも思えず、ちらりと千春の様子を見た。そこには口を少し尖らし気味にした浮かない顔で、美佐子の挨拶を聞く千春の姿があつた。

しばらくすると赴任の手続きなどを終えた美佐子が、千春の居る刑事課分室に入ってきた。しかし、千春は、その姿を無視して書類に目を向けていた。

「おい、こら、逃げたな」

近づいてきた美佐子が、その美しい顔とは似ても似つかない、乱暴な言葉を千春に浴びせてきた。千春は、それでも無視を続けていた。

「ほう、千春、そんな態度をとっても良いのか？ いいか、少なくとも私は、あんたの上司、警察署のなかではそんな態度、許さないよ」

透き通った美しい声ではあるが、棘とげのある言葉である。耳の後ろに指を置き、耳を少し押しは戻す。困ったときや考え事をするときの千春の癖であった。

耳を二度、三度指で動かした千春は、仕方なさそうに立ち上がると、ぼそっと何かを言って頭を下げた。

「声が小さい！」

鋭い美佐子の声が向けられた。

「はい、はい、よろしく願います」と無表情にいうと、再び千春は頭を下げて座った。その様子に美佐子は、美しい顔に冷笑を浮かべ、満足そうに頷いていた。

千春は警察庁に電話をしていた。

「叔父貴おじき、どうして相棒あいつが、彼奴なんですか？」

「どうしてと云われても困る。相棒を探していたのは、お前だろう」

「それはそうですが、彼奴はないですよ」

「おいおい、千春、彼奴といっても彼女は去年、昇進して今ではお前より階級は上だ。彼女が優秀なのは、お前も知っているだろう。これでも私は努力をしたつもりだよ」

「……有り難うと云うべきか、困ったと云うべきか」

「しょうがないだろう。人選をしているとき、彼女の方から話しがあったそう。これまでお前達は、警視庁で難事件を幾つも解決してきた。それを評価されてだから、お前にも悪い話しではない」

「良くないですよ」

「優秀なコンビだったのだろう。その噂なら俺も聞いている。そんなコンビを警察としてもすんなり、解散させる訳にもいかなかったのかも。コンビはコンビとして一カ所に置けば、いつでも使える」

「そのコンビを解消したかった……」

「しかしな、彼女の評判は警視庁でも良かったぞ」

「……まあ、美佐子は人前ではうまく立ち回るからな」

「お前達は、そんなに相性が悪かったのか？」

「最悪ですよ」

「そうか、しかしな、お前が茨城に行き、彼女もションボリしていたと聞いた」

「意味が違いますよ。虐める相手が居なくなって、困っていたのでしょ」

「お前が彼女に頭が上がらない、そのような話しも聞いている。ただ、お前、それじゃ情けない

だろう。自分で、そうは思わないのか？」

「叔父貴も知っているでしょう。全て知っているんですよ、美佐は」

「それはそうだが、まあ、これは仕事、諦めろ」

千春が電話をしている相手は、警察庁のお偉方である刑事局長の柿岡周五郎であった。柿岡は千春の叔父にあたる。千春の家と美佐子の家は隣同士であったので、柿岡も美佐子を小さな時から知っていた。

今、こうして話している二人であったが、そもそも警察に来いと、千春に声を掛けたのは柿岡であった。子供の時から千春を見ていた柿岡は、当初、千春は警察には向かない男だと思っていた。

小さい頃の千春は素直に人の話は聞くが、あまり自分からは話さない。それでいて神経質かと言えばそうでもない。あまり悩んでいる様子もなく、それどころか話しの合間に見せる人懐こい笑いには、何か人を和やかにするものを持っていた。何処にでもいる普通の子供というのが、柿岡の見ていた子供時代の千春であったが、その分、警察に必要とされる闘争心や力強さは感じられなかった。

その千春が鋭い分析力を持っていると気づいたのは、千春が大学に入り、柿岡の家の近くから、大学に通うようになってからであった。学生で金のないのは誰でも同じである。柿岡は、何かと理由をつけては、千春を家に呼び食事を振る舞っていた。そのために話す機会も増えた。それからであった。人の思いつかないような事を、平気で考える千春に、柿岡はオッと思うものがあった。いや、面白いと思った。

そのときから柿岡は、千春の持つ一種独特な考え方や、その元になっている分析力などは、十分警察の捜査でも使えると考えるようになった。ただ、その独特の考えの為か、千春が就職を決める頃は、丁度就職氷河期と重なった事もあり、千春も就職には手を焼いていた。それを知った柿岡は、千春に警察官僚になるのを勧めた。

三

しばらくすると美佐子は、千春のおかしな行動に気づいた。

「千春、お前時々、姿を消すな。何をしている」

「やめろよ。幾ら二人の時でも千春はないだろう。まあ、美佐の方が階級は上、それは認める。だからといって呼び捨てはないだろう、せめて小柳君とでも呼んでくれないか」

「小柳君？ 馬鹿らしい」

「なら勝手にしな」

「それより、何故、時々姿を消す。女でも出来たのか？」

「それこそ馬鹿を云えだ、工作中だぞ。仕事があるから外にでていただけだ」

「私は、あんたの上司だ。理由をいえ」

「厭だ、話さない。僕を首にしたいならすればいい」

「そうか、それなら勝手にしな」

いつも二人が部屋に居るときは、こんな調子であった。

美佐子が赴任して一ヶ月が過ぎた。すでに暑い夏も終わり高萩の町には秋風が吹き出していた。千春は、十時位に署をでると市内を横切って山岳地帯へと車を向けていた。夕方になると千春は署に戻ってきた。

「千春、山の中で何をしてきた」

帰った千春に美佐子が、冷たい表情で問うた。

千春の顔が曇った。心の中で此奴、やったなと思い舌打ちをした。

「国道四五一号を進むと袋田まで行ける。……何を企んでいる？」

「お前な、車両に発信器をつけたな」

美佐子が小さな口許に笑みを浮かべた。

「部下の行動を知る。それも大切な上司の役目だからな」

「あのな、部下、部下というけど、ついこの間までは同期だろう」

「甘いな、階級が一つでも上がれば私はれっきとした上司。だいたい上司に向かってお前はないだろう、堂本さんと呼べ」

千春の顔が、少し癩癩かんしゃくを含んだ顔にかわった。しかし、警察という組織に居るからには、階級が上がった美佐子が上であるのは間違いない。

「……わかりましたよ、堂本さん」

「ところで千春、何の為に、あんな山の中に行った。今日だけじゃない。時折行っているな」

そこまで知られているのでは、無理に隠す必要もなかった。

「立ち枯れだ、立ち枯れを調べている」

「何だ、それは？」

立ち枯れと聞き美佐子は、腑ふに落ちなかったのか、くっきりとした細い眉を寄せて千春を見つめた。

「仕方ないから話す。ただ、僕の邪魔じゃまはするなよ」

「いつ、私が邪魔をした。お前の邪魔をした事はない」

「そう剥きになるなよ。仕事の邪魔はしないが、私生活の邪魔は多いにしている」

「私生活の邪魔？ そのような事はした覚えはない」

「……僕が、山崎美子と歩いていたら、お前紹介しろと割り込んできた」

「あれは邪魔ではない。お前がふらふらした男だから、私がしっかりと監視をしているだけだ」

「別に美佐が僕を監視する事もあるまい。美佐が現れるとうとうしい」

「彼女といちゃいちゃ出来ないからか？」

美佐子は目立つ女だ。世間一般に言わせれば美女なのであろう。小顔のなかに大きなくっきりとした二重瞼の目、すっと通った鼻筋、笑えば綺麗な歯が覗く。此といった難のない清冽な顔立ち、そんな容姿をした美佐子がデート中にしゃしゃり出て、千春に馴れ馴れしくすれば、相手

の女性もおもしろくはない。それで旨く行かなくなったのは、一度や二度ではない。

美佐子に、その意識がなくとも、千春にすれば迷惑であった。

「いいか、私は、お前の両親から”美佐ちゃん頼む”とお願いされた。だから仕方なく監視をしている。好き好んでお前の彼女に逢っているわけではない。御両親に対して報告の義務が私にはある」

「僕もすでに三十を過ぎた。お袋達が何を言ったか知れないが、昔の僕とは違うけどな」

「何処が違う、寝言を云うな」

駄目だ。いつもそうだが、美佐子には口ではかなわない。いや、力でも、おそらく負ける。美佐子の父親は、合気道の師範で道場を構えていた。美佐子は、その父に小さいときから合気道を仕込まれている。見かけからは想像もできない程の腕前を持っている。

一方の千春は、いまでも小柄であるが、それは子供の時から変わってない。名前も小柳千春と女のような名前のうえ、小柄でやさしそうな顔つきをしていたため、子供の頃は良くからかわれもした。それを何かと助けていたのが美佐子であった。美佐子は小さいときから大柄であった。まして中学生くらいまでは、発育にしても女子の方が早い、二人の身長差は今よりも大きかった。体格的な事もあり千春にとっては、子供の頃から頭の上がない存在が美佐子であった。しかも、家が隣同士であったため、互いの性格なども知り抜いている。それが、また千春には厄介でもあった。

子供の時に染みこんだ苦手意識は、大人になっても、なかなか消えないものである。それは解るとしても、美佐子の前では、少々情けなく見える。

「くだらない話は、そこまでだ。その立ち枯れがどうしたというのだ？」

「高萩から袋田に向かう途中の山の中に、誰も近づかないような小さな沼がある」

「今日も、そこに行ったんだな」

千春が頷いた。

「その沼の周辺が枯れているのか？」

「そうだ」

「千春が、なぜ立ち枯れを調べる。管轄違いだろう」

「警察は、なにも犯罪者だけ捕まえるのが仕事ではないだろう」

道案内から、住民の困り事、有害動物の捕獲と幅広い仕事をしているのが警察である。

「まあ、それはそうだが、しかし、立ち枯れは違うだろう」

「柿岡の叔父貴に頼まれた」

「柿岡の叔父様に？それで千春は茨城まできたのか？」

「いや、違う。叔父貴から話しがあったのは、此処にくるのが決まってからだ。茨城に行くなら仕事の合間で良いから、少し調べて欲しいと頼まれた」

「すると千春は、何で茨城にきた？」

「それは聞かなくても解るだろうに」

「私から逃げたつもりか？」

「……そうだ、悪いか、美佐は僕にとっては天敵のようなものだ」

「別に悪くはないが。まあ、おあいにく様、相棒が欲しかったのに私で」

千春が口を”へ”の字に結んだ。そのとき刑事課長の杉が部屋にやってきた。

杉が、手でお猪口を翳すまねをして「春さん、今夜どうだ」と誘ってきた。

「僕は構いませんが、課長のところ、今は忙しいのでは？」

「大丈夫だ、例の郵便局に入った強盗は逮捕した。まあ、今日は、その祝賀を兼ねて、過ぎ去る夏に乾杯をしようと思う。堂本さんも、よかったら一緒にどうぞ」

「あら、よろしいのですか？」

美佐子の口調が、さっきまでとは打って変わり女らしい言葉になった。

「勿論、かまわないですよ」

「有り難う御座います」

美佐子は丁寧に挨拶をしていた。その変わり身の早さを、千春は呆れた思いで眺めていた。

夜の八時になった。署から、それほど離れていない居酒屋に、刑事課の面々が集まり酒を酌み交わしていた。杉の横に千春達の席は設けられていた。

既に美佐子も刑事課の面々とは親しくなっていたので、席を立てて課員に酒を勧めていた。

「春さん、いい娘ではないか？」

「美佐がですか？」

「そう、春さんから悪魔だと聞いたときには、どんな娘がくるかと気を揉んだが、明るい素直な娘さんではないか。署内でも評判だぞ」

「……皆さんにはね」

「春さんには辛く当たるのか？」

「そんな事もないですが、とにかく苦手ですよ」

「春さんの幼なじみだろう。春さんの事は何でも知っているという事か？」

千春が仕方なさそうに頷いた。杉も大分酒が回ってきたのであろう。千春の困った様子などには無頓着に、好き勝手をいっていた。

「いいか、春さんみたいな性格をした男には、少々、利かん気な娘の方が合う。ちょうど良いと俺は思うが？ それにあれだけの別嬪さんなら文句はあるまい」

「課長、勘弁してくださいよ」

「どうしてだ、春さんの後を東京から追ってきたと、みんな噂している」

「そんな事はないですよ。それにあれだけは駄目です」

「春さん、手をつけて逃げているのではないだろうな。警察というところはだな、とりわけ署内の男女関係には厳しいぞ」

「冗談でありませんよ。いうなれば僕の天敵です。そんな女に手を出しますか？ いえ、それに万一、手など出そうものなら、僕は美佐に殺されますよ」

「おいおい、それだけはやめてくれよ。警察官同士が痴情の纏れで殺人などとあっては洒落にもならない」

大杉がにやにやしながら話した。

「あり得ないですから、御心配なく」

大杉が笑い出した。千春は、少し赤らんだ顔の眉を寄せていた。

翌日の刑事課分室。

「昨日の話の続きだけど、何処まで千春はその沼を調べた」

「水質分析、土壌分析、そこまでは終わっているが何もでなかった」

「何もでてない？ 害虫は」

「定期的に沼に行き、調べては見たが害虫の発生もない」

「白鷺しらさぎや鶺鴒うはいないのか？ 沼があるんだろう」

鳥が大量発生して植物に糞を落とすと、松でも杉でも枯らしてしまう事がある。山中の沼であれば、これらの野鳥が住みかとするには恰好の場所である。

「ないな、植物を枯らすほどの大量の糞があれば、すぐにわかる」

「立ち枯れの原因となると、その他に色々あるな」

「イノシシ、鹿、猿、酸性雨」

「それらは？」

「今のところ考えられない」

そうかと美佐子は頷くと、

「……その付近で何か工事などはしてないのか？」

「最近はしてない」

「前には？」

「だいぶ前に花貫ダムが造られているが、これは現場から可成り遠い。この工事の影響は考えられない」

森林の立ち枯れは、環境の変化によっても起こる。例えば、本来浸透する筈の雨水などが、道路、護岸工事、ダムなどの建築物により、水の流れが変わった場合などである。環境が変わると地表面を流れていた水により、生きてきた土壌微生物どじょうびせいぶつなどに変化が起き、それが原因で植物の根が腐ったりする。

「酸性雨は？」

大規模に森林を立ち枯れさせる原因の一つには酸性雨がある。

酸性やアルカリ性を示す単位にpH値がある。この値では七が酸性とアルカリ性の中間値で、中性の性質を示す。七より小さい場合が酸性領域であり、七より上がアルカリ領域を示す。また、酸性やアルカリの強さは七より離れるほど強さを増す。

普通に降る雨を測定すると、僅かながら酸性を示す。これは大気に存在する二酸化炭素を取り込み、弱酸性の雨となって降ったりする為である。

酸性雨と呼ぶ場合は、一般的にpH値で大凡五・六以上の強い酸性を示したものを酸性雨と定

義している。強い酸性を示す原因は、車や工場等から排出される色々な化学物質を雨が取り込む事によって起こる。立ち枯れが広範囲に起きているようであれば、酸性雨の影響を考えないとならない。

「立ち枯れは限定的、それに山の中だ。国道からも離れている。工場なども付近にはない」

「遠いか、近いかは余り関係はないだろう。気流とか風向き、地形の特性などによって濃度の高まる場所は違ってくる」

「それはそうだが」

「立ち枯れの状態は？」

「沼の周囲だけに限られている」

沼の周囲だけに限られているとなれば、酸性雨というより、やはり千春が疑っているように、何か沼が悪さをしていると考えるべきだろうと美佐子も思った。

「現場を見てみたいな」

「しょうがない。次のとき連れて行くよ」

「次って、いつだ」

「特に決めてはいない」

「だったら、すぐだ」

「暑いぞ、少し待てば涼しくなる。それでよいだろう」

「暑さは関係ない、すぐにだ」

「……わかったよ。二、三日のうちに行く」

四

数日後、二人の姿は高萩の山中にあった。車を山中の道路側に停めると、そこから細い山道を三十分位は歩かないとならない。

「美佐、だから言ったろう。スカートなど履いてくるなと」

「厭だよ。ズボンは嫌いだ。それでなくても、そんな物、履いて外に出たら、何しに行くと思われるだろう。私だって、署に来てそんな日が経ってないんだから周囲の眼は気になる」

「ほう、美佐でも一応人眼を気にするのか？」

「当たり前だろう。千春のように、よれよれの服を着る趣味は私にはない」

「恰好ばかりつけていても、中身がなかったら同じだ」

「あら、御免なさいね。私は中身も有ってよ。ないのはあんたでしょう。中身がないんだから、責めて外見ぐらいはシャキッとしたり」

「大きなお世話だ」

そんなやり取りを続けながら、山中を進むうちに、二メートル位の急斜面を登る場所にきていた。

「昨日、言った筈だ。途中一カ所、急斜面があると」

美佐子の履いているタイトスカートで登るには厳しい場所であった。

「千春、先に登り横を向け」

「どうするんだ」

「だから、こっちは見るな」

「勝手にしな」

千春は先に、その急斜面を登った。しかし、さすがにこの斜面は女一人では厳しいと思い美佐子に手を伸ばした。

「こっちを見るな！」

額に汗した美佐子は、そういうとタイトスカートの裾をまくった。

「おい、何を見ている。手を差し出すなら、顔を向こうに向けろ」

「わかったよ」

仕方なく千春は土手の下に手を伸ばし、顔を横に向けた。

美佐子の手が伸びてきた。千春は、その手を、握ると美佐子を傾斜から引き上げた。

「おい、見たろう。私のパンツ」

「見る分けないだろう。お前のパンツ見てどうする」

呆れたように千春が美佐子を見ながら口をとがらしていった。

「変な気、起こすなよ」

「ほう、美佐も僕を男だと認めているのか？」

「あほ。思うか。しかし、私は魅力の有りすぎる女だからな。妙な気を起こさないとも限らない」

「まあ、自分で言っているなら世話はないよ」

呆れたように千春がいった。

しばらく進むと、山間が開けてきた。遠くからでも深緑の杉林の中に、灰色をした立ち枯れをした杉の木が見えた。

「あの先が沼だな」

「そうだ」

すぐに沼が見えてきた。林の窪地に出来た沼、そのような感じを受ける沼であった。沼は楕円に近い形をしている。ざっと見た目には長辺側で二百メートル程度、短辺側百二十メートル位であろう。山中にある無名の沼としては割と大きい。

しばらく、美佐子が眼を細め、沼や周囲を見回した。

「なるほどな。これでは最初に有害物質を疑うのも無理もないな」

美佐子の目に飛び込んできた風景は、沼の周囲の杉などが、きれいに沼の周囲に沿って十メートル位の幅で枯れていた。誰が見ても、沼が何か悪さをしているとしか思えない枯れ方であった。

「これで沼の水からも周囲の土壌からも、おかしい物質は検出されてないのか？」

「何カ所かでサンプルを取り、科捜研で調べたが、何も出なかった」

美佐子は沼の周囲を歩き出した。千春も、それに続き歩き出した。時折、周囲に目をやったり

地面を調べたりした。

「動物が木をかじった様子はないな」

「この辺は居てもイノシシくらいのもの、鹿や猿は生息してない地域だ。居たとしても動物が沼の周囲の木だけを一齐にかじる。それはないだろう」

何度も来ている千春が、そのような物を見逃す筈もない。害虫などによるものであれば、きれいに沼を中心に立ち枯れが広がる事もないだろうと感じた。

これといって手掛かりになるような物も、美佐子が見る限りでは何もなかった。そうすると、やはり疑わしいのは沼であった。

「ここの水は、雨水の溜まったものか？」

「いや、そうではない」

「ここは沼だろう、違うのか？」

「雨水なども溜まるだろうが、すぐ近くに川がある。その川から水が来ている」

「すると大雨なら、この沼の水位は、すぐに上がるな」

「いや、そうでもないと思う」

「どうして？」

「この沼は川から入る水路と川に出る二つの水路を持つ。この沼は、いわば川のバイパスのようなもの。一旦、川から別れた水が低地に溜まり沼を作ったが、沼の水が、また低地を探し流れ出た先には、元の川があった。土地の高低差から、そのような作りをしている」

「すると沼の水は、循環しているんだな」

「そうなる」

「それじゃ、逆に沼の水の影響は考えにくい」

川から流入水があり、また、川に水が戻されていれば、たとえ何かの拍子に沼が汚染されても、それらはすぐに川に流されていく。

「しかし、確認した方が良いに決まっている」

千春は、少しむっとなった。

千春とて、それは考えた。しかし、一時的に毒性の高い物質が沼に入れば、いくら流れがあるとはいえ、周囲に影響を及ぼさないとも限らない。そのために調べていた。その結果として、沼の水質にも周囲の土壌にも異常がないと言えるのである。

沼の構造から簡単に否定をされては千春も不機嫌になる。尤も普段であれば、この程度の事で不機嫌になる千春ではなかったが、相手が美佐子だと、千春もすぐに剥きになった。

「怒るなよ。別に、千春のしている事に文句を言った訳ではない。元々、千春は理工系の人間、一つ一つ疑問を潰していくのが千春のやり方だろう」

「そうだ。それが僕のやり方だ」

「幾ら出の水路が有っても川の水位が高ければ戻りきらない。沼の水位が上がり、周囲に水が回ったとも考えられるだろう」

「沼の縁から水面までは一メートル以上はある。この縁を水が乗り越えるには相当、川の水が増

えないと無理だ。そんな事は度々あるまい」

「それでも可能性はあるだろう」

「それはないとはいえない。しかし、この沼は川の一部と考えれば一時的に水位が上昇しても、川の水位が下がれば一緒に下がる。大雨などで川の水位が上昇しているのは精々数日。その程度の日数、水に浸かったくらいでは大きな木は枯れはしない」

二人は枯れた木のそばに立っていた。

美佐子は、履いていた運動靴で地面を何度か蹴ってみた。距離は沼から十メートルぐらいの場所である。人が歩いて踏み固めるような場所ではない。まして、これまでは杉が育っていた場所、葉などが落ちて腐葉土になっているのであろう。わりと柔らかい地面であった。全体の地形が掘り鉢状をしている。沼の縁を乗り越え、立っている場所まで水が来るには、二メートル位は沼の水位が上昇しないと無理だと感じた。

この沼に繋がる川の大きさや流れなどについて、美佐子は知らないために、何とも判断のしようがないが、その辺の調べを怠る千春ではない。その千春が否定をするなら、水の上昇による考えは無理なのだろう。

おかしい枯れ方をしていると、再び周囲を見た。

「なあ千春、こんな人里離れた山奥にある沼の異変に、柿岡の叔父様は、何故気づいた」

「叔父貴が、茨城の出身なのは美佐も知っているな」

「それは知ってる、この近くだったのか？」

「ここからそんなに離れていない日立市という町の生まれだ」

千春が美佐子に語った事によれば、一昨年に地元での同窓会があったときに、柿岡は狩猟をしている友人から、この沼の話しを聞いたという。柿岡は、その話しを聞いたとき、柿岡の生まれた日立市から、隣接する勝田市にかけては戦中には中小の軍事工場が多くあったのを思い出した。しかも、その日立市から勝田市の海岸線は、終戦直前には千葉の九十九里とあわせて、米国が上陸するには尤も適した砂浜として、日本軍は米軍の上陸にそなえ、警戒をしていた。そのため終戦まで勝田市には、数千人の兵士が駐屯をしていた。

この地では戦後のどさくさに紛れ、兵士により山中に何かが運び込まれたらしいなどの噂が流れた。その噂を柿岡も、両親から聞いていた。

柿岡は、沼の立ち枯れの話をして友人から聞いたときに、それを思い出して旧日本軍の変な薬品や化合物が山中から出てきて、住民に被害が出ては堪らないと思った。それに昔の話は別にしても、目立たない山奥である。よからぬ物が不法投棄されている可能性、そのような考えもあった。

そんな折りに千春が茨城に転勤を願い出たのを知り、それを幸いに、少し調べてくれないかと千春に頼んでいた。柿岡が心配したような化学物質などは検出されなかったのは、すでに柿岡には伝えてあると千春はいった。

「それじゃ、もう調査は終わったのか？」

「一応は済んでいる。ただ、この枯れ方が気になる」

そう話す千春の横顔を美佐子はじっと見ていた。男にしては長い睫毛を持つ、目も丸みを帯び

た優しい目である。元々が優しい男。それが千春である。しかし、千春はただの優しいだけの男ではない。結構度胸も据わっているし、大胆な面もある。見かけほど柔な男ではないのを美佐子は知っている。それがあから千春に対して、美佐子は何でも平気で言える。

五

朝夕と昼との寒暖の差が大きくなると、季節は流れ込むように秋へと変わっていった。すこし肌寒く感じる暗い事務所で、武内一成は数年前の事を考えていた。当時の武内一成には焦りがあった。

武内は三年前まで経済産業大臣として権力の中枢に座っていた。ところが一連の年金不祥事や官僚天下り問題などが発端となり、急激に民意は自由民優党から離れ総選挙で惨敗をするに至った。先の参議院選で過半数に届いていなかった自由優民党は、その日を持って長らく続いた政権の座を、野党であった民誠党に明け渡す事になった。

これまでの人生に於いて、武内は凡そ挫折と云うものを知らずに、大臣までのし上がってきた男である。経済産業省エリート官僚から三十代の若さで自由民優党候補として選挙に臨み当選。その後も党内最大派閥をバックとして自由民優党副会長などの党要職を歴任して、先の内閣では二回目となる経済産業大臣に就いていた。何れは総理大臣との声も周囲から漏れ聞こえていた時期の政権交代であっただけに悔しさは人一倍大きなものがあった。

そんな武内に追い打ちをかけたのが、人生で始めて味わう挫折と屈辱であった。政治は数の論理。言い尽くされた言葉であるが、数を失う事がどれほど辛いものであるかは実際に味わえば、否応なしに骨身にしみてくる。

与党時代、それまで何かに付けすり寄ってきた官僚は、政権を失った日を境にぴたりと足が遠のいた。野党に転落して間もなく武内は、委員会資料について省に説明を求めた。与党時代であれば省は、局長以上の幹部職員が説明に飛んできて細心の注意を払って説明をしていた。立場が野党になると説明に赴いたのは薄っぺらな資料を携えた課長クラスの職員。それも説明の仕方までが、がらりと変わっていた。通り一遍の説明や要領の得ない説明に始終する職員の姿に、武内は少なからず驚いた。

当初は我慢できずに声を荒らげもした武内であったが、職員も馴れたものである。神妙な顔をして聞いてはいるが、一向に態度を変えようとはしない。怒りから、ついぞ拳を握りしめたのも一度や二度ではない。やっとの思いで気持ちを納めた記憶は、今でも鮮明に残っている。しかし、時間が経つに従い、そのような事にも馴れてきた。与党と野党の違い。悔しさは消えずとも野党になったのでは、現実として受け入れざる得なかった。

官僚の変節、当初は、さすがに戸惑いもしたが、今となっては、どうでもよい事に思えた。ただ、これまで与党として、また政権の中枢で自分達の思いのままに、法案の作成や決定をしてきた武内にすれば、政策決定権を失った立場には、それ以上の虚しい物を感じずには居られなかった。

この状況を打破するには、再び政権に付くことである。当然であるが武内に限らず、自由遊民

党の最大目標は、再び政権を取り戻す事にある。しかし、新たに誕生した早川内閣は、高い国民の支持率を受けたまま、地球温暖化防止の為の炭酸ガス二十五%削減案を引っさげて、華々しく国際舞台にも打って出た。新政権は国内だけでなく、国際信用を高める努力にも余念がなかった。益々高まる国民の支持に武内は忸怩たる思いで、その様子を見ていた。

野党に転落した当初、^{せいけんだつかい}政権奪回を強く誓った武内であるが、一度、国民からノーを突きつけられた政党が、それほど簡単に^{せいけんだつしゆ}政権奪取ができるほど甘くないのは、伸び悩む政党支持率が雄弁に物語っていた。武内は、このまま従来通りの自由遊民党の政策を訴え続けても、再び政権中枢に振り返るのはできないと思った。

しかし、不思議なものである。よく考えてみると自由遊民党は先の総選挙により、党内有力大物議員の落選が相次いだ。^{やとうげや}野党に下野したとはいえ、相対的に武内の党内での地位は上がり力は増大している。もし、次の総選挙で自由遊民党を勝利に導くような働きができれば、そのときは総理大臣の椅子が転がり込むかも知れないのであった。総理大臣への最短の道が用意された。そう考えれば下野を悲観する必要もなくなった。

武内は、でっぴりとした大柄の身体に、如何にも精力的と思わせる脂ぎった丸顔、意志の強さを思わせる黒々とした太い眉と瞼の垂れた三角目、そして大きな造作の鼻と口を持つ代議士である。その三角目に、失われていた光が、その時から戻りだした。

総理になる。それには何としても自らの手によって、次の選挙で党を勝利に導く必要があった。次の総選挙で政権を奪回する。残された期間は三年。

一つの^{きしかいせい}起死回生策を頭に描き、自ら総理大臣になると武内が心に決めたのは、政権交代が起きて半年が過ぎた頃であった。それから、すでに二年の歳月が流れた。いよいよ来年の秋には衆議院は満期となる。武内が待ち望んだ選挙の年であった。そのために武内は、これまで着々と準備を進めてきたのだと自分を奮い立たせていた。

待つのは永かった。しかし、二年の歳月は武内に有利にも働いてきている。なんととっても政治情勢が変わってきた。自由遊民党が大敗した一因には、当時起きていた世界的な不況もあった。その影響は新政権になると益々強まっていた。そのために、政権運営に不慣れな事も手伝い民誠党は、不況下で藻掻き苦しんでいた。高い支持率を誇ってきた民誠党も、今では大きく支持率を落としていた。運も我に味方をしてきた。そう思うと武内の脂ぎった顔には、薄ら笑いが浮かんだ。

坂口康男は、今年二十九歳を迎える、長身の痩せた男だった。坂口は紅葉には少し早い袋田の滝を見ていた。袋田の滝は茨城県大子町にある大きな滝で、茨城の観光地の一つになる。

坂口は袋田の滝が好きだった。轟音響く滝の近くで、時には冷たい水飛沫を浴びながら頭を空っぽにするのも良かった。遠くから、白い糸のように流れる滝と自然の香りの中に身を置き、誰にも邪魔される事なく物思いにふけるのも良かった。滝は、子供の時から坂口の一番好きな場所であった。その一番好きな滝を前にしても、今日の坂口の顔は沈んでいた。

坂口は二年ほど前は、北山産業グループに務める会社員であった。会社員といっても仕事の内容は、北山産業筑波研究所で食品冷凍技術の開発をする研究職をしていた。

――あれから二年か……。

坂口は心の中で呟くと当時を思い出していた。

その朝、坂口は上司である堀田に呼ばれ誰も居ない会議室の一室で、堀田と話しをしていた。堀田の話は北山産業を辞めて、堀田が新たに作る研究所に移籍をしないかとの誘いであった。

北山産業は、それほど世間に名前が浸透した企業ではないが、それでも物流会社としては中堅どころに位置する。数年前には東証一部に上場も果たしている。自前の技術開発をするために筑波に研究所もあり、そこに勤める坂口は。今の仕事に不満はなかった。

堀田からの話しがあっても坂口は、北山産業を辞めるつもりはなかった。断ろうとした坂口の様子に気づいた堀田が続けた。これは北山産業も了承している。いや、了解というよりも会社の意志だと坂口に告げ坂口の退路をたった。ただ、会社が何故、了承したかとの詳しい話しは堀田からはなかった。

坂口は、堀田の言葉を何処まで信用してよいのか解らずに、数日、考えさせて欲しいといった。その間に移籍の話は坂口だけでなく、冷凍関係の同僚研究員である山下や早野までが了承していたと知った。所内の様子をつぶさに観察した坂口は、やはり堀田の言った通り、北山産業側も承知していると気づいた。

北山産業筑波研究所は、研究員、数十名の、それほど大きな研究施設ではない。冷凍関連の技術者は、堀田を頂点とした山下、草野、坂口の四人体制であった。その四人全てが新たに設立される研究所に移籍すれば、北山産業筑波研究所から冷凍関連の研究体制が、すっぱりと抜け落ちる事を意味していた。そのような状況では、仮に、一人、このまま北山産業に残っても、おそらく冷凍関連の研究は続けられない。

坂口の実家は茨城県の大子町にある。坂口は、袋田の滝の凍結を見て育った。子供ながらに、滝の凍結は凄いと思った。それが興じて冷凍というものに興味を持って今日に至っている。坂口は冷凍関連の研究を続けたかった。坂口は、何か不自然なものを感じながらも堀田からの話しを受け入れた。

しばらくして坂口は堀田の下で、ある研究を始める事になった。堀田から渡された、手書きの古い論文を眼にしたとき坂口の表情は曇った。

あれから二年が過ぎた。坂口は自分は誤った道を歩いていると感じていた。

坂口は、堀田の下で新たな研究を始めるとき、自分自身を納得させる理由を探した。見つかった。それはおそらく試験を正当化するには、余りに小さな言い訳であった。しかし、その小さな言い訳で自分を納得させる事ができなかつたら、堀田の下での試験は続けられなかったと思った。

「今年の冬も沢山の人を、この滝に集め喜ばせる……」

ずっと滝を見つめていた坂口が、何かを決心したように呟いた言葉であった。

第二章 袋田の滝

六

「なあ、千春、たまには私を何処かに案内するという気にはなれないか？」

「おっと、それはデートの誘いか？」

「馬鹿か。折角、茨城の自然豊かな場所に赴任してきたんだから、その辺を案内したらと言っている」

「何故、僕が美佐を案内しなければならない」

「千春が先に茨城に来た。そして私は後からきた。理由はそれ。近間を案内したからといって罰は当たるまい」

あっけらかんとした表情で、美佐子が千春を見ながら話した。くっきりとして細い眉に大きな瞳が、小作りの顔にバランスよく収まっている。たしかに美佐の顔は美しいのかも知れないと千春も思った。ただ、その美しい顔から発せられる声は、千春には悪魔が奏でる声にしか聞こえなかった。

断ろうとした。しかし、そのとき千春は、ふと例の沼の近くにある袋田の滝なら自分でも一度は、見ておきたいとの思いがした。千春は自分の気持ちを悟られないように、仕方ないとの素振りそぶりを装い美佐子の言葉に頷いた。

翌日の休みを使い、千春は袋田の滝に美佐子を案内した。

袋田の滝は和歌山県那智の滝、栃木県華厳の滝とともに日本三大名瀑の一つに数えられる高さ百二十メートル、幅七十三メートルの滝で四段の岩場を流れ落ちる滝として知られている。

袋田の滝は別名、よんど たき四度の滝とも呼ばれている。これには二つの説があり、四段の岩場を水が流れる落ちる姿から、四度の滝と称したとする説。もう一つは西行法師が四季に一度は訪れないと、この滝の良さは解らないと言った事から、四度の滝と呼ばれているとする説である。

春には新緑に包まれた美しさの中に白く糸を引いたように浮かぶ。夏には豪快な水飛沫を飛ばし涼しさを醸し出す。秋は紅葉が溪谷を彩り、滝を引き立たせる。冬には、凍り付いた滝が人々を魅了する。西行法師がいったとされるように、四季折々で楽しめる観光地でもあった。

この袋田の滝のある大子町は茨城県北西部、福島県との県境にあり面積は茨城県の約二十分の一を占める大きさを持つ。面積の約八割は阿武隈山系と八溝山系からなる山岳地で、山間を流れる中小河川が多く、これらは町の中央を流れる久慈川へと注ぐ。群馬や栃木などの北関東各県に比べると雪は少ないが寒冷的な地域でもある。その為に冬は滝が凍結する。

もっとも残念ではあるが暖冬の影響からか、時が平成に入ると袋田の滝が全面凍結する事は、希にしか起きなくなった。部分凍結でも、また違った楽しみ方があるが、やはり全面凍結の魅力にはかなわないのか、滝が全面凍結しないと冬季の客足が落ちるのも仕方なかった。

千春が、ここで美佐子の義理立てをしようと考えたのは、大子町は千春達の住む高萩市と隣接している。そのために距離的にも近く訪れるには手軽である。午前中に滝を美佐子に見せて、昼食でも一緒に食べれば、それで十分義理は果たせる。千春にしたら休日の、午後まで束縛される

のはまっぴらであった。

袋田の滝は、四季の中で尤も人が多く集まる紅葉の時期を迎えて、多くの観光客で賑わっていた。駐車場に車を停めた千春と美佐子は、そこから滝の見学のために作られてる観瀑台^{かんぱくだい}に行くために滝川の上流に向かって歩き出した。

第一観瀑台付近にくと二人の前に、滝が迫ってきた。二人とも、袋田の滝に来るのは始めてとあって、間近から見られる滝に見入っていた。季節もちょうど良かった。周囲の赤や黄色に色づいた木々の中で幾重にも白い筋を曳く、滝の雄大な姿に二人とも一瞬、言葉を失っていた。

しばらくして「凄いね」と美佐子がいった。

そうだなというように千春も素直に頷いた。そのとき、「この滝が凍ったら凄いね」と、近くにいた年輩の観光客に手を引かれた子供の、話す声が耳に入ってきた。

「そりゃ、凄いよ。暖冬で最近は何も凍らないが、昔は良く凍っていたよ」

「でも去年は、凍ったって。今年も凍るといいね」

「滝が凍ったら見に来るか？」

「見たいよ」

観光客の話聞きながら、千春は滝が凍ったときの姿を、漠然と思い描いていた。

この滝には新旧二つの観瀑台がある。新しい観瀑台に三つのデッキが作られている。新しい観瀑台に行くには、もともとある観瀑台裏手にあるエレベータを使えば行ける。

「上まで行って見ようか？」

そう誘ったのは千春からであった。

エレベータで約四十メートルを登ると、そこには第二観瀑台があった。ここには三つのデッキがあり、階段で、その最上段まで登ると第一観瀑台より五十メートルくらい高い場所から滝が見える。

二人は観光客の中を縫って、最上段のデッキに立っていた。

「珍しいな千春が、ここまで連れてきてくれるとは？」

滝を観ながら、ぼそっと美佐子が呟いた。千春の性格は知り抜いている。最初の観瀑台から滝を観れば、さあ帰ろうといい出すとだけ思っていただけに、美佐子は少し意外な気がしていた。

「別に、お前に見せたいから、ここまで登ってきたのではないぞ」

言い訳をするように、千春がチラリと美佐子を見た。

四段に岸壁を流れ落ちる滝のために、下からでは滝の上段は小さくしか見えない。しかし、ここまで登ると二つの山が重なる中から、突如として現れる、大量の水の湧き出す所まで、しっかりと見ることができた。

「なあ、美佐、この少し先だ。前に行った沼があるのは」

そう、いって千春は滝の先を指で示した。その姿をちらりと美佐子は見た。やはり、そんな事

であったかと美佐子は少し、きつい顔になった。

千春が簡単に自分を観光地などに連れてくるとは思わなかった。千春自身が、あの沼に絡んで滝を見ておきたい、そのような気持ちがあったと思うと、美佐子は少々腹立たしい気持ちになっていた。それでも滝の美しさは、そんな考えを^{りょうが}凌駕するものがあった。

七

二人は滝から戻ると名物である奥久慈そばを食べる為に、滝の近くにある観光食堂へ入った。

「これで、今日の僕はお役、御免だな、いいな」

そばをつまんだ箸を止めて美佐子が、千春を不思議そうに見た。目と目が合ったとき、これは不味いと思った。案の定、美佐子の口からは、

「なにいつてるのよ。これからが本番でしょう」

そら悪魔が顔を覗かしたと思った。

「これで十分だろう。これ以上は上司に対する接待は不要だ。何が本番だよ」

「そうか、それならこれからは、幼なじみとしてのよしみだな」

「幼なじみのよしみ？」

「そう、数日前にテレビが壊れた。テレビを買わないといけない」

「……今日、呼び出した本当の目的は、それか？」

美佐子が口元に笑いを浮かべ頷いた。

「だったら最初からいえよ」

「素直にいったら、千春は付き合ったか？」

電気店に行くのが目的とわかっていたら、付き合う事はなかったと思った。

「……………」

「それみなさい。上司の権限でも使わなかったら、千春は私には手をかさない。そうだろ」

「当たり前だ」

「どうして、そこまで私を嫌う」

「自分の胸に手を当てて考えて見ろ」

美佐子が^{おど}戯けて胸に手を置いた。

「何も浮かばない」

済ました顔で答えた。

「……そうか。でも僕はいやだ。テレビなんか電気屋さんに頼めば設置までしてくれるだろう。

電気屋さんに頼むんだな」

「嫌だ」

「どうして」

「今日、見たいものがある。買っても配達されるまでには数日かかる」

「我慢しろ」

「嫌だ。幼なじみだろう。そのくらい何とかしろよ」

「あのさ、それが人に物を頼む態度か？」

「じゃ、どうすれば良い」

「……人に物を頼むならきちんと頼め」

「きちんとか、――どうか、このか弱き乙女の為に、手を貸してください」

無表情のまま美佐子がいった。この野郎とは思ったが、自ら頼めばといった手前もある。仕方なく千春は、食事が済むと美佐子を伴って家電量販店へと向かった。

テレビは薄型液晶、省エネルギー型の少し大きめの物を買った。これで済んだと千春が思うと、次に美佐子はエアコンの展示している場所に足を進めていた。

「なんだよ、テレビだけではないのか？」

「テレビは欲しいといった。それだけとはいわなかった」

「エアコンは取り付けが必要、それは僕には出来ない」

「わかっている。エアコンは電気屋さんに頼む。来たついでだから機種を決めて行く」

「あの部屋にエアコンはあったらうに」

「古い物だ、この御時世。国を挙げて地球温暖化の防止に取り組んでいる。省エネ家電に変える。国民の一人として地球温暖化を防ぐ為に協力するのは当たりまえだろう」

「大袈裟だな」

「ちっとも大袈裟ではない。塵も積もれば山となるのが、省エネ」

一応、理屈にはなっている。地球温暖化に協力していると云われれば、表だってそれを駄目だと、反対する理由は千春にもない。

日本社会は人口減少や後発国の技術革新などに伴い、経済の低迷が続いている。しかし、日本は省エネ技術やエネルギー分野では定評のある国である。その技術を使える日本にすれば地球温暖化の問題は、新たな産業を育成する大きなチャンスでもある。新政権は、そこに大きく舵を切ったのであろうと千春は思った。

折からの世界的な不況も手伝い、経済浮揚策を模索して政府は、つい最近も、省エネ器機への買い換えや、化石燃料からの転換である太陽光発電や風力などの自然エネルギー開発分野に、補助金を出すなどの経済支援策をとっていた。

今なら、その補助金で省エネ家電が安く買える。しっかりしている美佐子は、その辺に敏感に反応したのだろう。

「地球温暖化、様々だな」

少し皮肉を込めて千春が言ったが、そんなもので動じる美佐子ではなかった。

「安く買える、こんなチャンスを逃す必要ないでしょう」

「まあ、そうだな。しかし、不思議だな」

「何が不思議なんだ」

「僕らが子供の頃は、地球は寒くなると聞かされていた」

「それは昔の話し、今は地球は暖かくなっているのだから、仕方ないでしょう」

確かに千春が述べたように、数十年前は地球は寒くなると言われていた。それが今は地球は温

暖化である。僅かな時を経て真逆の方向が示されている。どうして、そのように変わってしまったのか、千春は不思議な気がした。

千春と美佐子は、車に液晶テレビを積み込んで、その店を後にした。

八

千春が不思議に思うのも無理はなかった。元々地球温暖化の考えは、地球寒冷化を調べていた過程から生まれている。一九八〇年代中頃まで、一般に地球は寒冷化に向かっていると考えられていた。当時、地球寒冷化を科学的に調べていたら、地球の温度上昇を示すデータが現れ議論が起きた。それが温暖化の始まりであった。ただ、このような議論は始めは学者のものであった。ところが、同じ頃、アメリカが猛暑に襲われた。それについてアメリカは一九八八年六月の上院での公聴会で、猛暑は地球温暖化の影響によると発表をした。

このアメリカ上院での発表が契機となり地球温暖化説は、世界に広まっていった。

現在、地球温暖化を語る場合、^{アイピーシーシー} IPCC なる組織の存在を無視しては語れない。

IPCCとは気候変動に関する政府間パネルの略称で、世界気象機関と国連環境計画との協力の下に、一九八八年に二酸化炭素等の温室効果ガスにともなう地球温暖化の科学的評価を行い、得られた知見を政策決定や広く一般に利用してもらう事を目的として設立された機関である。ただ、IPCCが各国に対して直接政策提言を行う事はない。しかし、国際的な専門家で作る組織であるため、この機関から出される報告書を元にして、各国は温暖化対策を検討しているのが実状である。そのために、IPCCは実質的には世界各国の温暖化対策に、大きな影響を持つ機関となっている。

近年、地球温暖化防止対策と云えば、炭酸ガスに代表される温室効果ガスの削減を良く耳にする。これも、この機関が公表した報告書に気候変動の緩和策として炭酸ガスの削減が取り上げられたからである。

日本は前政権下では炭酸ガス削減に、積極的な姿勢はとらなかった。理由は、炭酸ガスの削減を行えば、産業界や国民に負担が発生し、強いては産業の停滞などに繋がりがねないと考えたからであろう。事実、前政権の炭酸ガス中期削減目標値は、温暖化防止への参加国の中では最下位を争う状況にあった。ところが、二年ほどまえに政権交代が起き、早坂政権が誕生すると、日本の施策は一転した。

新政府は早坂イニシャチブなるものをまとめると、地球温暖化対策に日本が指導的な役割を果たすと宣言をして、炭酸ガス中期削減目標二十五%を目指すとした。しかし、炭酸ガス二十五%削減案は、これまで炭酸ガス削減に積極姿勢を示してきたEU諸国の、中期目標値を上回る厳しい削減目標値であった。

早坂内閣で、この施策のとりまとめに尽力を尽くした男が、現在の環境大臣を務める吉永和宣であった。その吉永が環境委員会を終えると、厳しい表情で大臣執務室に戻ってきた。

吉永は、痩せ気味の体を執務室の重厚な椅子に埋めると、細い金縁の眼鏡を顔から外し無造作

に机の上に置き、なにやら考え込んでいた。

吉永和宣の前職は元環境庁職員、政治の世界に身を置いたのは、吉永が四十八歳の時であるから、十四年ほど政治家人生を歩んだ事になる。

吉永の考えの先には、野党議員である武内の動きがあった。武内は臨時国会も終盤を迎えた、この時期に補欠先任を経て環境委員会のメンバーに加わった。どうして、武内が環境委員になったのか、吉永は気になっていた。

武内が委員となった環境委員会は、主に環境問題や公害問題などを与野党の議員によって扱われる国会に設けられた常任委員会の一つである。当然、吉永は、関連大臣として会議に出席が求められ、説明や答弁をする立場にある。

吉永が武内について考えるには理由がある。吉永と武内は、昔から少なからず因縁のなかにあった。二人は同じ高校の同級生であり高校では互いをライバル視し、二位を競っていたが、当時から仲の良い存在ではなかった。今でこそ大臣の椅子に座る吉永であったが、同級生である武内との比較においては紆余曲折を重ねている。

そもそも吉永の躓きは大学入試から始まった。二人は同じ国立大学を受験したが、吉永は受験に失敗、私立大学に進路を変えた。

政界に入ったのも武内の方が十年くらい早かった。武内は、今でこそ野党に甘んじているが、政界入りをするると早々に頭角を現し、産業大臣や党内での重要ポストなどを歴任にし、大物議員の一人として名を連ねるようになっていた。

吉永は今でも個人的にも武内が嫌いであった。それは、おそらく吉永の僻みによるものかも知れない。大学を卒業すると武内は、当時の通商産業省。吉永は省より一ランク下の総理府外局であった環境庁へ入っている。吉永は、そのときも武内に負けたとの気がした。

政治家への歩みも、主流であった自由遊民党から武内は三十代で立候補、吉永は、当時万年野党に甘んじていた民誠党からの立候補。なぜ吉永は民誠党から立候補したのか。吉永の場合、民誠党の政策や理念に共感したとの明確なものがあつた訳ではなかった。単に当時の大政党である自由遊民党から声が掛からなかった。理由はそれだけであった。

二人は官僚から政治家へとよく似た人生を歩いてきた。それだけに気にしまいと思っても、常に自分より先を歩く武内を意識しない訳にはいかなかった。しかし、人生、何処でどうなるか解らないものである。あれだけ強固と思われた自由遊民党から民意が離れると、あつというまに政権交代が起こり、与野党の立場は逆転した。

このときは吉永も、始めて武内の前に立つ事ができたと、それまでの鬱積うっせきした感情から解き放される喜びを感じた。政権交代で武内の前に立てたのも運が味方をした。強運、そう強運であった。吉永は、時々、自分は強運を持っていると感じる事があつた。

吉永が運というものを考えた時、必ず浮かんでくる一人の男がいた。その男との出会いがなかったら、おそらく自分は、政治家になる事もなければ、大臣の椅子に座る事もなかっただろうと思つた。

吉永が環境庁に入った頃は、まだ地球は寒冷化に向かっているとされていた時代であった。

地球温暖化が人々に知られるようになったのは、一九八八年六月アメリカ上院の公聴会が取り上げてからであった。ところが、それより十年以上も前から地球は温暖化に向かっていると、言い続けていた一人の学者が日本にいた。その学者は神田勇次郎という男であった。

神田は、一八七〇年代から人類の排出する二酸化炭素などが地球を暖める、いわゆる温室効果についての研究を始めた。その結果に自信を深め一九七〇年代末頃には、何れ訪れる地球温暖化を防止するには国や企業は、すぐにでも二酸化炭素の排出を減らず努力が必要だと公言していた。まさに神田が三十数年前に述べた事が、現在、世界をあげて行われている。

ただ、当時の状況は神田にとっては悪いものであった。一九七〇年代末、日本の年号はまだ昭和。日本経済は、それまでの高度成長が終わり経済は停滞期にあった。まして当時は地球寒冷化が広く一般で囁かれていた時期である。神田の地球温暖化説は、周囲から受け入れられるものではなかった。しかし、神田は行動力にとんだ男でもあった。

神田勇次郎は自説である地球温暖化説をひっさげ、度々環境庁にやってきた。それに対応していたのが吉永であった。吉永は神田の話聞き面白いと感じた。ちょうど、その頃の吉永は配属された部署の上層部が、国立大学の学閥によって占められていて私大出の吉永は、出世コースの外に置かれていた。大学受験に失敗したときから、あるいは、武内に負けたと感じたときから、自らを卑下していたのかも知れない。吉永は、自分を取り巻く庁内環境を知ったときに、早々と仕事に対する情熱を失い、出世競争には自ら背を向けていた。

公務員は国から身分を保障された存在である。その組織の中で出世を諦め、開き直った考えを持つ者ほど厄介な存在はない。通り一遍の仕事をしていれば、上司に対しても気兼ねなく、言いたい事も述べられる。庁内での多少の反感や摩擦など、心の萎んでいた当時の吉永にすれば、どうでもよかった。そのような状況のなかで吉永は、神田との親交を深めた。吉永は庁内で、自然現象を一方的に見るのは危険だとして、地球寒冷化だけに捕らわれず地球温暖化にも目を向けるべきだと説いていた。

環境庁全体が寒冷化を前提に、凝り固まった考えの中にいた時代である。吉永は周囲から、奇異な目で見られる存在になっていた。ただ、その事が、後に人生の転機になるとは、当の吉永さえ、当時は思いも抛らなかった。

はからずも吉永の考えの正しさは、数年後には、アメリカ上院が地球温暖化問題を取り上げた事により証明された。それまで吉永の説をこき下ろしていた同僚は立場を失い、変わって吉永とは鋭い洞察力と信念を通せる、ひとかどならぬ人物であるとの評価を、庁内で受ける結果となった。

その後、地球温暖化の考えに大きく舵を切った環境庁に於いて吉永は、温暖化施策の中心的な役割を担った。それからであった。吉永がとんとん拍子に庁内を駆け上がり、後年、その評価を持ったまま政治家に転身したのは。

政治家になってからも吉永は、環境問題に詳しい人物との評価が、いつでも付いて回った。勿論、環境庁にいたのだから、環境問題に詳しいのは当然であろう。しかし、吉永を評価するとき必ず引き合いに出されたのが、地球寒冷化が叫ばれている中で、地球温暖化に注目をしていた

人物としての高い評価であった。そして、その評価をもったまま吉永は、ついには環境大臣となった。

「神田勇次郎と会わなかったら、俺は政治家にはなれなかった」

神田の若かりし頃の姿を思い浮かべながら、小声で呟いた。

第三章 凍った沼

九

今年の臨時国会は十二月十日までとなっている。残すところ僅かになった。

これまで環境委員会に出てきても武内は、これといった話しをしなかった。吉永は武内が時折見せる、鋭い眼差しに触れると、此奴は一体何を仕掛ける気だと用心をしていた。

武内は自由遊民党内でも、やり手として通っている。なにがしかの意図を持って環境委員会に臨んでいる筈だと吉永は思うのだが、なかなか武内は委員会でも発言をしようとはしなかった。

その武内が本年最後の環境委員会となる、今日始めて質問に立った。

委員長から環境部会会議を始める趣旨が述べられた。

「質疑の申し出がありましたので、順次、これを許します。武内一成君」

「自由遊民党の武内一成です。政府が基本としているIPCCに関して、クライメートゲート事件があったのは、御存じだと思います」

クライメート（気候）ゲート事件とは、IPCCの報告書に深い関わりを持つ、イギリスにある研究所のサーバーがハッキングされ、データ改竄を疑わせるようなメールが流失した事件を、アメリカで起きたウォータゲート事件になぞらえて、そのように呼んだものであった。この事件を発端に、IPCCの報告書にある幾つかの間違いなども指摘され、IPCCに対する疑惑が膨らんだ。

いわれた疑惑としては、データを恣意的に扱ったとする疑いや、報告書訂正箇所が地球温暖化を誇張する表現と成っている。あるいは反対意見を唱える人への圧力があったとするなどの疑惑が取り上げられていた。これには国連も対応した。国連は信頼回復のためには、IPCCの報告書の検証を行う必要があるとして特別委員会を設置した。その結果として報告書の信頼は揺らがないものとした調査結果を発表している。

「吉永環境大臣にお尋ねします。政府として、あの報告省の真偽について、どのような調査をしましたか？」

武内の恰幅の良い身体からは、低く通る声が堂々と議場に流れた。

「特に調査はしていません。報告書の一部に誤りが訂正されている事は事実ですが、それとて報告書の基本事項に影響を及ぼすものではないと認識しております」

「IPCCの報告書は、国の地球温暖化防止施策の根幹をなすものですから、そこがぐらついたら国として困るものです。日本政府としても、きちんと調べる必要があると思いますが」

「先生も御承知と思いますが、すでに検証委員会からは、改竄はなかったと報告されています。問題は解決したと、私は考えています」

そのとき吉永は、何となく武内の意図が何処にあるのか、読めたような気がした。

温暖化防止のための炭酸ガス排出規制は、産業界は元より国民に対しても負担を求める政策であり、産業界にとっては内心穏やかでない。しかし、地球温暖化に繋がる環境問題は声を大にして反対をすれば、企業イメージを損なう性格を含む。それだけに声高だかにして政府の施策を、直接的に批判する企業や財界人は限られていた。

環境問題を正面から反対すればイメージダウンになる。それは野党の武内にしても同じであった。しかし、政府が政策の基本としたIPCC報告書の、真義についての疑惑を問うのであれば疑惑は疑惑として報道される。この意味は大きい。

武内は政権を去るまでは経済産業大臣をしていた。産業界の多くは、長らく自由遊民党支持であった。政権が変わったから、即自由遊民党支持から民誠党に支持を変える。そうは簡単にはいかない。産業界にしても民誠党が長期政権になるか、短期政権で終わるかの見極めが必要であった。民誠党が長期政権になるのであれば、影響力を行使するには産業界も、何れは民誠党の支持に回らざる得ない。産業界は現在、その見極めに苦慮していた。

武内の質問はIPCCを表とし、間接的な温室効果ガス削減案に反対するものである。産業界と深い関わりを持っていた武内が、温室効果ガス削減という厳しい状況に於かれた産業界の代弁者になれば、自由遊民党支持を産業界が続ける可能性は強まる。

さすがに抜け目のない男だと思いつつも、少々困った問題を取り上げられたと吉永は気を揉んでいた。

日本では幸いな事に地球温暖化と温室効果ガスの関係を、否定する意見は少ない。しかし、温室効果ガス削減に積極的な姿勢をとらない国などは、元々、このIPCCの報告書に疑問を投げかけていた。これから環境意識を高めようとする早坂政権にすれば、IPCC疑惑問題をぶり返されて、温室効果ガス削減の方針に反感を持たれるような事があっては困るのであった。そのために吉永は慎重な受け答えをしていた。

「幾つもの疑惑が持ち上がったたり、報告書の訂正が行われたりすると、本当に、あの組織は中立性を確保できているのかとの疑問が起きます。政府として重要な法案を決定するのであれば、その基本である報告書の精査は真摯に行うべきと思いますが、吉永大臣の見解はいかがですか？」

「IPCCの報告書は、世界が認めた報告書です。多少、取り扱いに各国で温度差はあっても、地球温暖化と温室効果ガスの関係は多くの国が認めたものです。問題はないと考えています」

政府の人間の立場では、問題があるなどの表現は使えない。政府の人間として当然の答えをした。

IPCCが問題になってから、だいぶ時間が経過している。それを今頃、武内は蒸し返してきた。よほど産業界の支援が欲しいのだろうと、苦々しく思いながら聞いていた。

今日の武内は古い新聞記事などをネタにして追求をしきた。武内にしても、過去の新聞記事程度のもので政府を追及しても、政府を窮地に落とすことなど出来ないのは承知している筈である。事実、武内の質問に対して吉永は、世界の学者が出しきた報告書であり、信憑性は十分有していると建前論を展開する事で十分応戦できた。

「大臣の仰る事は、よくわかります。私も、IPCCの報告書、その物が間違っていると言っている訳ではありません。地球温暖化は実際に起きている。それに炭酸ガスが絡んでいる。それも理解しているつもりです。しかし、IPCCの報告書を元に国として施策を行うのであれば、その組織に突きつけられた疑問に日本政府として、日本国民に対してきちんと説明をする責任があると申しているのです」

IPCCに対する疑惑を国が国民に説明をする。本来、当たり前であるのかも知れない。しかし、それをすれば、IPCCの疑惑問題を国民の間に広げてしまう。国にとっては弊害こそあれ、決して望ましいものではなかった。

さすがに、厭な所を付いてくると吉永は思った。一方、吉永は武内の質問には迫力が欠けているとも感じた。それは何故だろうと思った。武内は、決して報告書やIPCCを否定している訳ではない。いや、問題はないだろうと自らも報告書の正当性には触れている。その辺りから、武内の考えが吉永には解らなくなった。

IPCCへの疑問を呈する事は、普通に考えれば、そこが出して来た報告書に信憑性がないから質問をしている。それが自ら報告書には問題はないと述べるのであれば、武内自身がすでに答えを出している。それでは質問する意味もない。それでも、武内の気の抜けたような質問は続いていた。

武内は吉永の言葉に強く反論をするでもなく、IPCCの報告書は妥当だとしながらも、IPCCに対する、いくつかの小さな疑問を淡々と投げかけていた。

簡単な受け答えである。吉永は答えるのに、何の苦労もなかった。しかし、吉永は答えながら、益々、武内の真意をはかりかねていた。

他方、武内は質問に立ちながら、吉永の戸惑いがはっきりと見えていた。

——吉永、おかしい質問に見えるか？ これでいいんだよ。地球温暖化を訴えるIPCCの報告書まで俺は否定しない。いや、できない。だから安心して答弁しなよ。

金縁の眼鏡が気障とも見える、痩せ気味の整った顔立ちの吉永を前に、心の中で吉永をあざ笑う武内の姿が、そこにあった。

武内との静かな論争があってから、数日後には、その年の国会は何事もなく平穏なうちに閉幕した。

十

日本列島は新たな年を迎えていた。穏やかな日々が続いた松の内が終わると、いつもと変わらない日常生活が、人々の上に舞い戻ってきた。

今年の冬も暖冬であるとニュースなどで盛んに報じられていたが、正月休みを過ぎた辺りからシベリア寒気団が関東上空を覆うと、千春達の住む高萩でも日々寒さが増していた。折から袋田の滝が全面凍結をしたと、早くもテレビニュースで取りあげられていた。そのニュースを聞いた千春は、もやもやとした気分になった。

ニュースでは、ここ十年位は暖冬の為か、なかなか滝は全面凍結に至らなかったが、今年の冬

、そして今年の冬と滝は二年続けて全面凍結になったと、町の環境課の職員さんが嬉しそうにテレビの中では語っていた。

町の職員さんは滝が凍るには、滝の周囲の気温が重要で、マイナス五度以下位にならないと、これまで滝は凍らなかったのにマイナス二、三度の日が続いただけでも、滝が凍るようになったと話した。勿論、尋ねていたインタビューも外気温の二、三度の違いがどれだけ、滝の凍結に影響するかなど知る由もない。別に深い質問をするでもなく、滝が全面凍結をするのは町に取っても嬉しいですねと結すんでいた。

千春をもやもやさせた原因は、外気温が変わっているのに滝が凍るという話を聞いた為であった。大きな滝を凍らせるために必要な温度差が二、三度も違うというのは物理に詳しい千春にすると、簡単に納得のいくものではなかった。

——そうか、今年も滝は凍ったのか。

何か釈然としない感覚を抱きながら千春は、勤務についた。

「朝から浮かない顔をして、どうした」

「なあ、美佐」

「なんだ」

「前に行った沼、覚えているだろう」

「あたりまえだ」

「あの沼は袋田の滝から、そんなに離れてはいない」

「それなら、滝を見ていたとき聞かされた」

「滝が、凍ったそうさ」

「滝が凍るのなら、あの沼も今頃は凍っているかも知れないな」

「そうだな」

「滝の凍り方がおかしい。外気温が下がらないのに凍ったらしい」

「よくわからないけど、それは異常なのか？」

「おそらくな」

「沼だけでなく、近くの滝まで異常か？」

「あの地区で、何かが起きているのかも知れない」

その言葉に美佐子が、そうかというように頷いた。千春は、人の感情などには鈍感のところもあるが、この手の話しには敏感な感覚を持っている。千春が話すからには、袋田の滝にも異変が起きているのかも知れない。

「千春、おかしいと思うなら徹底的に調べる事だ、それがお前の遣り方だろう」

千春が、苦笑しながら頷いた。

袋田の滝の全面凍結は太子町の冬の風物詩でもある。観光促進のために町も力を入れている。滝が凍らないと冬場の観光客の客足も伸びない。

袋田の滝にある管理事務所では毎日、気温や滝の凍結状況を記録している。それを知った千春

達は、袋田の管理事務所を尋ねた。

数日前にテレビに映っていた、年輩の人の良さそうな田山と云う職員さんが応対してくれた。田山は、もうかれこれ三十年近く滝を見てきたという。

田山の話によれば、滝が凍結するのは、多くは一月から二月の上旬位に凍結を起こすという。主な要因は外気温と水量で決まると話した。

「滝が全面凍結する条件とは、なんですか？」

「そうだね。全面凍結する前には、早朝の気温が氷点五度以下の日が、三日以上は続かないと駄目だね」

「一朝くらい気温が大きく下がっても駄目ですか？」

「それだと凍結が始まっても、日中気温が上がると、氷は水で流されてしまう。続けて気温が下がらないと駄目だね」

「凍結は流量によっても違うのですか？」

「外気温が同じなら、滝に流れる水の量が少ない程、凍りやすくなります」

「滝が凍らないと、観光客が増えないとお聞きしましたが、やはり影響はあるのですか？」

「冬は凍った方が良い。何しろ、滝の凍った姿を楽しみに集まる人も多いからね」

「昨年の冬も、見事に滝が凍ったと聞きましたが、良かったですね」

田山は、嬉しそうに笑みを浮かべ頷いた。こよなく滝を愛する初老の男、嬉しそうに目を細めて滝を語る田山からは、そのような感じを受けた。

「昨年から凍結の様相が変わったように聞いたのですが、それはどのような事ですか？」

「そうなんです。原因は解らないが、去年は氷点下三度くらいの日が続いただけで滝が全面凍結をした。私も、ここで長いこと滝を見てきたが、あの温度で滝が凍結したのを始めて見た。驚いたよ。そしたら今年も同じように氷点下三度位で凍り始めた」

「水量は問題ないのですか？」

「去年は少し水量は多いかなと感じた位だから、ほんとうなら凍りずらかったと思う。水量の問題ではないな」

それを話すときの田山は、田山自身が納得できないのであろう。少し眉をひそめ不思議そうに話した。

一種の職人さん。このように長い事、同じものを見て来た人は、僅かな違いも見逃さない能力を持つ人が多い。旋盤を扱う職人さんであれば、触れただけでマイクロ単位の違いを肌で知る事のできる人がいる。ベテランの料理人であれば一々計量をしなくても、食材をグラム単位で分けられる人も多い。

千春は、時折、滝の方に目を向けて話をする田山からは、職人さんと共通する臭いのようなものを感じていた。おそらく、この人も、また、数値だけでは表せない滝が凍るために必要な色々な条件を、長いこと観察し続けた事により、身体で知っている人であろうと思った。

その後二人は、田山から滝の横にある階段を使って、滝の上に行ける事や、袋田の滝の上流には、もう一つ小さな滝がある事などを教えてもらった。二人は挨拶をして、事務所を出た。

すぐ前には滝川に架かる吊り橋がある。その橋の向こうには、岩場に作られた階段が見えていた。田山の話にでた滝の上流に行くための階段であった。

「あの階段、登って見るか？」

凍った滝を正面にみながら千春がいうと、美佐子が頷いた。

吊り橋を渡ると、袋田自然研究路の標識の側に、岩場に作られた鉄製階段の登り口があった。田山の話では、二十分くらいの時間で上に行けるとの事であったのだが。

「ずいぶん急な階段だな」

袋田の滝の横に作られた階段である。袋田の滝の落差は約百二十メートルである。その高さの急斜面に作られた階段であるのを考えれば、階段が急なのは仕方がない。

「安全の為に階段を曲げている。そう、心配する事もないだろう」

見上げた階段は、途中”く”の字を描くように何カ所も向きを変え、勾配を押しえるように作られていた。

「手すりはしっかりと持てよ」と声をかけると千春は手すりを掴み、階段を上りだした。階段幅は狭い、二メートルとないであろう。その両側には手すりが付いている。

「きついな」

鉄製の階段を上り終えた千春がいった。登ってきた感じでは、数百段はあったと感じたが、まだ滝の途中に過ぎない。鉄製の階段が終わると、その先には、今度は石の階段が待っていた。

「綺麗なところね。新緑や紅葉なら最高。ただし千春以外の誰かと一緒なら」

冷たい周囲の気温とは、裏腹にうっすらと額に汗を滲ませた美佐子が、息を切らしながらいった。

「お互い様だ。美佐子と来るような場所ではないさ」

まだ、二人には元気があった。しかし、そこからも大変であった。石段は、ずっと先まで続いている。手すりやチェーンはあるが、地元でも健脚向けと、うたっているような場所を登っているのだから、それも仕方ない。

二人は、ハウ、ハウと息も荒く三十分位かけて、滝の上流にたどり着いた。おそらく階段の総数は五百や六百くらいはあったように思えた。

「登れた」

美佐子が満足とも、悲鳴とも取れる声を上げると、近くにあった木製のベンチに崩れるように座り込んだ。

その目の前には白く凍った、滝の上部があった。

さすがに冬の為か階段を登ってくる人の姿もなければ、周囲にも人影はなかった。少し無理をさせたかなと、美佐子の姿を見て千春は思った。

「少し休もう」

そういうと千春は、登る前に買っておいたコーヒーの缶を、ポケットから取り出して美佐子に手渡した。

階段を登り切っても、滝に流れ込む川に沿い細い道がずっと続いていた。千春は缶コーヒーで

一息入れながら、その小道を指差した。

「あの沼は、この道からでも行ける」

美佐は、川沿いの細い道に目を向けながら、沼の姿を頭に描いていた。

十一

二人が袋田の滝に行ってから数日が過ぎた。

寒い日が続いている。茨城の冬は例年は十二月下旬から二月初旬にかけてが尤も寒い。従って、一月の、この時期に袋田の滝が凍結をしても、少しもおかしくはない。気にしなければ滝は、凍結時期に凍結している。ただ、それだけの事であった。しかし、千春は、田山の話した二度の温度の違いが気になっていた。

千春は滝から戻ると袋田の滝の情報や、気象庁から取り寄せた大子町などの気温観測データと、田山が記録した滝の観測日誌を照らし合わせてみた。その結果、少なくとも昨年と今年の凍結は、田山が話したように滝の周囲の外気が、それほど下がっていないのに滝は全面凍結しているのがわかった。たしかに田山の語ったように袋田の滝は、去年から明らかに凍りやすい滝に変貌をしている。

滝の凍結から千春は、あの滝の先にある沼も凍結しているかも知れないと思った。千春は茨城に赴任すると、五月頃から沼の調査を始めた。すでに沼の水質検査や土壌検査は終えていた。動物等が活発に活動する秋口までは、念のために沼に足を運んでいたが、それ以降は沼に行っていなかった。袋田の滝の件といい、一度は冬の沼を見ておく必要があると思った。

「明日、沼に行く、美佐はどうする」

しばらく美佐子は千春を見ていた。

「わかった」

「しっかり支度してこいよ。真冬の山中だからな」

美佐子が頷いた。

翌日、二人は防寒服を携えて署をでた。

時間は十時を回っていたが、日陰では霜柱が立ったままになっていた。二人は、その霜柱を踏みしめながら細い山道を進んだ。千春は背中に大きなリュックサックを背負っていた。

二人の前に二メートルほどの土手が立ちふさがった。いつか二人が言い争いをした場所であった。

千春は、器用に斜面に窪みをつけて登った。先に上がった千春が手を伸ばした。その手を掴んで美佐子が登り始めた。

美佐子の顔は、千春のすぐ目の前にあった。綺麗だなと思った。こんな近くで美佐子の顔を見るのは、もう何年もなかったと思った。一瞬、千春は、どきっとするものを感じると、慌ててそれを吹き消すように不機嫌な表情をした。

「千春、急に表情が変わったよ」

「馬鹿言え」

少し慌て気味に千春がいった。

「あら、そう。私だって警察官、人の表情を観察する事はできてよ」

「そうかい。だったら美佐があんまり重いから、顔を顰めたのだろう」

「失礼ね。私は、そんなに重くないわ」

「いや、重い。お前の身体には悪魔が宿っている。その重量も加算される」

「そりゃ、女には、誰しも悪魔の一匹、二匹は住んでるものよ。今頃気づいた」

「二匹、冗談じゃない、お前の身体には百匹くらいはいる」

「そう」と口を尖らすと美佐子は、すぐにいつものように取り澄ました笑いを浮かべた。その笑いを見るたび何で僕は、此奴にはこうも簡単にあしらわれるのかと、自分ながらに情けなかった。一瞬でも美佐子を綺麗だと思った、自分の気持ちが腹立しく思えた。

世の中にはどうしても苦手な人間の一人や、二人は誰にでも居る。それがお袋であったり、かみさんであったり、あるいは上司であったりもする。それも人間である以上は仕方ない。しかし、それが同僚の美佐子であるのかと思うと情けなかった。

いつしか沼の岸辺に二人は来ていた。

「カッチ、カッチだな」

白い氷で覆われた沼を見て、千春が囁いた。

沼の周囲の多くは杉などの常葉樹である。一部には背の低いブナ等の落葉樹が葉を落とした姿を見せていたが、それでも深緑をした木々に囲まれた沼は、冬といっても周囲の様子に際だって大きな変化はない。その中で真っ白な氷に覆われた沼だけが異様な色彩を放っていた。

千春が、沼の縁から氷に足を伸ばした。

「沼に降りるの？」

「見るからに厚そうだ。心配はないだろう」

それでも用心しながら、氷の上に立った千春は、沼の縁に手を掛け足で氷を蹴ってみた。

「かなり厚い、割れはしない」

心配そうに見ていた美佐子に千春がいった。

千春は、ゆっくりと沼の中央へ向かって歩き出した。

岸から十メートルくらい歩いたところで、背負っていたバックを氷の上に降ろすと、バックからスクリー状の穴をあける道具を取り出した。

千春は、それで氷に穴をあけ始めた。くるくると回す度に、削られた氷がスクリー状の螺旋から掻き出される。

――厚い氷だ、なかなか抜けないな。

――あいた。

千春は空いた穴にスケールを差し込み、氷の厚みをはかった。

「二十八センチもある」と千春がスケールの目盛りを読みながら、美佐子に聞こえるように少し声を大きくしていった。

「そんな大声を出さなくても、ここにいる」

いつの間にか美佐子が横に来て、千春の空けた穴の様子を覗いていた。

相当厚い氷だと思ったが、ここまで厚みがあるとは思わなかった。千春は空けた穴を覗き込み怪訝な顔をしていた。

「厚みに驚いたか？」

素直に千春が頷いた。

「山中の沼だ。それにすぐ近くの滝でさえ凍る程、気温の下がる所。それでもおかしいのか？」

「わからないけど、二十八センチは厚い気がする」

二人が、そのような会話を交わしている姿を山奥から、じっと見ていた目があった。しかし、二人が、その目に気付く事はなかった。

千春は納得できないとの表情のまま、立ち上がると沼の中から周囲を見回した。その時、あと思った。沼のなかに立つまで気づかなかったが、枯れ木が増えだした場所がある。

千春が目を向けた先は、沼の奥の方にあたる。その視線の先には赤茶色に変色をした数本の木が見えていた。秋に、この沼にきたときには、そこの木は枯れてはいなかった。何度も沼にきている千春である。枯れ木が増えた場所が何処であるのか、千春にはすぐにわかった。

「あの赤茶けた木がある場所、あれは、この沼から川に向かう水路のある場所だ」

千春の指差した方向を美佐子も見た。

「おかしいな」

ぼそっと美佐子がいった。

「千春、本当に、この沼の水に問題はないのか？」

「.....なかった。何度もサンプリングして調べた。勿論、今日もサンプリングはしていくが」

「それが良い」

千春は、その言葉に頷き、サンプル容器に水を入れた。

二人は沼から上がると、周囲の枯れ木を調べ出した。昨年、最初に千春が、この沼に来たとき被害が拡大するかどうかを調べるために、立ち枯れした木と正常な木々との境に幾つもの目印を付けておいた。その木を探した。

「この付近では立ち枯れの拡大はない」

目印をつけた木から枯れ木が増えた様子はない。

「新たに発生したのは、川に向かう水路付近だけ」

離れた場所に見える赤茶けた色の枯れただした木を、目で追い美佐子がいった。

「美佐、あの水路を調べて見る」

その後、二人は沼から川に向かう水路まで歩くと、そこでも水のサンプルを取った。

「千春、土地が凍っているんじゃないのか？」

水を多く含んだ土地が凍れば、植物の根を壊死させてしまう。沼の周囲となれば、土地に多くの水分が含まれている可能性は強い。

美佐子の言葉に頷いた千春が、氷に穴をあけたドリルを使い、土壌を掘ってみた。持ち出した

道具では、最初は三十センチ位までしか掘れなかったが、螺旋から持ち上がった土には氷が含まれていた。千春はバックから、延長用の柄を取り出し、工具の全長を伸ばし再び掘り出した。六十センチ位の穴が掘れた。持ち上げたドリルの先端に付いた土は、やはり氷を含んでいた。

「……深い所まで凍っている」

見ていた美佐子がいった。

「そのようだな。この辺は沼の水が地中に浸みだしているようだ」

「これで、植物が枯れた原因がわかったな」

「そうだな」といって頷いた千春ではあったが、まだ、納得できないものがあるのか、その表情は曇っていた。

水路から離れた千春は、沼の周囲数カ所で、同じように土中を調べてみた。結果は同じであった。ドリルの先には氷を含んだ土が現れていた。

第四章 氷の不思議

十二

署に戻った千春は、茨城の気候について調べていた。千春は、高萩の沼に張った氷の厚みや土地の凍結に納得できなかった。しばらくすると、茨城の気候が開かれた千春のパソコン画面を、のぞき込んだ美佐子が話しかけてきた。

「一応、植物の根が壊死したことで決着したと見てよいのか？」

美佐子の問いかけに振り返った千春は眉をひそめ目を細めていた。それを見た美佐子は、千春が、まだ納得してないと知った。

「……植物が枯れた原因は、根が凍結により壊死したものかも知れない。しかし、何故、壊死を起こすほどの気温低下が起きたのかわからない。そうだろう、あの沼は今日、昨日に出来たものではない」

「前々からあった沼かも知れないが、しかし、去年も袋田の滝は凍結している。現実問題として沼には三十センチ近い氷が張っている。ここ数年、寒い期間が長く続いたとは考えられないのか？」

「いや、気象庁のデータと照らし合わせても、近年、気温が著しく低下したようなデータはない。それよりも、こんな気温で三十センチ近い氷が、本当に張るのか、そっちの方がおかしい」

「……そうはいつでも、あの沼には現実に三十センチの氷がある。それをおかしいといわれても困る」

「それは、そうだが……」

千春は、盛んに耳の後ろに指を置き耳を動かしていた。

千春には学者肌のようなところがあり、少しの疑問でも、とことん突き進む一面があった。また、その少しの疑問も残さないやり方によって、これまで二人が組んで、幾つかの難解な事件を解決してきた実績もある。それだけに、美佐子は、千春がおかしいと考えているのなら、常人が気づかない何かを千春は感じ取っているのだろうと思いつつ、千春の様子を見ていた。

「沼から十メートル位離れた地中が氷っている。あれも納得できない」

「しかし、それだって沼にあれだけの氷が張れば、おかしいとは感じないけど」

「いや地中は、そんな簡単には凍らない。今も、それを調べていた」

「地中の凍結など調べられるのか？」

「地域規模でならわかる。建築関係に凍結深度と呼ばれる値がある。これが参考になる」

凍結深度とは、その地域で地盤がどの位の深さまで凍るかを示す値であった。地盤が凍ると凍り付いた地盤の力によって、家の基礎が歪められたり、持ち上がったりする。また、水道管などであれば凍結によって破損する。これを防ぐには土地が凍らない深さまで地面を掘って、基礎の主要な部分や水道管を埋設する。

「北海道を例にあげれば小樽、洞爺湖町で五十センチ、千歳六十センチ、富良野七十センチ、帯広、日高町で百センチ位となっている。長野の寒冷地あたりでも平均すると約七十センチというのが大凡の値だ」

「肝心の茨城は？」

「太子町だと清々二十センチから三十センチ」

「そんなに少ないのか？」

「もっと北に位置する福島や仙台などでも四十センチ程度が平均、茨城の南部に至っては凍結深度の規定はない。茨城北部の山沿いは平野部に比べれば確かに寒い、それでも茨城で六十センチ以上も土地が凍っているのは何かおかしい。おかしいと言えば、沼に張った氷の厚みもだ。僕の記憶が正しければ、本州で三十センチ近い氷が張る湖は、数えるくらいしかなかったように思う。確か諏訪湖が、その位の厚みだと記憶している」

「しかし、沼の近くにある、あの大きな袋田の滝が凍結する。あのあたりは寒いのと違うのか？」

「それは寒い。ただ凍結深度からもわかるように、内陸の盆地などにくらべれば、たいした寒さにはならない」

「じゃ、どうして、あの大きな滝が凍る？」

「滝が凍るのと沼などに厚い氷が張るのは、そもそも氷の張り方が違うから、一概には比較はできない」

「比較が無理とは、滝の方が先に凍る事もあるのか？」

「そりゃ、あるさ」

何か高い場所から流れ落ちる滝を見ていると、感覚的に凍りづらいものと思いがちだが、決してそのようなものではない様子であった。

千春の話に美佐子は多少戸惑った。その顔に気づいた千春が続けた。

「簡単に言えば、滝は、流れてくる水が直接凍る訳ではない」

「……………」

「滝とは落差を持って落ちる水の流れだろう。落差を持って落ちれば水滴が回りに飛ぶ。飛んだ水滴は滝の近くの岩や植物などに付着する、その為に簡単に氷になる。水滴等の小さな水の塊が

凍り易いのは、感覚的にわかるだろう」

「……水の塊？」

「冬の朝、昨夜降った雨が道路を凍らした。道路は凍っても、そのとき近くの沼や、川が凍っているかといえば、凍ってない時の方が多いだろう」

「川や沼には大量の水があるから凍らないのか？」

「簡単にいえば、そう」

「どうして、大量の水があると凍らない」

「美佐は、どうして沼や湖に氷が張るか知っているか？」

「寒いから氷が張る。それ以上は考えた事がない」

「普通、そうだよな」

「わかっているなら、それから話せ」

「わかったよ」

美佐子から促された千春は氷が張る仕組みを話した。

水は水温によって比重が変わる。ただ、その比重変化に特殊性がある。水温が高ければそれだけ水は軽い（比重が小さい）が、水温が下がり摂氏四度Cになったとき一番重い（比重が大きい）水となる。しかも一番重い四度Cの水を更に冷やすと、そこから水は、再び軽くなる性質がある。ここで尤も重要な性質は、摂氏四度のときに水は、一番重い水になる事である。

沼などに氷が張る仕組みは冬になり外気温が下がると、まず、外気と接している水面付近の水が冷えていく。ところが水は冷える段階で、必ず摂氏四度の重たい水に姿を変える。一番重たい水が水面付近に出来れば、その重い水は当然、沼の底に沈んで行く。

重たい四度Cの水が沼底に沈めば、入れ替わりに沼の中にある暖かい水が水面に顔をだす。その暖かい水も外気に冷やされ、また沈んで行く。ここで、いわゆる水の対流が沼の中に起こる。

外気温が零度以下であっても、この対流が沼の中で続いている限りは、水面近くの水はいつになっても零度にならずに、氷が張ることはない。ただ、そのような対流も長い時間をかければ、やがて沼の水は四度Cの重たい水で満たされ対流はなくなる。謂わば対流が起きている間は、沼に氷を張らす為の準備運動のようなものである。

朝起きて氷点下以下になっても、近くの沼に氷が張ってなければ、その沼は、比重の重い摂氏四度の水で沼を一杯にするという、準備運動をしている途中であった事になる。

沼の表面に氷が張り出すのは、沼が準備運動を終えた後になる。沼が四度Cの一番重い水で満たされると、今度は水面付近に浮いてきた軽く暖かい水が冷やされ四度Cの重たい水になっても、下には同じ四度Cの重たい水があるために、水面付近の水は沈めなくなる。沈めなくなった水は、どんどん外気で冷やされ、外気と接してる水面が最初に零度となり氷に姿を変えていく。

これは、何も沼や湖だけに限ったものではない。例えば洗面器に入れた水が氷る場合も理屈は同じである。洗面器の水が凍っても、沼や湖に氷が張らないのは、沼や湖には大量の水があるために、大量の水を四度Cの重たい水に冷却するまでに長い時間が必要となるからである。

沼や湖は、個々で大きさや形が、それぞれに違うために蓄えている水量も違う。その沼や湖

によって冷却の度合いが、一つ一つ異なる為に、外気温が同じような近い場所にある沼や湖であっても、氷が張ったり張らなかったり、あるいは厚みの違う氷が出来たりする。

「水が多いと凍りにくい、その理屈はわかったけど、それと滝をどうやって比較すれば良いかわからない。私の感覚が袋田の滝のような大きな滝が、早く凍る事を拒絶している」

「厄介な感覚だな。さっき話したように水の塊として比較すればわかり易い。滝と川や沼との決定的な違いは、滝は、水が落ちる事により周囲に水の飛沫を飛ばす。沼などのように大量の塊の水なら全体を冷やすのに時間がかかるが、飛んだ水滴は、いわば小さな水の塊、気温さえ低ければ、あっという間に凍り付く」

「滝は本流がガチガチと凍って行く訳ではないというのか？」

「まあ、日本程度の気温の下がり方であれば、本流がガチガチ凍ったりはしない。そんな凍り方をしたら、滝の上から流れてくる大量の水は、行き場を失い洪水を起こす」

「たしかに、そうかも知れない。滝が凍って洪水が起きたとの話しは聞いた事がない。凍ったように見えても、何処かに水の流れは残っているんだな」

「そう、滝が凍るのは周辺から、それも岩などに飛んだ水滴が核となって凍りだす」

「核なら成長をする意味だな」

「そう、飛んできた岩場や近くの植物などの水滴が最初は凍る。そこに、次々に水滴がやってくる。氷の上に飛んできた水滴はすぐに凍る。このようにして周囲の岩肌などの氷が大きく成長をしていく。大きくなった氷は、やがて滝の流れを分断して、作られた氷の上に新たな流れができてりする。氷の上をちょろちょろした流れが出来れば、氷による冷却も加わり、それも凍るだろう。その様にして氷が滝に覆い被るよう成長すると、滝が凍ったように外からは見える」

「水滴が凍るのなら早そうだ。そうか、袋田の滝は四つの岩場を流れ落ちてくる。その分飛翔も多く濡れた岩場が多い。滝の形状からしても頗る凍り易い滝のようだな」

「そう、袋田の滝は、凍り易い形状をした滝だ。だから、あれだけ大きな滝が茨城の地にあって、凍結できるのだと思うよ」

「なるほどな、そして、滝を凍らす条件が、袋田の管理人の田山さんがいった三、四日ほど強い寒気が続けば滝は凍るになるんだ」

「そういう事だな。しかし、問題は滝が凍る三、四日、強い寒気が続いただけで、果たして三十センチ近い氷が沼に張るかだ。そこまでの厚い氷を沼に張らすには、もっともっと強い寒気が長期に渡り続かないと無理だ。だいたい三十センチの氷を張らす湖は、本州でも、そんなにはない筈だけだな」

「本州では三十センチ位の氷しか張らないのか？ちょっと待ちな」と、千春に声をかけると美佐子は、自分の席に戻りパソコンを操作し始めた。

今度は、千春が席を立て美佐子の横に来てパソコンを覗いた。

「何を調べている」

「日本の湖にどの位の氷が張るか調べている」

千春が横に立ったまま頷いた。

「あった。諏訪湖で近年は約二、三十センチ……同じ長野県で車の氷上テストなどを行う女神湖。ここも二、三十センチとなっているな。……えっ、ここはマイナス三十五度を記録した事がある。茨城とはだいぶ気温が違う」

女神湖は長野県蓼科にある小さな湖で、自動車メーカーなどが冬季に氷上テストなどを行う場所として知られている。

「やはりそうか、僕は、さっき沼や湖に張る氷のでき方を話した」

「まずは四度Cの一番重い水に変える話だな」

「そう、その理屈で行くと、本来、諏訪湖と、その女神湖では、氷の厚みに大きな違いがでないとならない。諏訪湖と女神湖では大きさなど相当違う筈だ。確か女神湖は人造湖だったと思う」

「待ちなよ。調べてみる……諏訪湖は周囲長約十六キロメートル、平均水深約五メートル、標高七百五十九メートルにある湖……女神湖は標高約千五百メートルの場所にあり、周囲長は六百メートル位の小さな湖だな」

「全く大きさの違う湖だろう」

「大きさは大分違うな。それに、標高差から見たら女神湖の方が気温は低そうに思える。女神湖の方にもっと分厚い氷が張りそうに思うが、同じくらいの厚みだな、どうしてだ？」

「さっきの話は氷が出来るまでの話し、一旦、湖などに氷が張って、その氷が成長する事とは、また違った話になる」

「違うはなしかよ」

「そう、例えば同じ強さの寒気が入る地域を考えた場合、氷が出来るまでは個々の湖では大きさや水量も違うために、湖によって氷の張る時期が異なった。しかし、一旦、氷が張った沼や湖では氷の下にある水は、何処の湖でも同じ四度Cになっている。氷が成長をするという事は、この状態で更に氷を介し寒気が沼の水に入る事だろう」

「今度は対流は起きないという事だな」

「対流は起きない。一旦、氷で覆われたら、何処の湖でも同じ条件からのスタートと考えればよい。そしてこのとき寒気持つ低い温度を、通すか通さないかは氷の厚みによって大方は決まってくる」

「そうか、厚い氷があると外気を持つ低温が厚い氷で阻まれて、下の水を冷やせなくなるから、氷は厚みをませない」

「そう、水からできた氷は断熱効果が大きい。厚みを増すほどに断熱効果も大きくなる。だから、薄い氷が張った方では氷の厚みを増しても厚く張った方では厚くならない」

「氷の張る時期は違っても、時間が経てば最後は同じくらいの厚みになってしまう」

あくまで同じ気象条件の元に大小異なる湖が有り、更に氷が一面に張った後に、氷を成長させるだけの一定の強い寒気が、続くとの条件であれば、氷の持つ断熱効果の影響によってやがてはどちらの湖の氷も同じような厚みになる。そして氷の厚みが増せば増すほど、断熱効果は大きくなり、より強い寒気が入らないと氷は成長しない。

ただ、これは条件を揃えての仮定の話である。実際には氷が張る過程や氷の成長する過程では

、個々の沼や湖での地熱、風、雪、日照等々の要因が絡むために、同じようにはならない。一般的によく見る光景では、氷の厚みはバラバラである。それは気象条件の違いや、氷の成長過程で寒気が去る、あるいは春先を迎える。その場合、当然、個々の湖では氷の厚みに違いがでる。

ちなみに湖に張る氷の厚みは、近年の本州では岩手県岩洞湖で四十センチ前後、多くは三十センチ前後となる。本州より寒い北海道でも糖平湖や然別湖などは一メートル近くになるが、平均的には六十センチ前後であろう。

「小さな湖だと早く氷が張る分、厚い氷になりそうに思ったが、そうでもないようだな」

「小さな湖だからといって幾らでも氷が成長するなら、寒冷地にある浅い湖などは底まで氷ができ、魚などの生物は全て冬には凍死してしまう。上手くできているんだよ。氷が水に浮くのは。そうだろう。だって氷が厚くなれば厚くなるほど、断熱効果は大きくなるから、強い寒気をブロックする。更に氷の厚みを増すには、その断熱効果を打ち破るような強烈な寒気が続かないと無理。だから本州の気象条件なら、氷の厚みは、良いところ四十センチくらいが限度になってくるんだよ」

「そうか、しかし、そう考えると、やはり高萩の沼と長野の氷の厚みが同じ位というのはおかしいな。茨城はそんなに寒くはないものな」

「諏訪湖付近も八ヶ岳や南アルプスなどに囲まれた内陸の盆地、茨城よりはるかに寒い。そこと太平洋に面した茨城の沼に張る氷の厚みが、同じくらいになるのは考えられないな」

「.....そのようだな。軽井沢や信州町付近だと、一月、二月ともなれば月の平均気温がマイナスだ。それに対して大子町は月の平均気温で氷点下になる月はないな」

「そうだろうな、月平均気温でマイナスが出ないような高萩の沼に、厚さ三十センチもの氷が張るのは異常だと思う」

「滝が凍りやすいのも、その断熱効果を考えればよかったみたいだな」

「その考えもありだ。滝での氷の成長は、湖などの氷の成長と反対で氷の上面が成長するから、断熱効果は関係しない。その分、短い時間で幾らでも成長ができる」

すでに時間は夜の九時を回っていた。外に出た美佐子を冷たい北風が襲った。

明日は、この辺りでも雪になるとの予報が出ている。星は見えてない。雲が覆っているのであろう。その空を見上げて、雪にならなければ良いなと美佐子は思った。

十三

さしたる量の雪ではなかった。元々、茨城は積雪の多い場所ではない。特に平野部に至っては年に数回降る雪も十センチを越えるような雪は希である。

今年三回目となる降雪も一月二十四日の未明に、大子町や北茨城の山沿いに少し降っただけだった。

雪が降った早朝、一人の男が滝のそばで死んでいた。男は滝の横に作られた鉄製の階段からすべり落ち、下のコンクリートに頭を打ち付け死んだらしい。通報を受けた大子北署から、警察官が現場に駆けつけて調べをした。

翌朝の新聞には、凍結した階段で足を滑らせ転落死した男の記事が、短く報じられていた。

その新聞を片手に、武内が秘書の新谷とひそひそと話していた。

「この件は問題はあるまいな」

「すぐに調べてみますが今のところ、事故死と聞いていますから、問題はないと思います」

昨日の今日である。新谷が十分に情報を掴んでないのは解るが、武内は少し気になっていた。

「そうか、何故、あの男が、あんな場所で死んだか、早々に調べてくれ」

武内は、不機嫌そうに新谷を見ていった。

「わかりました」

「先生、計画は、このまま続行で構いませんか？」

「他は順調なのだろう」

「はい」

「それなら構わない。今年の秋には選挙になる。そろそろ俺は、世論を作り始める。あの男達には気を引き締めて事に当たれと伝えておけ」

「わかりました」

予算編成など行う通常国会は一月十日から六月二十日の期間で始まっていた。年が明けてからの環境委員でも武内は、これまで質問にたとうとはしなかった。しかし、武内が秘書の新谷と奇妙な話しをしてから、しばらくだった環境委員会で、武内が質問に立った。

武内は冒頭から政府が提案した温室効果ガス削減案は、産業活動を停滞させ国民に大きな負担を負わせるものとして、断固反対をすると述べた。

この発言には同席をしていた、同じ野党議員からも大きな驚きが起きた。それでも武内は、頑として自らの主張を譲らなかつた。武内は細かい数字を上げて、如何に、この数値目標を達成させれば産業活動の停滞を招くかを訴えた。それに対して、吉永は環境分野での底上げや、地球温暖化がもたらす弊害を上げて対抗した。しかし、これまでの武内とは様相が一変していた。吉永を始めとした政府関係者の反論には激しく攻撃を加えた。

吉永は武内の豹変に戸惑っていた。温室効果ガス削減は地球温暖化防止を目指し各国が取り組んでいる。国民の多くも地球の環境保全とあればと多くが賛同し、すでに国内世論もできあがっている。それに真っ向から異を唱える。武内は何を血迷ったのだと思った。まして選挙もある年に、国民が嫌がる話しを取ってする。武内は次の選挙には、でないのかとさえ思ったほどであった。しかし、その後も、武内はマスコミなどに対しても、ことある事に温室効果ガス削減案に反対の姿勢を示した。

元経済産業大臣の発言である。マスコミは武内の発言を大きく取り上げるようになった。ただ、それはあくまでも否定的、あるいは非難的な取り扱いであった。それも当然であろう。温室効果ガス削減案に反対をする事は、地球温暖化防止への反対と等しいものだけに、反発が起きても仕方なかった。

そのころ武内は別の事を考えていた。温室効果ガス削減案は、早坂内閣設立当初のもので、あれから数年が過ぎ、今では国民の多くに浸透した結果、余り話題ともならなくなった。それでは困る。善し悪しは別として、今一度、温室効果ガス削減案に国民の目を向けさせる必要が武内にはあったのだ。

千春に叔父の柿岡から電話があったのは、千春達が高萩の沼に張った厚い氷に疑惑を向け始めていた頃であった。

「よっ、千春か？ 雪はどうだった。昨日茨城は雪だったろう」

「こちらは海沿いですから、ちらついただけです」

「そうか、それは良かった」

「珍しいですね。叔父貴が署に電話を掛けてくるのは」

「頼みができた」

「なんですか？」

「お前、北海道に遊びに行く気はないか？」

「北海道ですか？」

「実は、支笏湖しこつこが凍っている」

「北海道にある湖でしょう。凍って当たり前ではないのですか？」

「支笏湖は水深が田沢湖について深い、だから普通は凍らない湖だ」

「不凍湖ですか？」

「そう、地元で何か変だとの話しがあつた。それが私の耳にも入ってきた」

「まさか、北海道でも立ち枯れですか？」

「いや、それは確認されてない。しかし、千春の話だと袋田の滝の凍結、これもおかしいのだろう」

「ええ、少し変には思っています」

「同じ凍結続き、調べてみる価値はあると思う。それとも興味はないか？」

「興味ですか？ 冬の北海道ですか？ 寒そうだな」

「そりゃ、寒い。なんたって二月になったばかりの北海道だからな、厭か？」

「厭じゃありませんが」

「よし、それなら高萩中央署の方には、人事経由でうまく話しをつけておく」

「.....わかりました」

十四

支笏湖は北海道千歳市にある周囲約四〇キロ、平均水深約二百六十五メートルのカルデラ湖である。十年とか二十年に一度くらいは全面凍結する事もあるが、滅多に凍らないので最北の不凍湖として知られている。近年だと二〇〇一年に二十三年ぶりに全面凍結をした記録が残っている。

柿岡から電話があった翌日には高萩中央署に、本庁人事から千春と美佐子は北海道で研修を受けるのでよろしくとの電話が入った。

新千歳空港から支笏湖東岸へ行くのであれば二十数キロの距離である。二人は新千歳空港からタクシーで県道十六号線を使い、宿泊施設などの多く集まる支笏湖東岸に向かった。

冬の北海道、さぞ雪が多いのではと心配した二人ではあったが、タクシーの運転手さんの話しでは、支笏湖のある北海道太平洋沿岸は、元々暖かく雪は少なく、平地部なら今の積雪は三十センチもないくらいだと話していた。

二人が北海道に着いた日は、天気も良かった。ここしばらく雪は降ってなかったのだろう。空港から支笏湖付近までの除雪をされた道路に雪はなかった。しかし、山の傾斜に残る雪の中から、灰色をした白樺が枯れ木のように枝だけの姿を現す光景は、やはり冬の北海道だと思った。

道路が除雪されていたおかげで、千春達を乗せたタクシーは、それほど時間を要せずに支笏湖の付近までできていた。正面に見えてきた山が樽前山なのだろうと思いながら、千春は車の窓からの風景を見てみると、すぐに支笏湖は姿を見せた。

千春は、支笏湖につくと、近くの路上にタクシーを止めた。湖面は、氷の上に雪を乗せた白い平原が対岸の山々までずっと広がっている。四方を山に囲まれた平らな真っ白な平原、幻想的な風景でもあった。その光景に美佐子は目を輝かせていた。

湖の現在の状況を目に収めた千春は、そのまま予約をしておいた宿にタクシーを向けた。

二人は宿に着くと荷を解いた後で、湖面の凍結状態を宿の人に聞いた。初冬の頃から湖の様子がおかしかったという。冬に入るとあっという間に凍結を始めた。長年、湖を見てきた人が驚きを持って話した。

夕食までには時間があったので二人は、宿を出ると湖に向かって歩いた。夕日を浴び凍り付いた湖は静かな姿を見せている。少し歩くと、船着き場が見えてきた。陸地には冬のためであるのか、それとも湖が凍結をした為かはわからないが、何隻かの小舟が引き上げられていた。

二人は船着き場から、湖に張り出した棧橋を使い湖面に降りてみた。湖面に降りた千春は、氷の上の雪を足でかき分けた。下にはしっかりとした氷があるのが見える。さらに二人は歩き進めた。千春と美佐子は岸边から数十メートル進んだところまでやってきた。

千春は背負ってきたリュックから、スクリー状の穴あけ器具を取り出し、氷に穴をあけてみた。

「ぶ厚い氷だ。柄を取り付けないと、これ以上は無理だな」

「三十センチ以上ある」

「ああ、これはかなり厚い」

千春は穴あけ器具に延長用の柄を取り付けると再び、氷に穴をあけ始めた。柄のついた器具で掘り進めてみたが、それでも氷の底までは届かなかった。

「これで六十センチ、まだ、下に氷がある」

「それ以上は削れないのか？」

「このドリルでは、ここまでだ」

六十センチメートルを越える厚みの氷。この湖は本来不凍湖として知られている。そこに六十センチを越える氷が張っている。

そもそも不凍湖と呼ばれるような湖が何故あるのか。沼や湖に氷が張るのは、一旦、湖の水温が一番重い四度Cの水温にしないと氷はできない。氷が出来る過程を考えた場合、湖を二つの形状から考えると解りやすい。一つは支笏湖などの水深の深い湖。もう一つは茨城県にある日本で二番目に大きな霞ヶ浦のように面積は大きい水深の浅い湖である。

この二つの面積を比較すると、霞ヶ浦は支笏湖の約三倍の広さを持つ。しかし、水深は霞ヶ浦は約四メートル、支笏湖は二百六十五メートル、その為に水の量は支笏湖が霞ヶ浦より二十四倍くらい多くある。

この二つの異なる形状を持った湖が、どちらも北海道の同じ場所にあったとすると、先に氷るのは間違いなく霞ヶ浦である。理由は簡単である。

氷を張らすには、一旦、湖の水を全て摂氏四度の重い水に換え、そこから更に冷却されないと氷は張らない。

このとき、地熱や風、地形などの影響を無視し、氷を作るために必要になる熱の移動は外気のみと仮定すれば、湖を冷やすのに大きな影響を与えるものは、湖の持つ水量と湖の広さの二つになる。水量が多いほど冷却には時間がかかるのは、これまで幾度となく取り上げきた事である。単純に水量の面からだけ見ても支笏湖は、霞ヶ浦の約二十四倍の貯水量があるため氷が張るまでには長い時間が必要になる。

そこにもう一つ、外気の影響を受ける水面の面積を考えないとならない。水面が広ければ、広だけ外気に接する水の量は増え、同じ時間での冷却効果が高まる。従って、水量が同じなら、一度に多くの水を冷やせる水面の広い湖ほど早く氷が張る。支笏湖の水面の面積は霞ヶ浦の三分の一と狭いために、冷却効率が悪く水面の面積から見ても、より凍りにくい湖となる。

地熱や風などの外的要因を除き、純粹に湖の形状だけで考えた場合、不凍湖となりやすい形状は湖面が小さく深い形状となる。

支笏湖が不凍湖と呼ばれるのは北海道にあっても、深い湖で大量の水を貯めているため、一冬を通して氷が張れるまで、湖の水温を下げる事ができないからであった。その考えからすれば、本来不凍湖と呼ばれる支笏湖に氷りが張るのは、この一帯が例年にない寒い冬であったからとなる。

千春と美佐子は宿に戻り、食事をしながら話していた。

「宿の人の話しだと、今年は寒い冬だといっていたね」

「そうりゃ、湖が氷るんだからな」

「寒かったら、凍っても当然でしょう」

「まあ、不凍湖と呼ばれても、その地域では凍りづらい湖というだけ。本当に寒ければ凍る」

「だったら、おかしくないでしょう」

「わからん、それにしてもずいぶん厚い氷に思うけど。まあ北海道だもんな。凍り出すと、この

よくなるのかな。――とにかく明日からは、少し周囲の聞き込みをして見よう」

「そうね、叔父様の耳に届くくらいだから、何か地元の人達は気付いているかも知れないし」

二人は、支笏湖の宿に三日ほど滞在して周囲の人達から話を聞いて回った。

宿の主人が話したように、今年も暖冬だといわれているにも拘わらず、湖の周囲に住む人々からは例年になく寒く感じるとの話しが何処でも聞かれた。湖が凍結をするくらいだから当然といえば当然であろう。しかし、おかしな事に湖から少し離れた場所に住む人からは、そのような声は聞こえてこなかった。逆に長期の天気予想のように、今年の冬は暖かいとの声さえ聞こえた。

二人は札幌管区気象庁に行き、気象データを集めた。変わらなかった。気象庁の観測では、この地区の気温変動は例年並みで、特に湖を凍らすほどの強い寒波が続いた様子などはなかった。やはり、何かおかしい。気象データや多くの人から聞いた話を総合すると、どうも支笏湖を中心にした、極狭い地域で異常低温が起きているようであった。

他にも気になる話しが聞けた。その一つが支笏湖で、観覧船を運行する船長さんからの話しであった。

それは、二人が遊覧船を運行している但見観光支笏湖支社を尋ねたときの話になる。観光船の船長である佐野という人が、気さくに対応してくれた。湖でのおかしな話を佐野が乗客から聞いたのは、観光船の営業を終える間際であったと佐野は話した。

観光船は四月から運行を始め、十一月中旬まで運行し冬季は休止する。支笏湖で使われている観光船のなかに水中遊覧船がある。これは船体の下に覗き窓を設けた遊覧船で、船の中から湖の中が見られる構造となっている。支笏湖は透明度約十七メートルと高い湖としても知られているため、このような遊覧船が何隻か営業をしていた。

佐野さんは、この水中遊覧船の船長をしていた。佐野さんが搭乗客からおかしな話を聞いたのは、十一月に入り水中遊覧船の運行が残り数日ほどになった時であった。

それは船着き場の対岸にある恵庭岳近くを運航中に、船体下の覗き窓から湖中を見ていた乗客の何人かが、湖中で何か光っているようなものを見たというものだった。さらに佐野さんは船に備わっているソナーの反応が船着き場の対岸付近で、これまで佐野の知っている湖底の様子と違った反応があったと話してくれた。ソナーの故障と思った佐野さんは、営業終了を待って、ソナーを点検に出したが、その後メーカーでソナーを調べてもソナーに異常はなかったという。

ソナーがおかしな反応を示した場所も、客が光を見たと話した場所の近くになる。

場所が恵庭岳の斜面が湖に落ち込んだ所とあって、佐野さんは、当初は土砂崩れが起きたとも考えたが、それなら毎日運転していれば、湖面の濁りなどに気付いた筈だと思い直したと語った。

佐野と別れた二人は、ともかく氷の厚みを知ろうと考え、近くの金物屋でスクリュードリルを改造してもらい、氷の厚みを測定しようとした。しかし、改造によって一メートルまであけられるようにした器具でも、氷の底に届く事はなかった。

一メートルを超す氷の厚み、気象データからみても、それは異常な氷の厚さであった。袋田の滝、高萩の沼、支笏湖。何か似ていると二人は感じた。

十五

千春達が北海道から戻ると、科捜研に出しておいた沼から取った、サンプリング水の分析結果がでていた。その結果に千春と美佐子は新たな疑問を持った。

「おかしいな、前の水質検査では炭酸ガスは検出されてなかった」

千春が不思議そうにいった。

炭酸ガスは別名、二酸化炭素と呼ばれるもので、気体では炭酸ガスとして炭酸飲料水や消化器の発砲ガスとして、また固体はドライアイスと呼ばれて生鮮食品などの運搬や、舞台演出などでのスモッグ発生に使われているので、日頃から普通の人でもよく目にしている物質である。

二酸化炭素の性質は常温では無色無臭の気体、マイナス七十九度で固体のドライアイスになる。水には溶け易く固体になったときの比重は一・五六二で水よりもずっと重い。また、二酸化炭素は環境中にごくありふれた物質で、その有毒性が問題となることは余りない。自然界では炭酸温泉が出ている場所や、火山の近く等では高い濃度になる事がある。

「沼の水が川に向かう水路でサンプリングした一カ所だけ、それも高濃度の炭酸ガス」

前回、千春は、沼に川から流入する場所、沼の氷に穴を開けた場所、そして新たに立ち枯れが発生していた沼から川に戻る水路付近、都合、三カ所で沼の水をサンプリングしていた。

「普通、炭酸ガスは、あのような沼などからは、こんなに高い濃度は出ないだろう？」

「でない。空気中には0.03%くらい含まれているから、微少なら出ても不思議ではないけど、これほどの濃度にはならない」

「炭酸温泉などは近くにないのか？」

「あの沼の近くには火山もなければ、炭酸温泉もない」

「とはいっても、これだけの濃度、沼のどこからか炭酸ガスが出ているとしか思えない」

問題は どうして炭酸ガスが突然、沼に現れたのかであった。沼に入る水からは濃度の高い炭酸ガスは検出されてない。検出されたのは沼から外に出る水路に限られている。それも良くわからない事であった。

二月も月の半分に差し掛かっていた。その間に千春は、柿岡に頼み、支笏湖の氷の厚みの測定と水質検査をして貰っていた。その結果が届いた。

驚きであった。氷の厚みは数カ所で調べているが、その平均は二メートルに近いものであった。

千春の頭は混乱していた。二メートル近い氷。それは無理だと、千春の頭は理屈抜きにその数字を見て判断をしていた。珍しかった。千春のように理詰めの間人が感覚で即断するのは。それほど千春は、二メートルの厚みに異様なものを感じた。

水質検査にも疑問があった。支笏湖からも高い濃度の炭酸ガスが検出されている。支笏湖で始めてした水質検査による結果であるために、支笏湖が元々、どの程度の炭酸ガス濃度を示す湖

であったかはわからない。しかし、少なくとも高い濃度となれば、高萩の沼と同じような事が起きていると考えるのが普通であった。

この異常現象に炭酸ガスが絡んでいるとすれば、異常現象の中心は、どちらも水を蓄えた沼や湖で起きている可能性は高い。その考えからすれば、流れのある袋田の滝の凍結だけが異質のものに見える。

袋田の滝と高萩の沼、これは近い場所にある。袋田の滝の異常凍結は、高萩の沼によって引き起こされた、そのような考えも浮かぶ。

現在も袋田の滝は凍結をしたままになっている。千春は滝の状況を聞くために、再び田山に電話をした。返ってきた答えは、ここの所、朝の冷え込みは、まだ残っているが、日中はだいぶ気温があがり始めている。田山は、そう言った後で、少し照れたように”私は、自分の感覚に自信がなくなった”と述べた。

更に”この温度でも滝が氷っていると”続けた。田山の言葉からは、滝が凍っているのは嬉しいのだが、自分の感覚とのズレを生じている事に対しての戸惑いが伺えた。

電話を終えた千春は、椅子に座り、耳の後ろに指を置き考えていた。

滝をもっとも良く知る田山でさえ戸惑っている。その滝の上流には、例の凍り付いた沼がある。

十六

千春と美佐子は再び沼に向かった。二月も中旬となれば、日中の光は多少赤みが戻り、柔らかい物を感じさせる。しかし、二人の前に現れた沼は、カチカチに凍結したままの姿であった。ただよく見ると、さすがに春の訪れが近いのか、川から流入する水路付近の氷だけは、僅かではあるが溶けだしていた。

「川の水も緩んできたみたいだね」

その光景を前に、美佐子が話しかけた。

「この沼が、滝に流れる川の水を冷却しているとしか思えない。今日は、この沼に入る水の温度と沼から出る水の温度を調べてみる」

美佐子が頷いた。二人は、沼に注ぐ水路に向かった。途中で拾ってきた棒の先に温度計をつけて水温を測った。

川から沼に流れ込む水の温度は七度を示した。二人は、今度は沼から、川に流れ出す水温を測る事にした。しばらく沼の周囲を歩くと、その水路付近に到着した。

「水温が〇．九度」

千春が水路から引き上げた温度計の値を、呆れたような顔で見ながら呟いた。

「低すぎるのか？」

「低い、いくら氷の下を流れてきても、この水温はあり得ない」

怪訝な表情を浮かべたまま、千春は場所を変えて水温を計った。結果は〇．八度、それほど違った水温ではなかった。流れの早い水路を見つめて、千春は考えていた。

水は約四度の時が最も比重が重い、沼に川からの水の流れ込みがないとすれば、比重の重い四度の水が沼の底に溜まる。ここに川から暖かい水が流れ込めば、押し出されるのは四度の水と川から入る暖かな水が混ざった水になる。沼表面の氷による冷却効果などは、それほど大きくない。まして外気温が高まりだした、今の時期を考えれば、四度を下回る水温などは考えられないのであった。ただ、このとき千春は計った水温が低いのには驚かされたが、一方で、この沼から低温の水が川に吐き出されれば、滝周囲の外気が下がらずとも、袋田の滝が凍るのは説明ができると考えていた。

「どうかしたか？ 千春」

押し黙った千春に美佐子が声をかけた。

「この沼には何か秘密がある。異常な量の炭酸ガスといい、この水温。間違いなく、この沼には秘密がある」

そういながら千春は、沼がどのような状況にあれば〇、八度Cの水温が得られるのかを考えながら、沼の岸辺を歩いていた。

〇、九度Cや〇、八度Cの水温とは、氷の下の四度Cの水が更に冷やされなければならない。しかし、すでに外気温は厚い氷を通して冷やせるほどのものではない。可能性として残るのは氷と直接接触して冷やされた水と氷が溶け出した水であった。しかし、ここは川からの流入があって水は攪拌されて川に戻る。

川から暖かい水と沼一杯の四度Cの水、それらの量に比べ、氷が溶けた水などは微々たるもので、おそらく水温を一度下げる効果もないであろう。

そのとき千春は沼の底に、もう一枚氷があったらどうなるかと考えてみた。

ここで沼に川から水が入ってこない閉ざされた沼とした場合、その沼に仮に二枚の氷があるとすると、ここにも温度によって比重を変える水の不思議が影響をする。

ここで重要となるのは水が一番重たい四度Cの水を冷やすと、今度は軽くなる性質であった。

沼の表面に氷が張っていれば、この時点では沼の水が一番重い四度Cの水によって満たされている。このとき沼の底に、もう一枚の氷があれば沼底の氷の表面に触れている水は、四度以下に冷却されると、今度は軽い水となり上昇を始める。しかし、上昇ができるのは水面に張った氷の下までなるが、このとき二つの氷の間にある重い四度Cの水は下の氷に向かって沈んで行く。

これは、二つの氷の間で、沼に氷が張るための準備運動であった水温を四度Cに変えたのと同じような対流が始まるとの意味になる。但し、この場合は、二つの氷の間に満たされる水の温度は、氷になる直前の零度Cに近い軽い水で満たされる。

その状態で、川からの流入水を考えれば、川からの流入水によって心太式に零度C付近まで冷やされた水が、沼から押し出されると〇、九度Cや〇、八度Cの水温も有りうる。

しかし、問題は氷は水に浮く物であって、沼の底には氷はできないという事であった。

――まあ、物理の常識からすれば、本来は氷は沈むのが普通なんだけどな……。

氷は水に浮く。水は不思議な物体である。分子式では水素二個と酸素一個が結びついた単純な化合物である。一般的な物質は液体から固体に姿を変える場合、固体の方が分子結合が密となり

体積を小さくする。体積が小さくなれば、結果として比重は増す。

地球上で固体になったときに体積を増し、比重を軽くするような物質の数は極めて少なく、それらは異常液体と呼ばれている。氷が水に浮く、見慣れた光景であるために当たり前を感じるが、物理の世界では特異な性質の一つになる。

そんな事を考えながら千春は美佐子と、再び川から沼に水が運ばれる水路近くに戻ってきていた。千春は、じっと氷が溶けた水面を見ていた。しばらくして、千春の目が、水面の一角所に注がれた。

「どうした千春？」

その様子に気づいた美佐子が声をかけた。

「あそこ、水底にあるのは、氷と違うか？」

比較的水面の揺らぎのない場所を指さして千春がいった。美佐子もいわれるままに、その湖面を見つめていた。

「たしかに、氷のように見える」

「あれは氷だ」

普通、氷は水に浮く物である。沼の底に氷があるといわれた美佐子にしても、素直に答えられるものではなかった。

「本当に氷なの？」

水面が揺らぐ為、はっきりとはわからない。美佐子は自信なく呟いた。

「いや、氷だ。間違いない。取ってくる」

千春が自信ありげにいった。

「あほか、こんな寒い中、沼に入ったら死ぬぞ」

美佐子が真顔でいった。

「いや、取ってくる」

すでに千春の顔は学者の顔付きをしていた。こうなったら何を言っても駄目なのは美佐子にはわかっていた。普段は優柔不断に見える千春であるが、こうと決めたら何でも動かない所がある。その性格を知るだけに、美佐子はどうしたものかと迷った。ただ、冗談では済まされない。凍り付いた沼である。沼に入るのはあまりにも危険であった。

「わかった。とにかく焦るな。沼に入るなら、それなりの準備をしてからだ」

「沼に入るのに準備など必要ない」

「馬鹿か、お前は、後先を考えずに行動しようとする。まずは準備だ」

「準備って？」

「濡れた服で、どうやって帰る。まずはたき火の用意だ」

美佐子は、すぐにでも沼に入りかねない千春を引っ張って行き、たき火用の枯れ木を集め出した。千春も渋々とそれに従った。元々、沼の周囲は立ち枯れている。枯れ木を集めるのは簡単であった。

枯れ木が集まると火をおこす事もせずに、千春は服を脱ぎだし下着だけの姿になった。

「さむい！」

身体を縮め千春がぶるぶるといった。

「当たり前だろう。まだ冬だ」

今にも沼に入ろうとする千春の姿に慌てて、美佐子は枯れ枝に火をつけながら、千春を怒鳴った。

「慎重に入れ！ まず自分の身体に水を打ってからだ」

「わかっている。心配ない。これでもお前に負けないよう体は鍛えた」

そういうと千春は湖面近くに歩み寄り、美佐子にいわれるまま、水をすくっては自分の身体にかけた。千春は身を切るような寒さに襲われたが、今は、寒さなど考えている余裕はなかった。ただただ、あの氷に触れて見たいとの一心である。

千春は、そのまま沼に進むと冷たい水が足を濡らした。千春の顔が苦痛で歪んだ。

「大丈夫か！」

再び、心配そうな顔で美佐子が甲高い声で叫んだ。そのときには千春の身体が沼の水に半分ほど沈んだ。水から顔を上げて何とか下の氷を取ろうとしたが、手が届かない。千春は意を決すると、大きく息を吸い込んだ。そのまま身体を水面に沈めた。

その様子を見入った美佐子の顔は真っ青になっていた。

すぐに、千春の身体は水面から出てきた。その手には氷の^{かけら}欠片がしっかり握られていた。

「早く上がってこい！」

美佐子が叫んだ。千春の様子がおかしい。千春は沼の中に足をつけたまま、茫然と手にした氷を見つめていた。

「早く上がって来い！」

再び、美佐子が叫んだ。

「……美佐、そこからサンプル容器をもってきてくれ」

千春の声が寒さの為に震えていた。

「いいから、上がれ！」

「サンプル容器だ！」

千春の鋭い声が飛んだ。仕方なく美佐子はバックからサンプル容器を取り出し、千春に手渡した。

「これ」と、言って氷の欠片を美佐子に手渡した。その間に、千春はサンプル容器に水を汲んだ。

「美佐、これを見ろ」

そういうと千春は、美佐子の持つ氷の端を折り、水の入った容器に氷の欠片を入れた。その様子を美佐子は何かと見ていた。しかし、やがて美佐子は驚いたように自分が手にしたサンプル容器を睨んでいた。

「……これは」

千春がサンプル容器に入れた氷の欠片は、ひらひらと沈みサンプル容器の底に沈んだ。

千春は、水中で折れた氷の欠片が、そのまま水に沈むのを見ていた。沈む筈のない氷が沈んでいった。それは間違いではなかった。今、こうして明るい所で試しても氷は水に沈んでいった。

不思議な光景に呆気にとられていた美佐子が正気に戻った。

「……わかった。千春、もういいから上がれ」

手にしたサンプル容器に目をやりながらも、美佐子が千春を諭した。その言葉に、やっと千春も沼から上がってきた。千春の顔も当惑と寒さからか、阿呆のような顔をしていた。

美佐子は、サンプル容器を見つめる千春の手を引き、たき火のそばに千春を連れてきた。

そこには唇を噛み、がちがちと青白く震える千春の姿があった。美佐子は、千春の後ろに回ると、そのまま自分の身体で覆うようにして千春を抱きしめた。しばらく美佐子は、そのまま千春を後ろから抱いていた。

まもなく千春の身体の震えが止まった。

「馬鹿だ、こんなまねして」

「……しかし、これで沼の秘密がわかった」

美佐子は、ポンと千春の頭を叩き後ろから離れた。美佐子の服も濡れている。美佐子もたき火に身体を預けた。

改めて美佐子は近くにあるサンプル容器を見た。氷は沈んだままであった。

「どうして、この氷は水に沈む」

美佐子が、不思議そうな顔で話した。

「……簡単に言えば水より比重が重い」

「それはわかっているが」

そういいながら、美佐子はたき火から離れると、沼の縁に置いた氷の欠片を拾い上げ、少し砕き再びサンプルビンへと入れてみた。やはり氷の欠片は沈んでいった。美佐子は沈む氷を不思議そうに眺めていた。

「美佐、済まない。そのビンの水を捨て氷を詰めてくれ」

「わかったわ」

美佐子は返事をするといわれるままに、容器の水を捨て氷を一杯に詰めた。

「早く帰らないと、氷が溶ける」

「馬鹿、よく乾かせよ。必要ならきちんと装備を整えて、また取りに来れば良い。沼の底にある氷なら今日、明日に溶けはしない」

「それは、そうだが、すぐ調べて見たい」

こうなったら千春は、もう一つの事しか見てない。そのブレーキを掛けられるのは自分だけと思うと、厳しい顔で下着が乾くまで待つよう、千春を怒鳴った。千春は渋々ながらたき火のそばで下着を乾かしていた。

氷は溶けずに署に持ち帰れた。千春は、すぐに署にある冷蔵庫に保管をすると、鑑識に行き計量計を借りてきた。

「氷の重さを計るのか？」

「比重を出してみる」

相手は沈む氷である。比重を出す事は簡単にできる。

千春は用意したビーカーに正確に、二百ccの水を入れた。次に千春はできるだけ大きな氷の固まりを選び、その重さを測定した。氷の重さは三十七・五グラムであった。そのまま千春は氷をビーカーに入れた。

氷はビーカーの底に沈んだ。比重は、その計りたい物質の重さと体積が解れば求められる。浮く氷の体積を正確に求めるのは面倒であるが、なにしろ水のなかに沈んでしまう氷である。体積を求めるのは簡単であった。沈んだ氷によって押しのけられた水の分量が、その氷の体積になる。

「二百三十四CC、この氷の固まりは体積は三十四CCだな」

「氷の重さは三十七・五グラムで体積は三十四CC。重さを体積で割ると……。」

「氷の比重がでた。約一・一、水の比重一を越えている」

「比重が一以上ある氷、そんな氷が実際に作れるのか？」

「実験室レベルなら作れる。例えば一ギガパスカル程度の圧力下で作った氷なら水に沈むと聞いた事がある」

「ギガパスカル？」

「気圧で言えば一万気圧くらいかな」

「すごい圧力だな。圧力さえかければ、沈む氷は幾らでも作れるのか？」

「いや、この方法では大量の氷は作れない」

「どうして？」

「ギガパスカルの圧力を作り出すにはダイヤモンドセルのようなものでないと、強烈な圧力に耐えられない」

「ダイヤモンドセル？　ダイヤモンドとは宝石のダイヤか？」

「意味はな、ただ、ダイヤに工業用の加工ダイヤもある」

美佐子が頷いた。

「どちらにしても、ダイヤモンドセルは高価なダイヤを向き合わせで使いダイヤモンドに圧力を加え、その間の資料に高圧を掛ける仕組みの装置。使うのがダイヤモンドだから、資料の置ける空間は微々たるものだろう」

「そんな装置では、採取した氷の量さえ作るのは大変だろう」

「そう思うよ。沼の底は大量の氷に覆われている。新しい技術を使わなかったら絶対に無理だ」

「沼の底は大量の氷に覆われているのか？」

「間違いはない。沼から出る水温が一度以下だったのを考えたら、沼の底が大量の氷で覆われてないと説明がつかない。それに沈む氷が存在する事で、袋田の滝が異常な凍結をしていた理由、立

ち枯れの問題、それらも全て説明できる」

「あの沼がクーラーの役割をしていたんだな」

「ああ、あの沼で冷やされた水は、再び川に戻る。それによって川の水温が下がる。その水温の下げられた水が滝から落ちるから、滝付近の外気温度が、これまでのようにマイナス五や六度まで下がらなくても簡単に滝は凍った」

「立ち枯れを起こした土地の凍結も、それか？」

「迂闊だった。土地は表面から凍るものとの固定観念から抜けられなかった。しかし、沼の底に大量の氷があれば話は別だ。沼周辺の土地は、深い部分から凍ってもおかしくはない」

氷の温度は、必ずしも零度ではない。マイナス十度の温度の中では、氷は冷えてマイナス十度になる。沈む氷がどのように作られたのか、解らない今の段階で判断するのは難しいが、沼の底の氷が低い温度で作られたものであれば、沼の底の氷はマイナス五度やマイナス六度などの温度になっているかも知れない。その場合、地中は氷に触れた部分から凍結をしていく。

立ち枯れ問題がいつのまにか、局地的低温問題に変わってきた事に美佐子も戸惑いを見せていた。

「千春、これは自然にできたものなのか？」

「違う、おそらく違う。こんなものが自然にできたら地球がおかしくなる」

「.....しかし、沼の底にべったりと氷があるとしたら、氷を造る施設が必要だ」

美佐子は何度か行った沼の周囲を、頭に呼び起こしていった。

「なかったな。沼の近くに、その様な施設は.....」

沼の底を凍らせるほどの氷を作るとなれば常識的に考えても、それ相応の施設がないと氷は作れない。しかし、沼の周囲には美佐子がいったように、そのような建物は一切なかった。

「本当に誰が作っているのか？」

「ああ、あれは人工的に作られた氷だ」

今度は、千春は迷いなくいった。

ある一定のメカニズムにおいて自然が作り出したものが、そんな簡単に変わるものではない。まして氷である。これが金属とか植物であれば、軽い金属ができたり、重たい植物ができたりするだけで、その影響は人類にとってはさほど大きなものとはならない。しかし、氷は駄目である。地球規模で考えた場合、海や湖にできた氷が沈むとは、これまで、地球に降り注ぐ直射日光という強力なエネルギーによって溶けていたものが、水に守られて溶けにくい氷になるのである。周辺環境の変化はもとより強いては、地球規模での環境変化にもつながる。地球上にある多くの物質のなかから、環境に重大な影響を及ぼす氷が選ばれる。確率から見ても普通で考えられない。その一方で人類は実験室レベルであれば、重い氷を作れる技術を持つ。それらを通して、やはり現実的には人工的に作られたものだと千春の直感が、そう言わせていた。

数日後、警察庁の柿岡周五郎が高萩湾岸署を訪れた。警察庁幹部の突然の来署に高萩湾岸署の幹部も驚いた。刑事局長ともなれば、国会答弁などにも登場する要職、おいそれと所轄にやってこられるようなものではない。

その局長が千春と気安く話している。どうなっているのだと署員も驚き見ている。

柿岡は美佐子に案内され刑事課分室に入ってきた。

「叔父貴、どうしたのですか？　こんな所へ」

「まあ、お前達の仕事具合を見に来た」

千春が苦笑いを浮かべ、「忙しい叔父貴に、そんな暇はないでしょう」というと「そうでもないが」と苦笑を浮かべ千春に応じながら、柿岡がソファに腰をおろした。

「実は、今回の件は、相当厄介な問題になりそうな気がする。そこで千春達に、専従班として働いてもらう為、ここの署長に、その事を頼んできた」

それが沈む氷の件であるのは、千春にもすぐにわかった。

「厄介になりそうですか？」

そのとき美佐子が、お茶を持ってやってきた。

「ありがとう」

「いいえ」

「美佐子君にも聞いて欲しい」

そういわれた美佐子が、そのまま千春の横に座った。

「君達のお陰で色々とわかってきた。沈む氷と聞いたとき昔の件を思い出した」

「昔の件？」

「今から三十数年前になる」

「僕達が生まれた頃の話ですか？」

「そうだな、ちょうどお前たちが生まれた頃だな」

「そんな遠い昔のできごとが、今回の件と何か拘わってくるのですか？」

「拘わるかどうかは、今ははっきりしないが、お前達には話して於いた方が良かった」

柿岡が何を話すのだろうと、千春と美佐子は顔を見合わせた。

「千春が話した沈む氷、その氷を三十数年前に造ろうとした人物がいた」

「沈む氷を、そんな昔に？」

柿岡が頷いた。

「その男は神田勇次郎と云う学者で、五十六歳で亡くなっている」

そう切り出した柿岡は、神田勇次郎について話し始めた。

神田勇次郎が活躍をしたのは一九五〇年から一九八〇年代。そのころは今と違って地球は寒くなるといわれていた時代であった。このとき、神田勇次郎は地球温暖化が起こると真逆の予測をして、国などに働きかけをしていた。ただ、学会の定説も地球は寒冷化に向かっているとあれば、神田の説は学会は元より行政府でも相手にされるものではなかった。

温室効果ガスの規制を行えば、産業に影響を与える。それは神田にもわかっていた。それでも、神田は何れ地球温暖化は証明されると考え、温室ガス排出低減をしつように国へ訴え続けていた。しかし、その一方で神田には別の不安もあった。仮に地球温暖化が証明されても、温室効果ガスの削減は、日本だけで出来るものではなかった。世界各国が協力して初めてなしえるものだと思っていた。

問題は神田の生きていた時代背景にある。今でこそ地球温暖化については世界各国が取り組む姿勢を見せてはいるが、神田の生きた時代は、まだ冷戦と呼ばれアメリカ陣営と旧ソ連陣営が、二大陣営に分かれ対立をしていた時代である。とても現在のような世界協調が行えるような状況にはなかった。

温室効果ガスの排出規制は世界が協力しないと効果は薄い。世界協調が無理な環境で他に何か良い方法はないかと神田は模索をした。その結果、神田は物理的に地球温暖化を防止する方法に考えを変えていった。

神田は考えた。地球温暖化が進むなかで起きる物理的な現象は、極地の氷や寒冷地などの氷河などの減少に現れる。温度が上がるから氷が溶ける。では、その氷の量を一定にできれば、逆に温度の上昇を抑えられる。しかし、そうとはいえ氷を造るには大量のエネルギーが必要であり、大量の氷を作り出しても、同時に大量の熱を発生させては意味はない。

水は、地上にある物質の中でも極めて熱を通しにくい物体の一つである。その水から作られた氷も熱は伝えにくい。しかし、氷は水に浮く。如何に熱を伝えにくくとも、氷は水に浮くために直射日光や外気に触れた部分から溶け出すのが普通である。

そこで神田が思いついたのは氷を沈める事である。氷の性質からして、氷を沈められれば、非常に溶けにくい状態で保てる。溶けにくい状態を保持できれば、それだけ少ない量の氷でも地球の気温上昇に効果的に使えると考えた。

神田は、沈む氷の研究に打ち込んだ。その結果、大量の氷を低エネルギーで作りに出す事が可能な、新たなシステムの理論を完成するに至った。

神田は、自分の考えをまとめると沈む氷があれば、温室効果ガスを規制する事なく温暖化は防げると説き、実証実験により、それを確認すべきだと行政府に働きかけた。

しかし、時代が悪かった。なんといっても今と違い寒冷化が叫ばれている時代であり、神田の提唱は、そんな簡単に行政府が取り上げる筈もなかった。神田は、行政府と交渉中に、五十六歳で、その一生を終えたと柿岡は話した。

「神田勇次郎という男は、行動力もあった。中央行政に対しても、沈む氷の研究を行うべきと提案していた」

「神田さんの行動が認められる事はなかったのですね」

「まあ、当時とすれば、寒冷化が叫ばれていた時だ、相手にされなかったとしても、仕方なかったらう」

「五十六歳ですか、神田勇次郎が亡くなったのは」

「そうだ」

「早いですね。病気ですか？」

「いや、凍死。多分そうなのであろう。当時の警察は酒に酔って寝た為に、凍死したと発表している」

多分とは柿岡にしてはおかしな言い方であった。

「何か叔父さんは神田勇次郎の死に疑問があるのですか？」

「疑問とまでは言えないが、捜査の段階で当時の警視庁は、環境対策課にいた吉永和宣との関係を調べていた」

「環境庁の人間とトラブルがあった……」

そう言いながら千春は吉永和宣、何処かで聞いた名前だと思った。

「元々神田勇次郎と云う学者は、温暖化を持ち出すまでは優れた学者としてとおっていた。環境庁の学識経験者として外部委員等を務めるほどであった」

「それで、当時の環境庁には知り合いがいたのですね」

「まあ、知り合いと云う表現が正しいのかは別にして、当時の環境庁のなかには神田勇次郎を知る人物は多くいた筈だ」

「沈む氷を発案した人物が凍死ですか？」

「神田勇次郎の自宅は奥多摩にあった。今でも雪の多く降る場所だが、当時はもっと積もった。その雪のなかから遺体が見つかった。酒に酔っての凍死、それが当時の警察の判断だった」

「その環境庁のお役人が疑われた理由とは？」

「簡単にいえば業者との癒着。地検が動いていた最中に神田勇次郎は亡くなった。神田勇次郎は業者ではないが、どうも二人の間に金銭のやり取りがあったような話を聞いた。それで警察も調べた」

柿岡の話によれば、神田は沈む氷を使えば他国にも影響がでる為、包括的な研究が必要として、それは国で行うべきだと訴えていた。しかし、寒冷化が叫ばれている時代とあって、神田の話をもとに取り上げる者はいなかった。しかし、何故か環境庁の吉永だけは神田の話に耳を傾けていた。ただ、当時から吉永の周りには、色々と金を巡る噂があった。

「神田勇次郎は資産家の生まれ、そして当初、あのご時世にも拘わらず吉永和宣は、神田の説に同調していた。当時の噂は沈む氷の研究を約束して、神田勇次郎から金を引っ張っていたのではないかとの事だった」

「その時代背景では、いくら吉永が説いて回っても、まず環境庁は動かないですね、そうすると吉永が本当に金を引っ張っていたら、二人の間で何れ問題となりますね」

「そうだろうな、実際に金が絡んでいたとすればな」

「証拠は出なかったのですか？」

「出なかった。まあ、どちらにせよ。金の方の疑いはあっても、殺害までは警察も深くは考えなかったようだ。一応、当時の警察も神田勇次郎が死んだ日のアリバイが吉永にあったのは確認している。それで捜査は終わっている」

「そうですか、ところで、その神田勇次郎氏は実際に沈む氷を作ったのですか？」

「実際に作った話は聞いてないな」

「論理的には可能だとの話しは、どうでしたか？」

「それも、よくわかってない。――ここまでが、千春から沈む氷の件を聞き、部下に調べさせた事だ」

そのとき怪訝な顔をしていた美佐子が、柿岡の顔を見て、

「叔父様、吉永和宣って、もしかして今は代議士をしているのではないですか？」

柿岡が頷いた。その様子に千春も、あっと思いながら吉永和宣とは、現在の環境大臣だと気付いた。話にてていた環境庁は、二〇〇一年に省に格上げされ現在は環境省となっている。そのこの大臣をしているのが吉永和宣であった。

柿岡は、そうだと頷いた。現職大臣という大物政治家に絡む話だけに、他人に任せられずに自らが、ここに足を運んできたのかも知れない。

「これは科捜研で調べた、高萩の沼と支笏湖の報告書だ」

柿岡は、調査報告書を千春に手渡した。

その調査書によって高萩の沼は、水面一メートル以下は全て氷に覆われている事が解った。沈む氷と湖面に張った氷、その間で河川から流れ込んだ水は冷却されて、再び川に戻され袋田の滝に注ぐ。千春と美佐子が予想したような事が起きている事が確認された。

科捜研でも沈む氷を手にして、各種の分析が行われていた。その中で千春の目を引いたのは沈む氷、その物に多量の炭酸ガスが含まれている事であった。

以前の調査で沼から出る水路の水から、多くの炭酸ガスを千春は検出していた。あれは氷から溶け出たものであったのだと思った。

「ところで叔父貴、科捜研の氷についての見解は、どうでした？」

報告書に目を通しながら千春が尋ねた。

「人工的に作られた可能性が高いと見ている。俺は科学的なものはよくわからんが、通常の温度や圧力下では、あれだけの量の炭酸ガスは氷には含めない。そのような話しだった」

やはり、そうかと千春は頷きなから、柿岡が、わざわざ神田裕次郎の話をした理由にも納得がいった。

支笏湖側では超音波測定によって湖底の地形を計測したと書かれていた。

「叔父貴、支笏湖からはサンプリングしなかったのですか？」

「人工的に作られたと決まったわけではないけど、その可能性が強い。となると作った相手は、まだ支笏湖の近くいるかも知れない。警察が動いてるのは、まだ知られたくはない。そこで超音波で調べてみた」

「そうでしたか」

支笏湖の最深部は約三六三メートルである。この深さから氷を採集しようと思えば、大がかりな作業になる。その作業は湖の上では何処からでも見えてしまう。それを柿岡は嫌った。沈む氷があるかないかは超音波でもわかる。超音波測定なら、湖上にレジャー用の小さなテントを張り、そのなかで氷に穴を開け簡単に測定ができる。それなら、たとえ湖の近くに相手がいても警戒

はしなと思った。

「それに沈む氷なら高萩の沼からな簡単に取れた」

千春が柿岡の言葉に頷いた。

「三百六十六メートルあるべき最深部は、今では三百メートルを切ってますね」

「そう、支笏湖の湖底にも、間違いなく大量の氷が存在している」

「しかし、なんの為に支笏湖や高萩の沼で沈む氷を造っているのでしょうか」

「理由は、わからない。ただ、おおっぴらにはできまい。高萩の沼は山の中だ。支笏湖は漁業の盛んな湖ではなかった」

「支笏湖は結構大きな湖でしたが、漁業は余り行われてないのですか？」

「漁業が盛んに行われているような湖であれば、沈む氷に湖底が覆われたら、漁業関係者はすぐに不審に思う。そのような噂を聞かなかったので、あの湖の漁業の状態を調べてみた。そしたら支笏湖に漁業権が、設定されたのは平成二十年の事だった」

「あんな大きな湖なのに、少し前じゃないですか、漁業権を得たのは」

「そう、あの湖は、元々大型の魚が多くいる湖ではなかった。だから、漁業は発達しなかった。近年、ヒメマスなどの養殖や放流が行われるようになり、やっと漁業権が取得できたのが、あの湖だ」

支笏湖は日本では八番目に大きな湖であるが、そこに住む魚類は本来二十に満たない種類で、まして大型の魚が多く生息している湖ではなかった。そのために漁業は発達しなかった。柿岡が調べたように近年になりヒメマスの養殖や放流などが行われるようになり漁業組合が作られて、漁業権を拾得していた。

支笏湖は、これまで漁業が発達しなかったうえ国立公園を構成する湖とあって、今でも動力船などの使用にさいしては厳しい規制が設けられている。

「普通の湖であれば、今は安価な魚群探知機が幾らでもある時代、もっと早く沈む氷は知られていたかも知れない」

「人に気づかれずに氷を沈められる条件が揃ってるのが支笏湖ですか？」

氷が湖の底に沈めば、湖底の地形は変わったものとして映る。一日や二日で大量の氷を作るのは無理がある。時間をかけて氷を作るとなれば、漁船などが何時でも漁をしているような湖では、湖底の変化はおかしな噂となって伝わる。どうやら、それが、支笏湖を選んだ理由のようであった。しかし、一方で支笏湖は不凍湖として知られている。その不凍湖に氷が張れば不審に思われる。

千春は不凍湖に氷を張らしたのは、何故だろうとの思いがした。叔父の話をもとに総合すれば、氷を造る段階は知られたくはないが、その後は知られても構わないと相手が考えていたように思えた。同じ事は高萩の沼にもいえる。あの沼を凍らせれば、袋田の滝は凍りやすくなる。沼を凍らすと考えた者が、沼の地形を調べずに氷を造ったとは思えない。

相手の目的は、定かではないが千春は、少なくとも沼や湖を凍らせるだけが目的ではないような気がした。

「まあ、支笏湖の事も調べて見ると、いろいろであるかも知れないな。一応、俺の方で支笏湖湖畔に、そのような大量の氷を作れる施設があるか、調べて見たが駄目だった」

「叔父貴が調べても駄目だったのですか？」

少し驚いたように千春は柿岡をみた。

「最初は簡単に探せると思った。しかし、駄目だった」

どうして探せないのか不思議であった。湖の底に沈んだ氷は数万屯になるか数百万屯になるかわからないが、そのような大量の氷を作るとなれば、かなり大きな施設が必要になる。更に大量の電気も必要となる。そこまでわかっていて、しかも支笏湖湖畔という建物の少ない限られた場所にあるのも間違いはない。それが警察の手によって探せないとはおかしな事であった。ただ、それはよく考えて見ると高萩の沼にもいえるものであった。

柿岡は、一通りの話しを終えると慌ただしく署を後にした。

十九

沈む氷、それは自然の変化などによって出来るものではない。間違いなく人為的に作り出しているものだ。

「沈む氷に絡んで、最初に名前が挙がったのが吉永環境大臣か……」

千春の迷いを象徴するかのよう、千春の言葉の語尾は濁っていた。現在、吉永は環境大臣として力を振るっている。叔父の話では、神田勇次郎と吉永には接点があった。それも沈む氷によって繋がっていた。その事からいえば疑ってかかる必要が、あるのかも知れない。しかし、すぐに駄目だなと思い直した。

「逆だよな、仮に沈む氷が温暖化対策に使えるとなったら、吉永大臣の立場は悪くなる」

美佐子も、そうだなと頷いた。政治家である吉永が沈む氷に絡むとなれば、それは政治的に沈む氷が利用可能との視点にたたないとならない。しかし、それは同時に沈む氷が、地球温暖化防止に使えると認める事でもあったが、千春にしても美佐子にしても、まだ、そこまでの考えには至らないでいた。

仮にという考えを用いて政治的に沈む氷が利用可能との視点で見ても、吉永の場合は、作っては駄目な方の立場になってくる。

吉永が環境大臣を務める早坂内閣はニューヨークで開催された国連気候変動首脳会合で、総理自ら日本の温暖化ガスの中期目標を二〇二〇年までに、二十五%削減を目指すと表明をして、温暖化対策での指導的役割を担うなどしている。

その早坂政権の目玉政策である炭酸ガス削減の施策を行ったのが環境省で、その中心が吉永大臣である。

吉永大臣は炭酸ガスの排出規制を施策した。それは企業の負担や家庭の負担増は避けられない。もし、沈む氷が地球環境に使えるほどのものであれば、国民から反発を招くような施策は不要となり、国民からは歓迎されるばかりか、地球温暖化問題では、日本は確実に世界のリーダーに躍り出る事ができる。そうなれば早々に炭酸ガス二十五%案は出さなかった。

「政府にしても吉永大臣にしても、おそらく沈む氷の存在は、返って邪魔な物ね」

「そうだよな、吉永は環境大臣。沈む氷は政府の施策と一致しない」

早坂総理の発言は、日本が世界に対して国際公約をしたものである。その実、日本は、炭酸ガスの削減なしで温暖化防止の可能な沈む氷を作っていたとなれば、日本政府は世界に対して、二枚舌を使ったと取られかねない。

あくまで仮の話とはいえ、沈む氷の存在を知らながら、世界一厳しい炭酸ガス排出削減案を公表したとなれば、産業界はもとより国民から政府は大きな反発を受け、政権与党にとっても大打撃になる。

吉永大臣にしても軽率のそしりは免れず、辞職に追い込まれかも知れない。

「駄目だな、そのような政府の都合は考えないとしても、環境大臣の立場にある吉永なら、国の研究機関が使える、今のような違法な方法で、試験を行う必要はどこにもない」

おそらく沈む氷が地球温暖化防止に利用できる物であっても、政府の姿勢を考えたら吉永大臣の頭に、沈む氷の件が有ったとは思えなかった。あるいは、実際問題として沈む氷の件を吉永が考えたとしても、環境を変えるのは無理との判断があれば、結果は同じになる。

「吉永と沈む氷は結びつかないな」

「だいたい、沈む氷が本当に温暖化対策に使えるか、それからして怪しい」

それが大きな問題であった。たしかに支笏湖を凍らす力は凄い。しかし、温暖化対策は地球規模という桁違いの話である。

「製氷機はおろかスノーマシンもある時代、氷によって地球温暖化が防止できるとなれば、世の学者先生はとうに考えても不思議はないでしょう。そんな話しが何処からもでないのは、環境を変えるほどの大量の氷は、できないと諦めているんじゃないの？」

「そんなところだろうな」

千春の考えも美佐子に近かった。作る技術はあっても地球環境となると、その量が半端なものではない。極地に原子力発電所を幾つもつくって氷や冷気を作り続け、解決できるような問題であれば、今頃は、そのような話しが話題になっている。結局、地球温暖化は氷や冷気など物理的なものの解決は、無理だから温室効果ガス削減となるのであろう。

「捜査の原点に戻るのが必要ね、叔父様のメモに神田勇次郎さんの息子の名前があったでしょう」

突然湧き出た政治家の名前と三十年前の話しから、ここまでの事を考えては見たが、そんなに甘くはなかった。ともかく美佐子のいう通りだった。最初から先入観で沈む氷と地球温暖化を結びつけるのも、今作られている沈む氷を、神田裕次郎と結びつけるのも早計だと思った。

「叔父さんが住所も調べてくれたわ。息子さんはつくば市に研究所を構えている。名前は神田三郎さん」

千春達は神田三郎に会ってみる事にした。

二人はつくばの神田環境研究所を尋ねた。神田環境研究所は、筑波大学のすぐ近い場所にあ

った。建物は小さい。三十坪程度の建家に小さく看板を掲げているだけの、事務所という感じの作りをした研究所であった。

神田三郎は、白髪をした初老の男で、眼鏡の下には優しそうな目を持っていた。二人が面会を求めると心やすく応じてくれた。応接室に通された二人は挨拶を済ますと、千春が神田に話しを始めた。

「先生の所では、どのような研究をしているのですか？」

「現在、地球は温暖化と言われていますが、それが本当に正しいものかを調べています」

「今は、温暖化ではないのですか？」

「ここ数十年を見れば、それは温暖化と言えるかも知れませんが、昔、地球には氷河期があり、地球は凍っていました。現在は氷期と氷期の間、間氷期と考えるのが自然です」

神田は、最後の氷期が終わったのは一万年前であり、そこから一万二千年ほど間氷期が続いているため、学者の中には新しい氷期が間もなく始まる可能性もあると述べている人もいと話し、何故氷河期が起こるのか、諸説はあるが、まだはっきりとしないと述べた。

神田は長い期間で見た場合、温暖化に向かうのか、それとも寒冷化に向かうのかは、いまだによくわからないので、研究をしていると話した。

不思議な気がした。三郎の父、神田勇次郎は数十年前に寒冷化と云われる中で温暖化を訴えていた。その息子である三郎は、温暖化が叫ばれる中で寒冷化について話しをする。

「失礼ですが、お父さんの神田勇次郎さんは温暖化を唱えていたと記憶していますが？」

三郎は人の良さそうな顔に笑みを浮かべ、

「それは期間をどのように取るかで変わる話しです。父の考えは間違ったものではありません。極めて短い期間で見れば地球の温度は上がっています」

北極の温度は、単に極地だけの気温に影響を与えているだけではない。南太平洋で暖められた海流が極地付近まで流れ込む事で、極地やアメリカ、ヨーロッパなどの寒冷化を防いでいるとの側面もある。

これは海には海水を運ぶベルトコンベヤのような巨大な流れがあり、極地付近までは表面海流として到達して、極地付近で沈み込み深層海流となってインド洋と太平洋に戻る仕組みであった。極地付近で沈む込む原因としては、表面海流は海面から水が蒸発して塩分が濃くなり比重を増す、また、極地で冷やされると、そこでも比重は増し、重たい海水になるために沈むと言われている。所謂、熱塩循環説と呼ばれるものである。

確かに温暖化が進み、仮にグリーンランドや北極の氷が大量に溶ければ、その付近の海水塩分濃度は薄められ比重の軽い海水になってしまう。そうすると極地付近で冷やされても上手く沈めなくなり、海流の流れが大きく変化してしまう。

海流の変化により極地近くに大量の熱が運べなくなれば、極地は再び寒くなり氷に覆われる。それが寒冷化につながる。勿論、寒冷化のメカニズムは、このような一つだけの単純なものでは語れないとしながらも、温暖化によって氷が溶ければ、次は寒冷化を考えないとならないと神田は話した。

難しい話しではあったが、どうやら神田は、温暖化の兆候は、寒冷化の兆候でもあると聞いたかったようだ。

「先生は、勇次郎さんが作ろうとした沈む氷には興味がないのですか？」

じっと神田は千春を見た。

「よく沈む氷を御存じですね」

沈む氷と聞き三郎は、その老いの始まり出した顔に、遠くを懐かしむような仕草を交えて話した。

「興味は全くありません。その点、僕と父では考えが違います。その根本にあるのは、父が亡くなって既に三十年以上が過ぎました。その間には地球環境については色々新たな事もわかってきました。先ほど話しました海洋熱塩循環説なども父の生きた時代にはわからなかったものです」

「すると先生は、沈む氷は必要ないと」

神田が静かに頷いた。

千春は、神田勇次郎の亡くなった件について聞いた。

「父の死んだ日の事ですか？あの日、父は誰かと会っていた。僕は、当時、まだ学生でしたが、ずっと父の手伝いをしていました」

神田の話によれば神田勇次郎が亡くなる数年前から、勇次郎は沈む氷の研究に没頭して、その成果をやっと見いだせた。亡くなる直前も学会に発表する論文を書いていたと云う。しかし、書いていた筈の論文は、何処からも出ることなく勇次郎は死んでいった。当日、会った人間に論文を渡したのか、それもわからないが、沈む氷についての論文は発表されないままに終わったと語った。

「最後に会った人物とは、吉永代議士ではなかったのですか？」

千春は、単刀直入に尋ねてみた。

「父と吉永さんの関係は、当時の警察も調べたようですが、父が亡くなった日を含め、吉永さんは海外視察でヨーロッパの方を回っていた筈です」

「そうですか、しかし、書いていた論文は見つからなかったのでしょうか。論文を吉永代議士に渡すようにした、そのような事は考えられませんか？」

「それはないと思います。それに正確には父は論文を書き終えてなかったのですから」

「書き終えてなかった？」

「ええ、まだ完成はしてなかったと記憶しています」

論文が完成してなかったという三郎の言葉は、千春にとっては少し意外であった。

「論理的には、仕上がっていたとは思いますが、ただ問題は、実際に大量の氷を作るためには、その時、開発中のある研究の結果を、待たなければ成らなかったのです」

「開発中の研究.....」

「はい、完璧な考え方をする父でしたから、その研究経過を見てから論文を完成させようとしていました」

「その開発中の研究とは、なんですか？」

千春から、そう聞かれた三郎の顔に思案の様子が浮かんだ。

「それは話さなければいけないですか？」

逆に三郎が千春に問うた。

「何か支障があるのですか？」

「沈む氷を作るために必要となる技術です。不用意に沈む氷を作らせない為には、その部分は聞かないほうがよいと思うのです」

「……先生は沈む氷が作られるのが、不味いとお考えなのですか？」

「沈む氷を実験室で作る分には問題はありません。しかし、その技術を使えば大量に簡単に生み出せます。万一、野外で作られたら大変な事になります」

「大変な事ですか？」

「はい、例えば深い湖などに沈む氷を作ったら、水に覆われた氷はよほどの事がないと溶けません」

水の比熱と氷の比熱を考えれば、そうだろうと千春も思った。氷は、浮いているから直射日光や外気に触れでとけていく。しかし、氷が沈めば湖底の深いところに行き着く。その湖の諸条件によって一概には言えないが、水深が百メートルを超してくれば、おそらく、その時の水温は夏でも四、五度くらいしかない。その低い水温でガードされた氷はなかなか溶けないであろう。

「気象条件次第では、それは氷河と同じように一年を通して湖の底に残ります。そんな氷が底にあったら、冬には、その湖は氷だけの世界に変わります。そうなったら、そこに生きる生物はどうなりますか？」

「生物は、みな死滅する……」

「そうです。そして一度凍り付いた湖は、夏の直射日光を浴びても、おそらく溶けるのは表面の数メートルくらいで、翌年も凍り付きます」

たしかに気温の上昇とともに氷は溶け出す。浅い湖であれば、氷は溶けるかも知れない。しかし、数十メートル、数百メートルと凍ったらどうなるか。表面の氷が溶ければ、それは水となって氷を覆う。水は温められれば温めるほどに軽くなり表面に現れる。下には氷で冷やされた重たい水が溜まっていく。そのうえ水は非常に熱を伝えにくい物質である。

夏の強烈な太陽の下に置かれた氷であっても、その水に守られれば、何十メートルもの氷を、全てを溶かすのはできなくなる。

全ての湖や沼は、現在の気象環境と氷が水に浮くことが前提で生物を育んでいる。その環境が大きく変化をする。勿論、湖の大きさや、その場所の気候が絡むとはいえ、少し寒い地区にある大きな湖であれば、永久凍結湖に成り易いのが沈む氷の影響力であった。

「そんな自然の摂理に反するような氷について、私としては話したくはありません」

神田は製造に関するものは、はっきりと話したくないと述べた。三郎からは任意で話を聞いているに過ぎない。千春としても、まだ沈む氷が作られている話しは、表には出したくなかったが、仕方ないと思った。

「……実は、沈む氷を作ろうとしている者がいるようなのです」

「それは誰ですか？」

神田が驚いたように千春をみた。

「誰であるかは、まだ、わかりません」

「……沈む氷は余りに危険だ。作らせては駄目だ。絶対に！」

それまでの神田のにこやかな表情は一瞬で姿を消し、不機嫌そうな表情に変わっていた。

「あの氷の製造は、方法さえわかれば極めて簡単な仕組みで幾らでも氷が作れる。さっき僕は言った。生半可な知識で、あの氷を扱えば大変な事になると」

「幾らでも作れるのですか？ では先生は気候変動を起こす程、大量の氷を作れるとお考えですか？」

「できる」

神田は千春の目をじっと見て答えた。

「しかし、如何に氷を沈めても環境を変えらるとなると莫大な量が必要です。それでも可能なんですか？」

「できます」

千春は、スーと鼻から息を抜いた。なんとも判断のしようのない会話に、千春は息苦しさを覚えていた。

「どのように受け取れば良いのでしょうか、正直、わかりません」

千春が、小さく首を振りながらいった。

「そうですね、製造方法がわからないとできる、できないとの議論をしても始まりません。――当然ですが新しい方法です」

「それは例えば沼などにある種の薬品を投入すれば出来るとか、または従来の冷凍技術の延長からの新技術とかとなるのですか？」

「私は製造に関する話はしたくありません」

神田の表情には重苦しいものがあつた。

「それは十分承知しています。しかし、捜査の為にアウトラインだけでも構いませんのでお聞かせ願いませんか？」

今度は神田がフーと鼻から息を抜いた。

「薬品を混ぜて作る、それほど理想的方法ではありません。やはり設備は必要になります」

「すると、これまでのお話からして、その設備とは、かなり小さいもので済むのですか？」

「……刑事さんが、どのくらいの施設規模をイメージしているかわかりませんが、おそらく刑事さんが考えているより、遙かに小さな施設で作ることが可能だと思います」

神田は頷いたあとで、そういった。神田の話に千春は、何度も行った沼の様子を頭に描いていた。あの沼の周囲には何もなかった。少なくとも製造施設があれば、付随する電気設備なども必要になる。しかし、それらしきものもなかった。施設とは、どの程度の規模を指すか千春は知りたかった。

「先生、例えばですが面積一万九千平米、深さ一メートル程度の沼を凍らすにはどの位の施設の大きさが有ればできますか？」

「それは、先ほど刑事さんが誰かが作ろうとしていると、話した事に関係していると考えてよいのですか？」

千春は素直に頷いた。じっと、その姿を見ていた神田であったが、やがて「……期間はどのくらいとした場合ですか？」と聞いてきた。

「三ヶ月位の期間です」

千春が述べた面積は高萩の沼を頭に置いていた。あの沼に厚さ一メートルくらいの氷を作ると想定をした質問であった。期間にしても、千春自身が秋口までは、沼に通っていたが異変はなかった。そこからして氷が造られたのは、秋から冬にかけての期間であろうとの推測ができた。千春は、それに沿った内容で神田に尋ねていた。

神田の顔には戸惑いが表れていたが、それでも誰かが作ろうとしてるのを知った為か、仕方なさそうに近くからペンと用紙を取ると幾つかの計算を行った。

「……三ヶ月位の期間なら、施設との考えは必要ないでしょう。そうですね。おそらく畳三枚程度の場所があればできます」

「そんな小さな場所で出来るのですか？」

驚いた千春に神田が、そうだと頷いた。畳三枚であれば施設というよりは物置程度と見てよい。自分達が考えていたより、遥かに小さな物である。本当に物置程度の場所で出来るのなら沼の周囲は杉林、何処にでも隠すことはできる。

「すると先生、電力はどうなります。作るのが氷です。どうしても電力は必要ですよ」

「機器の構成によっては家庭用電気でも二十アンペアもあれば、十分だと思いますよ。大量に電気を使うようでは氷を作る意味は失われます」

氷を作るのに大量の電気を使えば、それが環境に影響を及ぼす。その理屈はわかる。しかし、それほど都合良く沈む氷はできるのかと思うと、なかなか納得できるものではなかった。

千春は、気になっていた炭酸ガスの件も話してみた。

「……先生、沈む氷を作るためには炭酸ガスが必要ですね」

千春は神田に鎌を掛けてみた。笑いの消えた無表情の顔で神田は探るように千春を見た。

しかし、神田は口を開こうとはしなかったが、特に否定もしなかった。

千春は話題を変えた。

「先生は、お父上の考えた沈む氷を、温暖化防止に使ったら大変危険だと考えているようですが、なにがいけないのですか？」

「沈む氷を地球温暖化防止に使っては駄目なものです。確かに大量の沈む氷を仮に北極点や南極点などで作り出せば、一時的には地球温暖化はくい止められるかも知れませんが、しかし、そのような方法で温暖化を止めたら、今度は急激な寒冷化を引き起こす可能性があります。何しろ相手は複雑奇怪な動きをする自然です。そこには人間の能力の及ばないものが必ずある筈です。急激な地球温暖化、たしかに厄介な問題です。しかし、私から見たら寒冷化の方が確実に怖いと思って

います」

「寒冷化も怖そうですね」

「ええ、寒冷化はアメリカやヨーロッパなどが一年中、氷に閉ざされる話しです。農作物は、全く出来ません。結局、そこに人は住めない。まして世界的寒冷化ですから食料難は必至。良いことは有りませんよ」

二人は神田に礼を述べて神田の元を出た。千春が車を運転しながら美佐子に話し掛けた。

「神田勇次郎氏が考えたシステムでも炭酸ガスが必要になる」

神田三郎は返事はしなかったが、否定もしなかった。それはシステムに炭酸ガスが使われているとの意味に取れる。

「どうやら作られた沈む氷は、神田勇次郎氏が考えたものと同じと見て良さそうだ」

「そうかも知れないね」

「それに施設の規模、想像していたより遥かに小さい。そうすると、あの沼の何処かにある筈だ」

「しかし、近くには電柱もなかった」

「たいして電気を使わないのなら、小型の発電機でも電気は作れる」

「沼の底には多くの氷があるのだろう。そんなもので出来るのか？」

「三郎氏が嘘をいっても始まらない。可能性としてはあるのだと思う」

製造過程がわからないのだから、千春にしても神田の話しから判断しないとならない。神田は物理的に地球温暖化防止に使えるといった。そのためには、画期的な作り方でないと、とてもおぼつかないのは確かであった。それなら沼の周囲に電柱や電線がなかった事にも頷ける。

「しかし、本当に海に入れるほどの、大量の氷が作れるのかな？」

訝しそうに美佐子がいった。

「わからない。しかし、その為には神田裕次郎氏は考えていた。極地の海底に沈めるだけの製造能力がなかったら、裕次郎氏は論文などは書かないと思う」

たしかに、神田の考えに立てば、そうなるのであろう。それはわかっている。しかし、現実にも、そのような事が可能かとなれば、神田の話しを聞いた今でも千春にしても戸惑いは隠せなかった。

二十

今でも沼の周囲では沈む氷が作られているかも知れない。このまま、沼にいけば何者とも知れない相手と鉢合わせになる恐れがある。美佐子と二人だけで、沼に行くのは危険だと考えた千春は、署に戻ると大杉課長の協力を得て、数人の捜査員を伴い沼に来ていた。

周囲を調べていると、一人の捜査員から無線が入った。高萩方面からの対岸付近の山中に、最近壊されたとみられる山小屋らしき跡があるとの連絡だった。千春達は、その場所に向かった。

千春達が着くと、すでに数人の捜査員がその場所に集まっていた。周囲に散乱した木材などの量から、小さな山小屋の跡のようであった。ただ、あるのは木材だけで装置のようなものはなか

った。

散らばっていた捜査員の数が増えるに従い、他には、これといったものは沼の周囲にないのがわかった。そのとき捜査員の一人が、

「春さん、ここ、埋め戻した跡がありますね」といった。

千春は、その捜査員の示す場所を見た。隠すように廃材が上に置かれていたが、それを取り除くと、明らかに土を埋め戻した様子があった。

装置などが埋まっているのかも知れないと思った千春は、調査の為に持っていた、折り畳み式の小さなスコップを使い埋め戻された部分を掘ってみた。柔らかい為、それほど力がある作業ではなかったが、スコップが小さい為、時間はかかった。捜査員と交代で掘り進んだ。

一メートル位地面を掘ってみると、金属の配管が二本現れた。それは明らかに沼に向かって伸びている。

沼の方向に向いた配管越しに沼を見ながら千春が、「決まりです。ここで氷が作られていた」というと回りにいた捜査員も頷いた。

「装置は持ち去ったようですね」

「そのようです。土を戻しましょう」

捜査員も頷いた。

千春が近くにいた美佐子にいった。

「神田先生の話は間違っただけではなかった」

「しかし、こんな小さな場所で氷が造られたとは」

頷いた美佐子が、小屋の大きさを想像しながらいった。

柿岡が支笏湖周辺を調べていたが、該当するような施設は見つからなかった。警察としても支笏湖を凍らしているとなれば、ある程度の大きな施設を中心に捜査をしている。施設が予想を遙かに下回る大きさであれば、見逃している可能性は強かった。

土を戻す千春達のそばに立ち、美佐子は周囲を見回した。

樹木などの枝をとろとろ払い落とし、沼に向かい直線的に空間が広げられていた。小屋のあった杉林は日中でも薄暗い為、林の外から小屋は見えないであろう。しかし、その空間を使えば、よく沼が見える。沼を観察するためのものであったのか、近づく人を知るためのものであったのか、あるいは、その両方のものであったのか、それはわからない。ただ、これでは自分達が沼に来れば、すぐに気付かれたと思った。

署に戻った千春と美佐子は、沼についての話しをしていた。

「沈む氷をつくる施設は撤去されていた。私達の姿を見られていたのは間違いないだろう」

小さな沼である。小屋のあった場所から沼全体を見渡せた。

「そうらしいな」

「千春は高萩から、あの沼に行くとき誰かに会ったりはしなかったのか？」

「一度もない」

「車が近くに停まっていたりしなかったか？」

「それもなかった」

高萩方面から沼に入るには、千春達が使っていた細い道以外にはなかった。まして、山間の、あの集落付近に行くためには車は必要であった。

「高萩からの道は、相手は使ってなかったと思う」

自分以外の人間が度々、足を運んでいれば、多少の痕跡は残っていても良さそうに思えた。何度も沼に足を運んでいる千春であったが、山道で誰かが先に歩いた痕跡を見た記憶はなかった。

「まあ、沼に行くには階段を登る気なら、袋田からの方がずっと近い」

滝の横に設けられていた鉄製の階段を思い浮かべながら、沼の位置を重ねて千春が答えた。

「しかし、階段からでは装置などの機械物は運びだせないだろう」

「同じだ。高萩からの山道にしても無理だ。資材の運搬はヘリでもできる」

「そうか、それなら普段は手ぶらで済むから階段でも構わない。……階段か。階段、――そうだな新聞だ」

「新聞がどうかしたか？」と聞く千春に「ちょっと待て」といった美佐子は、千春を部屋に残し部屋から出た。

しばらくすると美佐子は新聞を手に部屋に戻ってきた。

「これだ、これを千春はどう思う？」

美佐子が指で示した新聞記事は数週間前の雪の日に、袋田の滝の階段下で死んでいた男について書かれたものだった。

「この死んだ男、気にならないか？」

千春が新聞に目を落とした。

「地元の間人ではないな」

「死んだ男の住所はつくば市、つくば市は別名つくば研究学園都市、研究機関が多数集まった場所だろう」

「研究員なのか、この死んだ男は」

「それはわからないけど、研究員なら沈む氷の製造に携わっていたかも知れないでしょう」

「なるほどな」

「それに、雪のある急な階段を早朝から使うのもおかしい。沼からの帰りだから使う他なかったと、考えた方が自然だとは思わないか？ それだけではない。私は、始めてあの階段を使ったとき、しっかりと手すりを握っていた。それは落ちるのが恐かったからだ」

千春は美佐子の言葉の意味を考えていた。階段を使い馴れていたから油断があった。階段の先には沼がある。男が、何度も階段を使っていたとすれば、そのような考えもできる。

千春は頷くと、大子北署に問い合わせた。

詳しい話しが聞けた。

事故のあった当日、大子町は雪が降った。しかし、雪といっても降り出したのが明け方近くで、すぐに止んだために、うっすらと雪が積もっただけであった。それでも雪に残った足跡の向き

などから、やはり男は階段を下りてきたのがわかった。

大子北署では、死んだ男はしっかりとした冬服をしていた事もあり、冬の袋田を見に来て誤って階段から落ちたと見ていた。男が階段から転落したと思われる原因も解った。

男は肩に大きなショルダーバッグを掛けていた為に、階段では揺れるバックを片手で押さえていて、片手だけしか使えなかったのかも知れないと、大子北署では話していた。

死んだ男は坂口康男二十九歳、住所はつくば並木、勤務先は堀田研究所となっていた。やはり美佐子が考えたように研究所に勤務していた男であった。しかも坂口が務めていた堀田研究所は、大子北署によれば、冷凍技術の開発を手がけている研究所となっていた。

「冷凍関係の技術者だってさ」

美佐子がいった。

二十一

死んだ男が、冷凍関係の技術者と知った二人は、勤務先である堀田研究所を尋ねた。

堀田研究所はつくば市の学園西大通りから、少し奥まった豊里という場所にあった。事務所の裏に、通路で繋がった試験棟を持った施設で、作ってからそれほど経ってないのか綺麗な施設であった。

千春達が研究所に着いたとき、ちょうど所長の堀田も大きなバックを手に、何処からか戻ってきた。

堀田は四十半ばの痩せ気味の男であった。堀田は、大きなバックを事務所の片隅におくと、二人を応接室に案内をした。

「どうして刑事さんが、坂口君の事を調べているのですか？ 坂口君は階段から落ちての事故で亡くなったと、警察の方から伺っていますが？」

少し浅黒い顔の額に皺を寄せて、目を細め怪訝そうに堀田が聞いてきた。

「事故はたしかですが、あの日、何故坂口さんは平日なのに袋田に行っていたのか、その辺が、少し気になったものですから」

「それでしたら坂口君は、あの日、仕事で袋田に行きました」

「仕事だったのですか？」

「ええ、坂口君は冷凍庫などの大型物件を主とする研究をしていました。その為にフィールドワークも必要だったのです」

堀田のいう大型冷凍庫の研究と屋外でのフィールドワークが何処で結びつくのか、千春にはわからなかった。その様子に気付いた堀田が続けた。

「たとえば北海道などの雪の多い地域に、大型の冷蔵倉庫を造る場合、雪や、その地区の冷たい水を利用しない手はありません」

「自然を利用した冷蔵倉庫ですか？」

「はい、そのように自然を組み込んだ冷凍倉庫であれば、電力の節約につながります」

「それでフィールドワークが必要だったのですか？」

「そうです。たまたま、坂口君の実家である大子町には袋田の滝と云う冬場、凍結する滝があります。色々な自然環境のデータを取るには面白い場所です。それで昨年から彼は、袋田近辺での調査を続けていたのです。……結果的には、あのようになり我々としても残念で仕方ありません」

堀田は、悔しそうな顔をした。

「坂口さんは、大子で実験もしていたのですか？」

「それはないと思います。坂口君にはデータ収集の為のフィールドワークについては許可していましたが、それ以上の許可はしてはいませんから」

「坂口さんの活動範囲は滝の周りだけでしたか？」

「活動範囲と云われると良くはわかりません。御承知かと思いますが、研究員は研究に関するものであれば広範囲の権限があります。フィールドワークの許可をすれば、後は坂口君任せになりますから」

実際に坂口が、研究所のフィールドワークとして大子町に行ったのなら特段、堀田の話しにおかしな所はない。

「坂口さんは、沈む氷の研究もしていたのですか？」

堀田が千春の言葉に、眉をよせ少し怪訝な表情を浮かべた。

「沈む氷？ それなんですか？」

「沈む氷を御存じありませんか？」

「いえ、たしか超高圧の中で作った氷が沈む。重水素を凍らせれば水に沈む。その程度は知識として持ってますが、その氷に利用価値が伴わなかったら、我々のような小さな所では試験はしません。坂口君も、沈む氷を使うような研究はしてなかった筈です」

「沈む氷には利用価値はないのですか？」

「沈む氷は、基礎研究の分野であれば、研究材料にはなるのでしょう。しかし、私共の研究所は営利が目的です。私どもの取引先は主に物流業界です。現在は性能的に氷より効率の良い保冷材が幾らでもある時代です。わざわざ作るのが難しい氷を研究する意味はないですね」

堀田が大量に作れる沈む氷があると知らなければ、尤もな話しではあった。それだと堀田の話しから、坂口が沈む氷を作る理由はなくなる。

二人は堀田に礼を述べて研究所を後にした。つくばからの帰り、美佐子が運転する千春に話しかけた。

「残念、私の見込み違いだった」

「いや、まだ、それはわからない。良いところを突いていたと思うよ。少なくとも、堀田さんの話により美佐が考えたように坂口は、あの階段を使い慣れていたのでわかった」

「それはそうだけど、使い慣れていただけでは意味がない」

「そうでもないさ、坂口が持っていたショルダーバッグが気になる」

「ショルダーバッグ？」

「堀田さんの話したフィールドワークとは、色々な観測点で温度や湿度を測ったり、その時の状

況を記録したり、写真で残したりするものだろう。それなのにショルダーバッグで行くか？ それも、坂口がいた袋田の滝は山の中、地形を考えたら山歩きだ。山歩きがメインとなるような場所なら普通はリュックサックじゃないのか？」

「観測メモをとるには両手が使えないと不便。それだとリュックサックの方が便利。たしかにそうだ」

「しかも雪の日だ。そんな日に日頃からフィールドワークにでている人間が、ショルダーバッグでは出まい」

千春と美佐子は、その足で袋田に行き、坂口についても調べてみた。

坂口が使っていた袋田の滝近くの、駐車場の管理人から聞いた話によれば、坂口は、ここ数年、冬になるとちょくちょく、その駐車場を使っていたと云う。そのため駐車場の管理人は坂口とは顔見知りになっていた。時には立ち話程度のものはしていたと云う。坂口は、その管理人には自分は写真家だと述べて、冬の袋田の写真を撮るために来ていると話していた。

「やはり坂口は、普段はリュックサックを使っていたな」

駐車場の管理人さんの知る坂口は、いつでもリュックサックを背負っていた事がわかった。管理人さんに坂口がショルダーバッグを持ってきたとの記憶はなかった。また、今年は、いや正確には年をまたぐ話しである為、昨年の秋口となるが、そこまでは、よく坂口の姿を目にしたが、冬になってからは、ほとんど坂口の姿は見えないとも話した。

管理人さんの話には、幾つか奇妙な所があると千春は思った。自分の職業を偽ったのも、その一つであった。

「管理人さんは、坂口がショルダーバッグを使っている姿は見たことないと言った。そうになると、あの日に限り坂口はショルダーバッグを使った事になる」

「たまたま荷物が多かった。あの管理人さんが居ないとき、たまたま、坂口はショルダーバッグで来ていた……たまたまが多すぎるな」

余りに偶然を多用する自分の考えに、少し照れたように美佐子のはにかんだ。そうになると、何故、あのような場所にショルダーバッグで来たか、美佐子も気になった。

「……坂口は外にでるのに天候も調べなかったのかな」

美佐子が、少し考えるように話した。

「天候？」

「坂口が、茨城の天候を知らなかったとしたら、ショルダーバッグを使っても不思議ではないわ」

二十三日夜から翌未明まで、大子町は雪になるとの予報があった。朝起きて突然の雪ではなかった。たしかに山歩きする人間なら、天候くらいは調べても良さそうであった。

ちらりと、美佐子の考えを探るように、千春が助手席に座る美佐子の横顔を見た。

「そう、あくまで坂口が、あの沼の氷を作った男だとすれば、今、沈む氷は支笏湖にもあるのよ。堀田研究所が拘わっていると考えれば説明はできる」

その言葉に千春もなるほどと思った。そう、坂口達が沈む氷を作っていたとの前提であれば、駐車場の管理人さんも、冬になってからは坂口を見てないと話していた。

「おそらく、坂口は北海道にいたんじゃないの」

「北海道からの帰りに、袋田に坂口は立ち寄ったんだな」

美佐子が頷いた。それなら、茨城の天候に気付かなかったのもショルダーバッグで、袋田の山に入ったのも納得がいく。

北海道からであれば、福島空港を使えば、水郡線一本で大子町まで来られる。その場合、大子駅から滝まではタクシーを使うことになる。タクシーを使えば駐車場の管理人はショルダーバッグ姿の坂口を見る事はない。冬になってから駐車場の管理人さんが、坂口を見かけなくなったのも、坂口が車を使わなかったと考えれば納得がいく。

「坂口の亡くなるまでの足取りを追えば、堀田研究所や坂口の関与がはっきりするな」

二十二

一月二十三日の新千歳空港発福島空港行きの、全日空搭乗者名簿に坂口の名前があった。

雪の前日、坂口は北海道から福島経由で大子にきて、そのまま山小屋で一泊して朝に山小屋を後にした。北海道からの移動中であつた坂口は、大子地区に雪の予報が出ているのに気付かずに、あるいは知っていても北海道からの帰りとあつてショルダーバッグを使わざる得なかつたのかも知れない。

ここまで坂口の足取りがはっきりすれば、堀田研究所に対しての疑いは強まる。

千春達は、堀田研究所の所員の足取りも追ってみた。やはり堀田を始めとした山下、草野という男達が、頻繁に北海道に行っているのがわかつた。

堀田研究所であれば、沈む氷を作る理由がある。その点では千春も美佐子も多少の安心をした。

堀田研究所、二年ほど前に北山産業のつくば研究所の冷凍関連に携わっていた四人が独立をして起こした研究所。堀田は自然環境を利用した、冷蔵倉庫の研究などを行っていると話していた。たしかに自然を利用した冷蔵倉庫に関する研究を行うグループであれば、神田のシステムを使った、沈む氷の開発には大きな意義を持つ。

高萩の沼や支笏湖を凍らす技術には、目を見張るものがある。その技術を使えば、冬季に沼や湖を凍結させ、その近くに冷蔵倉庫を建てれば一年中、凍結の恩恵を受けた冷蔵倉庫を作るのも可能になる。

現状からすれば犯人は堀田研究所で、ほぼ決定であつた。堀田研究所の所員であれば、沈む氷の能力を試したいとの研究員としての誘惑に負けたのかも知れない。あるいは研究所の売名行為という打算もあるのかも知れない。

「全く人騒がせの連中だ」

美佐子が強い口調でいった。その口調のなかには、政治家の名前も挙がっていただけに政治家絡みでなくてほつとしたとの様子も含まれていた。

「そうだな。神田勇次郎先生の技術を使えば、沼や湖を簡単に凍らし、一夏持つような大量の氷も作れる。そばに冷蔵倉庫を置けば、効率の良い自然冷蔵倉庫の完成だ。これ、また、美佐の好きなエコだよ」

「一緒にするな。どのような優れたエコを開発するにしても、他人の土地を勝手に凍らしたり自然公園内の湖を凍らせれば、当然、罰を与えないとならない」

「そりゃ、そうだ」

とはいえ現時点で、堀田研究所を犯人とするのは、北海道に堀田研究所のメンバーが今年の夏頃から頻繁に渡っている事からの千春達の憶測に過ぎない。

堀田研究所の目的が、自然を生かした冷蔵倉庫建設の試験であれ、他に目的があるにしても、他人の土地で勝手に実験を行うのは違法である。知ったからには早めに止める必要がある。そのためには証拠を掴むか、現場を押さえるかとなってくる。

支笏湖と云う桁違いに広い湖であれば、現在も支笏湖では沈む氷が作られている可能性は高い。現に堀田研究所の三人も、北海道に行ったきりになっている。

「もう一度、北海道に行ってみるか？」

「製氷工場を探すのか？」

千春が頷いた。それがもっとも手っ取り早い方法であった。

神田の話から、相当コンパクトな施設でも氷は作れる。柿岡の指示で地元の警察が、ある程度の規模を想定して捜査をしている。今度は逆に、小さな施設を中心に調べていけば良いのであった。

「千春に探せる自信はあるのか？」

「あるさ、佐野さんの話しが手掛かりになる」

「遊覧船の乗客が見た光った物か？」

「そう、あれは氷が沈むのを見たかも知れない。それに佐野さんの観光船の探知機が異常を示したのも、その近くだ」

二人は支笏湖の地形や湖底図を調べてみた。

佐野さんの話した場所の近くには恵庭岳があり、そこには伊藤温泉とオコタン温泉と呼ばれる場所があって、その二つの温泉地の付近で土地が湖に飛び出した地形を形成している。伊藤温泉側の飛び出した地形を大崎と呼び、オコタン温泉側の地形をオコタン崎と呼んでいた。観光船の乗客が光を見たのはオコタン崎の近くを遊覧船が通過する時であった。

調べてみると、この付近の湖底は急斜面で急激に深くなっている。陸地の施設から沈む氷を湖底に落とすには、都合のよい地形であった。

氷が作られている場所は、オコタン崎付近で間違いないと千春は思った。ただ、この付近は原生林が深く茂っている場所である。それでも、ある程度、場所の目鼻がたてば、元々、余り人のいない場所だけに探せると思った。

二人は、再び支笏湖に行くことと決め、支笏湖周辺の地図を開き考えていた。

「オコタン温泉に泊まる場所はなさそうよ。昔は二軒宿があったけど、その一つが今は野営管理

棟に使われているだけ」

「温泉があるように書かれていたけど駄目か？」

「廃湯だってさ」

「管理棟も五月から十月期間限定営業、この様子だとオコタン付近は冬場は誰も居ないのかもね」

できれば調べたいオコタン崎付近に宿を取りたいと思った。しかし、オコタン温泉という地名は残っていても、現在は廃湯となって営業している宿泊施設はなかった。近くの伊藤温泉も、冬季は閉鎖される。そうなる支笏湖での宿泊は、前にも一度、泊まった宿の多くある対岸の支笏湖温泉街となってくる。

「ほんとうに人の居ないところのようだな」

「だから、相手も選んだんじゃないの、隠れて何かをするには、良い場所よ。――千春、どうする。この分だとオコタンに近づくのは結構厳しいわ、雪が消えるのを待つ？」

「いや大丈夫だ、支笏湖には分厚い氷がある。あんなもすぐ溶けたりはしない。今なら湖を渡って探せる」

「そう、わかったわ」

「ただ、安心はするなよ。堀田研究所の裏に何かあるかわからない」

現在、見えている事柄だけであれば、堀田研究所の自己顕示力とも思えるが、それだったら、高萩の沼だけでもよかったようにも思える。支笏湖を凍らすのは、余りにも大胆である。そこに千春の一抹の不安があった。

「そうね、たしかに用心は必要ね」

それは、もうすぐ三月を迎えようとしていた時期の事であった。

二十三

二人は翌日、支笏湖に向かった。

湖に張った氷に溶け出す様子などは微塵も感じられなかった。茨城から支笏湖についた当日は、近くでスノーモビルが借りられないが聞いて回ったが、見つからなかった。

翌日、二人は、早朝に宿を出た。天気は曇り、雪は降ってない。天気が悪くなるとの予報もない。遠くには対岸の山並みも見えている。これなら大丈夫だろうと思い歩き出した。

支笏湖は北海道南西部に位置する湖で周囲約四十キロの湖であった。形状としては長辺約十五キロ、短辺約七キロの長方形に近く、その長い辺の真ん中あたりを指でぐっと押し、湖中心に押し出したよう張り出した地形を持っていた。その張り出した一つがオコタン崎となる。その為、二人の宿泊地である支笏湖温泉街からは湖面を横切れば、オコタン崎は片道八キロくらいの距離になる。

片道約四キロ、二人にしても慣れない氷の上に乗った雪を踏みしめて歩くのである。対岸に行くだけでも四、五時間は見ないとならない。結構、大変な行程になる。それが早朝に宿を出た理由であった。

「あのな、お前もこんな弱い女性と一緒にんだから、もう少し考えろよ」

しばらく歩くと疲れたのだろう。美佐子が千春に文句を言い出した。

「仕方ないだろう。スノーモビルの一台くらいは手に入ると思っていた」

「準備が悪いんだ、いつも千春は。そんな物は、現地に入る前に手配しておくものだろう」

まあ、いわればそうかも知れない。千春も、それについては美佐子に悪いことをしたと思った。しかし、こうと思ったら見境なく突っ走ってしまうのが、千春の悪い癖でもあった。

途中ぶつくさ言いながらも、白銀の世界をしっかりと美佐子は歩いていた。数時間の後には大崎岬を右に見ながらオコタン崎の近くまでやってきていた。

そこでは岬の先端まで原生林が生い茂り、その枝は白い雪を抱き込み、時々、弾けるように枝を揺らし、雪の塊を落としていた。見上げたオコタン崎の東側は湖面から十メートルを遙かに超える高さを持つ急斜面。簡単に登れるような地形ではなかった。

おそらく氷を作る施設があるとすれば、この付近になる。二人は、何か建物はないかと湖面から周囲の原生林に目を注いでいた。

「何もない」

「そうだな、湖側から簡単に見られるような場所には作らんだろう。そんな事したら遊覧船から丸見えだもんな」

この先、岬の突端を回り西に進めば、昔、宿泊施設があった付近に行ける。その付近であれば、湖と陸地の境は砂浜であり、湖面から簡単に陸地に上がれる。それは地図で来る前に調べあった。二人は、砂浜のある場所に向かった。

「あれを見な」

岬を回った美佐子が立ち止まり、山裾を見つめていた千春に声を掛けた。

美佐子の指差す方向には、真新しい建物が木々の間に見えていた。

「野営管理棟と違うのか？」

「違う、少し先の水辺に近いところを見てよ」

そう言われ、千春が、そちらに目を向けると、木々の間に古びた建物が見えた。

ここには昔、二つのホテルがあったが、今は二つとも廃業になっている。しかし、夏場は、この付近の湖畔がキャンプ場などとして使用されるため、廃業したホテルの一つを野営管理棟の名称で使い料金徴収や売店などを行っている。従って、今では、この付近に存在する建物は、野営管理棟だけの筈であった。それが、おそらく離れた場所に見えている古い建物になる。

「あの新しい建物は怪しいな」

見えているのは、さほど大きくない二階建ての普通の住宅のような家に見える。大量の氷を造るとの前提で動いた警察では、見落としていてもおかしくないような建物であった。

この一帯は、国立公園に指定されている。面倒な手続きを踏まないと簡単には建物を建てたり、土地の購入はできない。そこからして誰かが廃業したホテルの跡地を買ったのかもしれない。胡散臭い家である。木々の間に隠れているとはいえ、その建物から、こちらは丸見えになっている。

窓のカーテンが開けられている。家の中には人が居る。まだ、こっちの動きは知られたくはなかった。

「千春、写真を取るぞ」

美佐子が千春の目を見て小声でいった。すぐに千春にも美佐子の考えがわかった。

美佐子は、頭に被っていた毛糸の帽子を外し黒髪を靡かせた。ビデオカメラを構えた千春が、はしゃぐ美佐子を追って撮影した。時にはビデオを回す千春に美佐子は雪をすくって投げかけた。美佐子は上手に位置を変えている。

これであの家に住人から見られていても、物好きなカップルが現れたくらいにしか思わないだろう。必要なものはカメラに収めていった。

あれだけ堂々と、この場所に建物を造っている以上は、登記簿を調べれば相手は解る。まずは建物の所有者を調べるのが先決だと思った。

「どうする千春」

「正規の手続きを踏んで建てられたものなら、踏み込む訳にもいかない。まずは持ち主を調べてからだな」

「そうだな、無理をする段階ではないな」

「それに、あれはおそらく中継基地のようなもの。冬の間、ここの場所で何かをしようと思えば、あの程度の建物は必要になる」

「製造は別か？」

「ああ、あの場所から湖水に例えばパイプのような物を引いたら目立つ。それに湖の傾斜に逢わせ沈む氷を落とすのなら、やはり観光客が光を見たオコタン崎の突端辺りが都合良い場所だ」

湖底の地形図を見ても、オコタン崎付近は岸辺から僅かな距離で、湖は深さを増してゆく。氷を湖底に効率良く沈めるには、急激に深くなる傾斜を利用しない手はない。それに建家からオコタン崎の突端までは、まだ一キロくらいある。パイプを引くとしても大仕事になる。

「湖底の地形を使うのなら、やはりオコタン崎だろう」

ただ、冬季以外は観光船が遊覧している場所である。簡単に湖から見られるような物は作ってはないと思った。

「どうする、陸地に上がるか？」

まともに相手からは見られる場所だけに、このまま上がってオコタン崎の原生林に姿を消せば怪しまれる。それに冬は日の暮れるのも早い。如何に十分な装備はしているとはいえ、美佐子が一緒とあっては、明るいうちに戻らねばならない。

「今日はカメラを回すだけにしよう」

二人は、はしゃぐ振り装い周辺の様子を写真やビデオに収めながら、その場所を離れていった。建家が見えなくなると、千春はビデオカメラを岸辺に向けて丹念に撮影した。

宿に戻った二人は、ビデオカメラをノートパソコンに繋ぎ、写った映像を調べた。

「ここだ」

それは岬の突端を撮影した映像の部分であった。千春が湖に持ち込んだビデオカメラは、科捜

研から借りてきた赤外線サーモカメラであった。

赤外線サーモカメラは、物体から出る赤外線エネルギーをセンサーで感知して、色で温度の違い教えてくれる仕組みのカメラである。このカメラの場合は温度が高い場所は赤く低い場所は黒く表示をする。このようなカメラは雪のなかであろうと熱源があれば、それに反応をするように作られている。

「あったな」

黒く写る山中にぼつりと赤く写る場所。映像を拡大して見ると、その熱源から湖に向けて熱源が僅かに伸びている。

「熱源が、湖に向かっていて。おそらくこれは配管、途中から地中に埋めている」

岬の突端、それも自然公園の中である。普通では熱を発するようなものが設置されているとは思えない。ここが、沈む氷を作っている場所だと千春は確信をした。

デジタルカメラの映像を調べて見たが、デジタルカメラ映像からは何も確認できなかった。それは仕方なかった。相手も遊覧船などの走る湖面からは見えない、原生林の中に隠して作っている筈である。

翌日、二人は、支笏湖を管轄する法務局苫小牧支所に足を運び、新築された家の土地所有者を調べてみた。土地の所有者は有馬啓介、住所は東京都世田谷となっていた。千春は、その場所から柿岡に電話をすると、有馬がどのような人物であるか調べてもらう事にした。

その後、二人は支笏湖を管轄する役所を回り、オコタン岬の突端に国や県で新たな建築物を造ってないかなどを調べて歩き、サーモカメラに写った場所に公共の建設物がないのを確認した。

「千春、この後どうする。地元警察に告げるか？」

このまま違法建築として地元警察署に、製造工場の場所を示しても良いと美佐子は思った。

「もう少し詳しく調べてからでも良いと思う。明日、施設を陸路から辿ってみる」

二十四

翌日、二人は四駆のレンタカーを借りて、陸路でオコタン崎に向かった。宿泊先から、オコタンに向かうには国道四五三号を走り恵庭岳を一度迂回して県道七八号を南下してオコタン崎に向かう。大きな道路は除雪されているが、人の居ない場所だけにオコタン付近の小さな道路の除雪はされてないだろうと思った。

県道七八号から車をオコタン崎に向けると、やはり道路に雪が乗っている。しかし、三月という事もあり、車が走れないほどの雪がある訳ではなかった。

雪道を千春は車を走らせていた。その千春の前に停車した数台の大型車が現れた。千春は、その車を見ると厭な気になった。横の美佐子も目を細め、前の車を見ていた。あきらかに自衛隊の車両である。その車両によって道路は完全に塞がれている。

前の車から白い防寒服に身を包んだ若い自衛隊員が一人、千春達の車に近づいてきた。その男は、千春達に向かって、「どちらに行くのですか？」と聞いてきた。

「湖の西を回り美笛に行きたいのですが、この先は無理ですか？」と、不審に感じた千春がオコ

タン崎に行くのを隠して告げた。

男は、美佐子をちらりと見ると、「申し訳有りませんが、この先で自衛隊の車両がスタックをしました。現在、通行ができませんので、迂回をして頂けませんか？」と、丁寧な言葉で伝えてきた。

「少しなら待ちますが？」

「基地にクレーン車の要請をしたところですから、到着までには時間がかかりますが」

「そうですか、わかりました。それなら戻ります」

男はあくまで丁重であった。

車を戻しながら、どうなっているのだと千春は思った。

「千春、どう思う」

千春の気持ちを見透かしたように、美佐子が表情を曇らせていった。

「あんな場所で自衛隊がスタックはあるまい」

現れたのは北部方面隊。地元の雪に馴れた自衛隊である。そんな簡単にスタックなどさせまい。それに、このような場所にくるには、スタックした車両を引き上げる程度の装備は持っているであろう。

美佐子は顔を曇らせたまま、二度頷いた。車は国道四五三に戻った。

「伊藤温泉側から入る。道を調べて欲しい」

美佐子は、頷くと地図を開いた。

オコタン温泉からであればオコタン崎の突端までは五、六百メートルであるが、北東に位置する伊藤温泉からとなると、こちらは道路が幌美内までとなり、そこからオコタン崎には三キロくらい歩かないとならない。三キロといっても、まだ雪の残る原生林の中である。結構辛いかなとの思いはあった。

「ここを、右に入れば伊藤温泉に向かえる」

美佐子が地図を見ながら指で示した。

「わかった」

二人は伊藤温泉に向かった。

伊藤温泉を過ぎ、道が途絶えるまで車を進めた。車から降りてみると、地図には載ってなかったが山中に人が歩ける細い道が走っていた。おそらく夏期などには伊藤温泉側からオコタンに向かう、探索路として使われている道のようなであった。

「美佐子は残れ、俺が一人で行く」

「私も行くよ」

「良く考えろ、場合によっては堀田研究所ではなく、自衛隊だぞ」

「相手は関係ない。――あんな、お前が遭難したら迎えに行くのは私だろう。その方が嫌だよ」

美佐子は早々と車から降り立っていた。しかたなく千春も車から出た。

二人は、雪の被った探索路と思われる道を歩いた。少なくとも原生林の中を歩くよりは、よほど歩き易かった。しかし、やがて、その道から外れないとならない。千春はサーモカメラで得た

映像から、何処に目的の製造施設があるかは判っている。探索路の途中から岬の突端の方に向かわないとならなかった。

地図とコンパスから目的地は近いと感じていた。二人は足音を忍ばせるように山中を静かに進んだ。

千春が、手をかざし美佐子に動くなと示した。二人は、その場に立ち止まった。かすかに人の話声が漏れている。二人は辺りに目を凝らしていた。ゆっくりと人の声がある方に近づいた。

二人は、身を屈めながらその場所を見ていた。小さな山小屋がある。その周囲に複数の白い防寒服を着た男達がいる。先ほど千春達の車を停めた男が、着ていた防寒服と同じであった。

二人は物陰からしばらく、男達の様子を見ていた。男達は木箱などを使い何かを小屋から運び出しているようであった。周囲には、自衛隊と思しき連中以外の姿は見られない。相手が自衛隊とあっては、これ以上の長いは無用であった。

千春は美佐子を見た。二人は互いに頷くと、音を立てないように静かにその場を離れた。

「どうなっているのだろう」

車に戻った美佐子が呟いた。

本来、あの場所に居るのは堀田研究所のメンバーであると思っていた。それが現れたのは自衛隊であった。

「どうして自衛隊なんだ」

千春にしても、それは同じだった。

自衛隊は、あの場所から器機類を持ち出していた。その状況から考えられるのは二つである。堀田達が自衛隊に襲われたとの見方、あるいは堀田達の試験を自衛隊が支援していたとの考えである。どちらにしても、運び出していた器機類は沈む氷を作るためのものであろう。自衛隊までが沈む氷に絡んできたとなれば、それは尋常な事ではなかった。

千春は耳の後ろに指を当て盛んに考えていた。

「堀田研究所だけでは、終わらないようだな」

宿に戻った千春は、柿岡に電話をして支笏湖の状況を話した。

しばらく柿岡は黙ったまま、考え込んでいた。

「警察の情報が漏れているのか？いや自衛隊と警察は結びつかない」

「.....どういう事ですか？」

「この件は警察上部も興味を持っている」

「叔父貴だけではなかったのですか？」

「最初は、そうだったが今は違う。それに、内閣官房調査室も動いているとの話しも伝わってきた」

内閣官房調査室は政府の情報収集機関である。その組織までが絡んできている。内閣官房調査室が動き出したとなれば、国が自衛隊を動かしたと考えても不思議ではなかった。

「.....自衛隊がいたとなると、これ以上、お前達が近づくのは危険かも知れない。何かおかしな方向に動きだしている」

「……………」

「ともかく千春、その場を離れ、すぐに東京に來い。詳しい話は、そのときだ」

自衛隊の動きが読めない状況では、どうにもならない。一応、この地で調べる事は済んでいる。柿岡の薦めに従い二人は東京に向かった。

第六章 おどる政治家の影

二十五

千春と美佐子は、警察庁内で柿岡と会っていた。

「千春からの情報を元にこちらで、有馬啓介を調べた。有馬啓介は北山企業グループと取引関係にある事がわかった」

「北山といえば堀田達がいた会社ですね」

「そうだ、千春達が問題にしていた堀田研究所のメンバーは、北山産業の退職者。一応北山から形の上では独立したとなっているが、裏で繋がっているようだな」

「何かわかったのですか？」

「北山産業でヘリを所有している。航空事務所に出されたフライトプランから、茨城で使われていたのがわかった」

「高萩の沼への資材搬入？」

「フライトプランに、そこまで詳しくは書かれてないからな。ただ、可能性は大きい。まあ、堀田研究所は北山のダミーと見て良いだろう」

柿岡の言葉に、千春と美佐子が頷いた。

北山産業は物流中堅の会社である。その会社が、ダミーの研究所を使い支笏湖を凍らしている。違法を覚悟であるから、このような手の込んだ事をしているのだろう。

「でも、どうして支笏湖を凍らす必要があるんでしょう」

「北山産業と野党の大物議員である武内代議士に繋がりがあった」

「えっ、北山産業と野党議員ですか？」

新たに現れた現役代議士の名前に、千春の表情は曇った。

「そうだ、北山産業は、武内代議士の実兄が経営する会社だ」

「今度は野党代議士ですか？」

少し呆れたように千春が聞き返した。柿岡は、そうだと頷いた。

「すると氷を作らせていたのは、武内代議士と考えて良いのですか？」

「その可能性は強い」

野党の大物議員が沈む氷を作らせていた。それをどのように解釈すれば良いのであろうか。そのとき千春の脳裏に地球温暖化との言葉が浮かんだ。支笏湖を凍らすという壮大な実験をしようとしていた堀田研究所。その裏には野党大物代議士の影。その氷は、元々、神田勇次郎が地球温暖化防止の為に考案したもの。ここまで状況が揃えば、ある程度の推測は成り立った。

作っているのは野党の代議士である。炭酸ガス排出規制案、与党が手がけている炭酸ガス排出

規制案に沈む氷をぶつけたらと考えると、答えが見えてきた。

「今日、北山産業に地検が入った」

「それは沈む氷の件ですか？」

「違う、脱税で入っている」

「……おかしいでしょう」

「ああ、おかしい。自衛隊の動きといい、沈む氷に拘わった企業に地検が入る」

「地検は沈む氷の資料を求めて北山産業に入ったと」

「可能性としては考えられる」

そうなる国が自衛隊を使い、氷の製造現場を急襲させたとの考えができる。

「自衛隊は誰が動かしているのですか？」

「わからない。ただ、警察が掴んでいる情報では、自衛隊は恵庭岳で起きた遭難者救助を名目にして派遣されている」

なるほどと思った。国は簡単に自衛隊を動かせる手があった。

「それに堀田研究所に昨夜、賊が入ったとの知らせも聞いている」

「堀田にも」

柿岡が頷いた。

自衛隊や地検まで動かしている。政府の関与は間違いなく始まっている。沈む氷を巡り、政府と野党議員の二つが別々に動いている。それも、状況的には敵と味方。

国や野党の議員が絡んできた。神田勇次郎が考えたように、沈む氷が本当に環境を変えられるだけの力があるとの前提でないと、政府や野党議員が動いたりしない。

「叔父貴、この件は、神田勇次郎が唱えた地球環境を変えられる氷、それを信じて動き出した人達がいる。そして政府も、また、それを信じて阻止に動いている。このように見ないとならない話しですよ」

「そうだな。あれだけ威勢良く世界に向けて、炭酸ガス削減案を報じた政府にしたら、ここで沈む氷が現れたら困った問題になる」

沈む氷によって地球温暖化が防げるとなれば、企業や国民負担の伴う、政府の掲げた炭酸ガス二十五%案は国民から否定される。逆に、その事は野党にすれば恰好の追及材料となる。政権奪取の為に沈む氷を武内が必要とした。そう考えれば武内の行動は理解できる。しかし、武内は何故、沈む氷を作る事ができたのか。問題は武内はどのようにして神田勇次郎の論文を手にしたのかであった。また、その武内の行動は、どうして政府に知られたのか、そこには解かないとならない幾つかの疑問があった。

——そうか、吉永は神田勇次郎を通して沈む氷についての知見を持っていた。袋田の滝の異変にいち早く気づき、武内に辿り着いたとしても不思議ではない。

ここまでの事から、沈む氷を作ろうとしているのは野党武内代議士と堀田研究所であり、それを阻止するために動いているのが、吉永を中心とした国側勢力との想像はできた。

事件は政府を含めた国の施策にまで問題が及ぶ可能性を秘めてきた。当然、柿岡も、その辺の

事を考えたのであろう。千春が見たことのない、険しい表情をしていた。

「千春、お前達は、この後どうする？」

自衛隊の動きからして、すでに国という組織の関与は間違いない。同じ国の機関である警察にとっては尤も厄介な事件になってきた。

「僕は警察官です。警察の仕事であれば相手は誰でも関係ありません」

淡々と話す千春に柿岡は、そうかと頷いた。

千春の返事は単純明快。そこには妙な理屈など持ち込ませない、千春の意志がはっきりと現れていた。こうと決めたらとことん進む。千春の持つ違った一面である。当然、柿岡とて、それも知っている。危険であるとは知っていても、それ以上は自分の考えを押しつける訳にはいかなかった。

「わかった。しかし、相手が相手だ。注意だけは怠るなよ」

千春が静かに頷いた。

二十六

東京から戻った千春と美佐子の顔色は冴えなかった。

「おおごとになってきた」

少し呆れたように、美佐子が戯^{おど}け気味にいった。

「そうだな、堀田研究所だけで治まると思ったが、とんでもない」

「三十年間眠っていた亡霊が、現れたのだから、仕方ないのかもね」

「亡霊か、しかし、その亡霊を武内は何処から手に入れたのだろう」

「わからない、もう一度、神田三郎さんに聞くよりないね」

美佐子の言葉に千春が頷いた。

翌日、千春達は神田三郎の元を尋ねた。神田は、いつもの穏和な表情で二人を迎えていた。

「先生は、武内代議士を御存じですか？」

「名前なら知っています」

相手は代議士である。名前程度の事は知っていても不思議はなかった。

「直接は御存じありませんか？」

「それはありません」

神田は、きっぱりと否定をした。千春は、神田に高萩の沼や支笏湖の異変をありの儘に話した。聞いていた神田は、真剣な表情で二人を見ていた。話が終わると神田は、少しの間、目をつぶり思案していたが、やがて目を開けて、

「沈む氷が高萩と北海道で造られていた……」

千春と美佐子は、その言葉に小さく頷き、神田の次の言葉を待った。

「あんな物を造る人間がいたとは、それが武内代議士なのですか？」

「それは、まだ捜査の段階ですから、お察し願えればと思います」

神田が頷いた。

「先生、事件解明の為に沈む氷の詳細が知りたいのです。お話し願いませんか？」

神田は千春の顔を暫く見ていたが、やがて大きな溜め息を一つ漏らすと、静かに話し出した。「現在の技術があれば沈む氷は簡単に作れます。前に話した父が待っていた開発中の技術とは、半導体レーザーです」

半導体レーザーは半導体の構成元素によって、レーザービームの波長を変えられるタイプのレーザーである。

「父の時代にもルビーを使ったレーザーはありました。しかし、ルビーレーザーは出力周波数が固定であるために、父の研究には使えませんでした。発振周波数を変えられる半導体レーザーを父は必要としたのです」

そう言った神田は、どのように沈む氷ができるか、二人に話した。

氷が水に浮くのは、固体である氷になると体積が増え比重が、軽くなる為に起こる現象である。この現象を分子レベルで見ると、水が固体である氷になる場合、一気圧下では安定な六角形をした分子結合が起こる。このときの分子と分子の結合によって作られる六角形の空間が大きいため氷は体積を増す。

神田は、分子結合でできる六角形の空間をうまく埋めることが出来れば、氷は重さを増して水に沈むと話した。

ただ、そこからは千春にしても難しい話しであった。

共振現象というものがある。共振現象の代表的な例としては地震による建築物の揺れがある。建築物は、その構造によって決まった固有周波数を持っている。その固有周波数と地震波の周波数が一致すると共振によって揺れが増大して、最悪のときは倒壊を引き起こす。一般的には住宅のように高さが低い建築物では固有周波数は高く、ビルなどのように高い建築物では固有周波数は低くなる。

直下型地震といわれる近くで起きる地震では、地震波の卓越周波数は、高いところにあるために、より低層の建築物に影響を与える。

地震についての話しをしたのは、同一場所にあっても、地震という与える周波数が違えば、その建物の受ける影響は建物の固有周波数によって変わるのを示したかった。

建物に限らず物質、あるいは物質を構成する分子レベルに於いても、固有周波数は存在する。であれば、二つの混在した物質に対して、各々の固有周波数を与えれば、二つの物質が混ざり合った状態でも個別制御が可能となる。

神田勇次郎は、この物質による固有周波数の違いに着目した。そこで、実際に必要になるのが炭酸ガスと可変型レーザーであった。

レーザーから出るレーザービームも一種の波である。半導体レーザーでは、半導体の種類によって波長が変えられる。この特性を使い水と混ざった炭酸ガスの双方の分子に違った周波数のレーザーを照射して各々の分子の振動を制御する。可変型レーザーは、このために必要になる。

神田裕次郎の考えの複雑なところは、そこからであった。

共振現象があれば、その反対の反共振現象なるものがある。よく知られているのは電気回路の構成部品であるコンデンサーの反共振である。これは自己共振周波数の違う二つのコンデンサーを使ったときに、その中間周波数に於いてインピーダンスを悪化させる。

簡単にいえば二つの周波数がぶつかると、干渉がおきて性能を落とすというようなものであろう。

神田が考えたシステムは、理論的には量子力学などが必要になるようだが、イメージとしては、この反共振の原理を分子間の振動に応用したもののようであった。

水と炭酸ガスを攪拌した水溶液に水分子と炭酸ガス分子をターゲットに、反共振が起きる周波数のレーザーを照射する。ここで二つの分子は、その周波数で振動を始める。しかし、レーザー照射によって振動した水分子と炭酸ガス分子は、レーザー照射をとめると外からの力を失い振動は衰える。このとき質量の大きな炭酸ガス分子が、反共振によって近くで振動している水分子の振動を吸収して、自らも分子の活動をとめる。ここで二つの分子が運動をとめるとは、近くの分子同士が結合して、炭酸ガス分子を含んだ氷ができるとの意味になる。

しかし、どうして二つの分子で上手く反共振周波数を一致させられるのか？。共振はよく固有周波数で起こると説明されることが多いが、大きな共振（振動）が得られるのが、その周波数との意味であり、実際には、その周波数の周辺でも、あるいは、その周波数の整数倍などでも小さな共振は起こる。その為に、二つの分子は共振の大きさを考えなければ、幾つかの周波数によって共振による振動が得られる。その共振を起こす多数ある周波数の組み合わせから、二つの分子間で反共振となる周波数を探せばよいのであった。

この方法によって造られた氷が、何故水に沈むのか。

炭酸ガスの分子は水分子より元々重い。通常の氷は、六角形の大きな隙間を持つ分子結合をするために、軽くなり水に浮く。しかし、この方法では、この六角形の隙間に炭酸ガス分子が取り込まれ、隙間を埋めるために密度が高まり重くなる。しかも、水に取り込まれる炭酸ガスの分子は、水分子よりかなり重い為に更に重さが増し、沈む氷となっていく。

本来、水分子は氷になる際、分子結合が強いために異物を、含まないで凍結をする。海水が凍っても塩分が残るのは、その為である。しかし、それは冷やされて、ゆっくりと氷になるとの条件での話しである。急速冷凍が可能な、分子レベルでの話しとは異なるようであった。

難しい理論はともかくとして、この方法の最大の利点は、一連の行程にかかる時間は分子レベルでの操作で行われるため、取り込んだ水に対して炭酸ガスを含ませレーザーを短時間照射すれば完了する。

これが大量に沈む氷ができる理由であった。このシステムであれば製氷能力は、ほぼ使用する循環ポンプの吐出量と考えて良い。ポンプで水を取り込み、その途中で炭酸ガスを混ぜてレーザー照射を行い、そのまま排出していけば氷になる。

このシステムを使い実際に沈む氷が作られた高萩で、どの位の循環ポンプを使えば良いかを考えて見る。

沼の平均水深を二メートルと仮定すれば、沼の面積から水量は約十九万立方メートル。この半分が沈む氷であれば約九、五万立方メートルの水を循環させた事になる。

農家の人が、一人で水田の畦道などに設置できる小型エンジン付きポンプでも一分間に五百リットル程度の吐出能力がある。これは二十四時間フルに動かせば七百立方メートル程度の吐出能力である。この程度のものを高萩の沼で使ったとすれば四ヶ月くらいで、氷はできる。そのときの氷の重さは約十萬屯にもなる。少し大きめのポンプやポンプを複数使えば、もっと短期でも氷はできるのであった。

エンジン付きポンプを使えば電気は必要としない。その他の装置を動かす為に電気が必要であれば、同じように可搬型発電機を持ち込めば、電線など引かなくても、ヘリで燃料を空輸しておけば事足りる。できてしまうのであった。沼の近くの山中にあった小屋だけでも沈む氷は。

沈む氷が本当に温暖化防止に使えるか、使えないかは氷が沈むか、浮くかの問題以前に氷を大量に作れるかに尽きる。その観点からであれば、神田勇次郎の考えたシステムによって大型のプラントを極地などに作れば、物理的には温暖化防止に使えるとなってくる。「……本当に使える」

ぼそっと千春がいった。それを神田は厳しい表情でみた。

「上辺だけでの判断は危険ですよ」

「しかし、物理的には可能です」

「たしかに物理的な面だけを見たら沈む氷は、恐ろしい能力があります。それ故に危険なのです」

たしかに危険な臭いはしていた。

「深海の水温は二度、三度です。そこに氷を沈ませたら、その氷は、簡単には解けなくなります」

神田の言葉に千春は頷いた。おそらく沈む氷の最終目的は深海に置くことにある。当然、地球規模を考えれば、そのような使われ方になるであろう。

「刑事さんは、氷の断熱作用を御存じですか？」

「氷がなかなか厚みを増さない理由の一つだと思います」

「そうですね、比熱の大きな氷は浮くから、なかなか厚みを増さないものです。しかし、そこに沈む氷があればどうなりますか？ 沈む氷を単体で考えては絶対に駄目です」

海底に氷があったら下からの冷却によって、自然の浮く氷は幾らでも厚みを増す。それは沈む氷の自然の氷に対する相乗効果である。沈む氷を極地などの一年を通じて寒い地域の海底に、ある規模で作れば、その上に浮く自然の氷は幾らでも増えていく。勿論、地球規模の考えであるから実際に使うとなれば、半端な量ではないのも確かではあるが、同じ環境変化をもたらすとしても、沈む氷は普通の氷に比べたら、その使用量は遙かに少なくても済む。

神田裕次郎が、沈む氷を選択した理由。少ないエネルギーによって、より少ない氷を使い、大

大きく環境変化を起こすとの発想、それが沈む氷の考えの原点であったのだろう。その考えはわかる。ただ、問題もある。少ない量で大きな変化を起こす事は、それだけさじ加減が難しいとの意味になる。それはある意味で原子力発電所などと同じ考えであった。少ない燃料から大きなエネルギー（変化）を取り出すのは可能であっても、一旦、故障や暴走を始めたらとめられなくなる。

「もう一つの問題は、沈む氷が与える影響は外気温だけでなく、その海域の海水を急速に冷却します」

厚い氷が浮いているから、その下の海水は一定の水温に保たれている。浮く氷であれば、その地区の氷の量が増しても、氷の下の海水温は極端には変わらない。

「私は、前には海洋循環説を話しました。あのときは氷が溶けた事によって、塩分濃度が変化して海流が沈み込めないと述べました。沈む氷を海で使えば、その海域の海水が重たい冷たい海水で覆われ、同じように海流の沈み込みはできなくなります」

浮く氷であれば、これまでの減少した量を補うとの方法から、その先を予想するのは、あるていど出来るだろう。しかし、相乗効果によってどんどん自然の氷が増えたり、海域の温度を急速に下げたりすれば、影響は多方面に表れる。沈む氷、そのコントロールは容易なものではない。

「ほんの少しでも扱いを間違ったら、極地は、すぐに氷に閉ざされます。そうなったら止める方法はありません。やがて、その影響は地球全体に拡大します」

千春も美佐子も淡々と話す神田を、厳しい表情のまま黙って見つめていた。

「沈む氷は単なる氷にあらず……誤った使い方をすれば地球、その物を凍らす能力を秘めているのが沈む氷です。まして、それは複雑奇怪な自然環境で使うのが前提。しかし、自然を掌握する。そんな事は人類にはできない。それが出来ていれば、何も沈む氷などなくても温暖化は防げた。現在の科学で沈む氷を使うのは危険というよりも無謀な事です」

そうかも知れないと思った。自然は氷の断熱作用によって、氷の厚みを決めていた。そして氷だけは固体になっても浮く仕掛けによって生命を守ってきた。そのルールを無視するのが沈む氷であった。微妙な調整に失敗すれば、その海域はやがて凍り付く。それは、そこに生きる全ての生命を、氷に閉じ込め抹殺する事になる。いや、一つの地域で全ての生物が消えれば、その影響は、かくじつに地球全体に広がる。いくつとくところは、人類の抹殺であるのかも知れない。

沈む氷は、その能力だけからすれば、地球環境を変える力を有している。しかし、それが実際に使えるかとなると、話しは別であった。神田三郎は、それを誰よりも知っていたから、沈む氷に対して異常ともみえる嫌悪を持っていたのだと千春は思った。

「沈む氷、世に出しては駄目な物です」

これまでの漠然とした不安から、大変な物を相手にしていたと千春も美佐子も、そのとき始めてはっきりと知った。

しばらく二人に言葉はなかった。

それにしても循環ポンプとレーザの組み合わせにより、大量の氷を作り出すシステムを既に三十年も前に、神田勇次郎が考えていたとは驚きであった。ふと、そのとき三十年前のレーザ開発

とは、どのような物であったのかと思った。神田勇次郎が半導体レーザーの開発結果を待っていたとなれば、ちょうど、そのころ半導体レーザーの開発が何処かで行われていた事になる。神田が行動的な男だった事からすれば、レーザー開発の現場を尋ねていたのかも知れないと思った。

「……先生、お父上が興味を持った半導体レーザーの開発は、当時、何処でしていたのか御存じですか？」

「通産省で行われていました」

少し驚いたように千春が神田をみた。

「今は経済産業省に名前を変えていますが、半導体レーザーは当時は新しい技術であったために、通産省で開発プロジェクトを作り促進していたと記憶しています」

通産省との言葉に、千春と美佐子は目を合わせた。通産省、現在の経済産業省、武内代議士の古巣である。

「お父上が尋ねていた通産省の相手について、先生は御存じありませんか？」

「そこまでは、聞いてはいませんでした」

その後二人はしばらく神田と話を続けた後に、礼を述べて退いた。

帰りの車の中でハンドルを握る千春が「繋がってきたな」と前方を見たまま美佐子にいった。

「三郎さんの話だと、大量の氷が作れる」

「物理的な要素のみであれば、間違いなく沈む氷は温暖化を防げる。それだけで政治的な利用もありになる。吉永や武内が拘わってきても不思議はない」

「慌てるな、結論は武内の昔の部署を調べてからだ」

署に戻ると二人は武内の昔の経歴を調べた。あった。武内は当時レーザー開発プロジェクトチームにいた。

「勇次郎氏がレーザー開発の情報を求めていたのが武内であれば、何かの都合で論文を武内代議士に渡していた。その間に神田さんが亡くなった。そのような考えもできる」

都合の良い解釈かも知れない。なにしろ昔の事である。実際は何がおきていたのか、わからない。しかし、武内代議士も、また、沈む氷を昔から知っていた。あるいは論文を手にするチャンスがあったとなってくる。

二十八

時間は少し戻り、千春達が北海道に行っていた時期の事である。

武内は議員会館の一室で、何が起きているのだと苛立つ心を抑えていた。新谷の話では、ここ数日堀田達との連絡が取れなくなったという。不審を高める中で、北山産業に検察が入った。同時に、堀田の研究所には賊が入った。

間違いなく、これらは沈む氷の資料を狙ってきたものだ。すでに沈む氷の件は知られていると思った。それも地検が動いたとなれば、その裏には政府がいる。

先手を打たれたと武内は思った。素早い政府の動きに、武内は苛立ちを隠せなかった。吉永だろう。おそらく動いているのは吉永だと思った。吉永は、昔から沈む氷の存在を知っていた。坂

口が余計な事をした。だから吉永に知られたと思った。

坂口が滝のそばで死んだとき武内は、秘書の新谷から詳しい状況を聞いた。その時の新谷とのやり取りを武内は思い出していた。

――「新谷、何故、坂口は北海道から茨城に戻って来て死んだのだ」

「どうやら、坂口は高萩の沼に今年も一人で行っていたらしいのです」

「今年になっても？ あの沼での試験は去年で終わっている筈だ」

「先生、実は去年の冬、袋田の滝で異常凍結が起きているとの地元での噂が起きていました」

「袋田の滝の異常凍結？ なんだ、それは？」

そのときの新谷の話によれば、余りに袋田の滝が凍結するので地元ではおかしいと話されていた。しかし、それはあくまで地元だけの噂程度のものであり、まして、観光地である袋田の滝を抱える地元になれば、滝の凍結は冬場の集客には欠かせない事から、歓迎こそするものの、凍結を問題視するような動きはなかった。その為に新谷も気づくのが、今となったと話した。

「迂闊でした。調べて見たら、あの沼と袋田の滝は繋がっていました」

「わざと坂口が袋田の滝を凍らしたのか？」

「そうだと思います。そして、今年も袋田の滝は凍結が起きています」

「坂口は、今年も沼で試験を続けていた」

「堀田の話では、時折、何かと理由をつけては北海道から戻っていたといいますから、おそらく、そうだと思います」

「坂口は、何のために袋田の滝を凍らした。何の為に、今年も勝手に沼を使った！」

目を剥きながら、苛立たしように武内が声を強めた。

「坂口は、大子町の生まれです。坂口には滝を凍らして地元、大子町に観光客を集めたいとの気持ちがあったのかも知れません」

「観光客を集める？ 集めてどうする」

「町の活性化でも夢見たのでしょうか」

「馬鹿者が勝手な事をしおって！ 問題はあるまいな！」

「元々が凍る滝ですから、凍ったからといって取り分けて不都合が起きる事はありません。その点では心配は無用かと思います」

「坂口は間違いなく事故か？」

「堀田の所に警察から問い合わせがあったそうです。坂口は手に荷物を持っていたらしく、それで身体を支える事が出来ずに、滝の側の階段から落ちたと警察が話していたそうですから、誰かに襲われたとかの犯罪性はなかったそうです」

「……坂口の持っていた荷物は家族に帰されるな」

「そうなると思います」

「堀田達は葬儀に参列するのだろう」

「はい」

「何を持っているかわからん。念のために家族に仕事で必要なものと話して、持ち物を調べておいた方が良いな」

「御心配なく。既に、その件は堀田達には話してあります」

「高萩の沼に証拠は残すなよ」

「はい、製造施設の取り壊しの手配はすでにしてあります」――

このようなやり取りが二人の間で行われた。ただ、そのときは、坂口の勝手な行動に怒りもしたが状況が解れば、取り立てて問題になるような事はないと武内も思った。しかし、今となれば滝の噂から、いち早く吉永が、沈む氷の存在に気づいていた事になる。再び坂口に対する怒りがこみ上げた。

事務所には武内の苛立った声が響いた。

「新谷、堀田達との連絡は、まだ取れないのか？」

今更、沈む氷を知られたのを、とやかくいっても始まらない。問題は堀田達の行方であった。

秘書の新谷は武内の分身のような男である。武内の練った計画を影で実行していたのが新谷である。武内の計画は支笏湖を凍らせて沈む氷の存在を、国民に見せつけてからと考えていた。

武内が行おうとしているのは、地球規模での温暖化防止という途轍もなくスケールの大きな話である。おそらく抽象的に沈む氷によって温暖化は防げると叫んだところで、その結論がでるには多くの時間が必要になる。まして政府にすれば炭酸ガス削減二十五%を国際公約とした立場上、面白くない話しになる。政府はお抱えの御用学者を使い、難癖をつけ潰しにかかるのは必至であった。

一切の政府の反論を許さない方法、それは最初にガンガンに凍らした支笏湖を国民に見せつけ、温暖化防止に沈む氷が有効であることを、感覚的に国民に植え付け、政府が異議を唱えられない状態で政府に挑む事であった。

現実に凍った支笏湖を目の前にして、それが温暖化に有効だとの話しが起きれば、間違いなく国民は武内側に付く。その為の支笏湖であった。

ただ問題はそこからである。冬に凍らせた支笏湖の氷は春になっても溶けなければ、黙っていてもマスコミは騒いで国民の目に晒される。しかし、それでは単に、支笏湖の異常凍結や底の氷が話題になるだけである。武内が政府を攻めて選挙に勝つためには、支笏湖の凍結が地球温暖化の対策に使える、それをはっきりと自ら述べて政府を攻めないとならない。

そこで困るのは、武内が支笏湖の詳しいデータを持って政府に挑めば、支笏湖を凍らせたのは武内ではないのかとなる。支笏湖を凍らせるのは違法。それに自らが拘われば武内の議員としての地位は失われる。その為の工夫が武内には必要であった。

議員は国民から選ばれた代表者であるため、その身分は手厚く保証されている。これまでに“秘書が、秘書が”で逃げ切った議員は数多くいる。議員として必要なのは、上手く言い逃れて灰色で済ますことであった。

灰色までなら許される。それを元にした筋書きを武内は書いた。

堀田達は地球温暖化防止に沈む氷が使えると考えた時、実効性を求め支笏湖を凍らすのを思い立った。しかし、それは違法である。周囲に迷惑は掛けられないとの思いから、堀田達は自ら研究所を立ち上げ沈む氷の製作にあたった。全ては堀田達が自分の意志で勝手にやった。そして、支笏湖は凍り試験は成功し沈む氷が温暖化防止に使えると堀田達は確信をした。

堀田達は支笏湖凍結のデータを、地球温暖化を防止するとの崇高の志から、政策に役立てて欲しいと政治家である武内に渡した。その後で堀田達は責任を取るため警察に自首をする。

これが武内の描いた筋書きであった。

肝心なのは武内は堀田から情報を得るまで、支笏湖の件は何も知らなかったという事であり、支笏湖凍結データはたまたま武内という政治家のところに、堀田から届けられたとする事であった。

勿論、堀田達は警察に名乗り出れば逮捕される。ただ、逮捕されたとしても、殺人のような重い罪にはならない。まして堀田達にしても地球温暖化を見るに見かねてとの大義名分がある。うまく立ち回れば美名ともなる。しかし、それでも堀田達は犯罪者になるのは間違いなかった。

そこまでして堀田達が何故、武内に従ったのか。それは簡単な事であった。

武内が総理大臣になれば、武内が国を挙げて沈む氷により地球温暖化防止を各国に訴える。それはやがて産業界を苦しめる炭酸ガス削減に変わって世界規模での巨大プロジェクトとして花開く。その時は沈む氷の権利を有する堀田達が、プロジェクトの中心に座り、その裏には北山産業、武内がつく。誰のところにも巨大な利権が勝手に転がり込む仕掛けができるのであった。当然、堀田達にしても、そこまでの展望があったから、逮捕という危険を省みずに支笏湖を凍らした。武内と堀田は利権という共通の利益で結ばれている。だから、お互い裏切れないのであった。

計画では支笏湖の件が表面化したとき、堀田達は警察に自首をするとしていた。その堀田達が消えた。今の武内にとって、北山産業に地検が入った事などはどうでも良かった。問題は消えた堀田達の行方であった。

「先生、どうしますか？」

新谷が多少不安げに武内に問うた。

「堀田達は政府側に拉致されたと見るべきだろう」

目をぎらつかせた武内が、唇を噛みしめながらいった。

「おそらく、そのように考えて良いと思います」

「堀田達は話さない。今、話したら何もかも失うのを知っている」

負け惜しみではなかった。堀田達からの連絡が途絶えたと聞いたときは、理由がわからずに驚いた。しかし、その後に北山産業に地検が入ったのを、政府筋の動きと見る事ができれば武内も多少は冷静になれた。堀田達が連絡を絶った原因が、政府の手となれば堀田達は、絶対に口を割らないとの自信が武内にはあった。ここで口を割れば、単なる犯罪者で終わる。それがわからない堀田達ではない。

「そうですね、私も、そう思います」

新谷も多少安心したように頷きながらいった。堀田達が口を割らなければ問題はない。すでに、支笏湖は凍っている。少しだけの変更で計画は続けられる。

「……ここまで来ている。計画はそのままだ」

新谷が頷いた。

最初の計画では、支笏湖の氷が暖かい時期を迎えても、凍ったままになれば武内達が何もしなくとも大騒ぎになる。そうなれば、専門家による調査も行われ、支笏湖の底に沈む氷が大量にあるのも世間に知れ渡る。

後は早坂政権の解散時期からの逆算で、沈む氷の件を大々的に公表すれば、選挙での効果は絶大のものとなる。ここに至れば、その計画を前倒しで行うだけであった。

「少し早い沈む氷の一件を表に出す」

堀田達が口を割らないとわかっていれば、計画通り資料は堀田から貰ったとすれば良いのであった。

「支笏湖の件もですか？」

「いや、まずは沈む氷で吉永を攻めて様子を見る。吉永がつまらない答弁をすれば、後に、その言質から、また、攻める事ができる」

「吉永先生は、すでに支笏湖の事を知っているのでは？」

「それは知っている。しかし、吉永からは表には出せない」

「どうしてですか？」

「吉永は沈む氷の存在を昔から知っていた。いや、その研究さえ環境庁に居るときしようとしていた。その吉永が炭酸ガス削減案に突き進んだ。ここで沈む氷が温暖化に使えるとなったら、彼奴の立場はなくなる。自ら不利になる事を政治家が話せるか、だから吉永は後々問題にされると解っても、沈む氷があるとは自分からは言い出せない。それが狙いだ。吉永の言質を取ってから支笏湖の件は、言い訳できない状態で表に出してやる」

政治の世界に身を置けば、言質を取られるのは厭なことである。だから、政治家や官僚は言い回しに注意をして、わかりにくい答弁で、あえて逃げ道を用意しておく。それに対抗するには、色々喋らし、その矛盾をついて攻める。老獪な武内でなくとも、政治家の常套手段である。

まずは政府に誤りを話させる。それが選挙戦で生きてくる。

「支笏湖の件を表に出すときは、政府を解散に追い込む時だ」

早坂政権の国民からの支持はかなり低い。このまま選挙となっても勝てる自信が得られないのか、早坂内閣から解散の声は挙がってない。

きゆうそねこ
窮鼠猫をかむ。追い込まれた武内の、そのときの心境であった。相手が先に仕掛けてきた。それなら武内は自らの手によって、早坂政権の息の根をとめてやると思った。

第七章 駆け引き

二十九

武内は早々に環境委員会で、沈む氷の質問を吉永にした。

「大臣、どうですか、このように地球温暖化は何も炭酸ガスの削減に拘らずとも、物理的に解決する方法もあると思いますが？」

「その沈む氷というものが、現実環境に対して影響を与えられるのなら、それは素晴らしいです」

「では、国民生活を破壊するような政府案である炭酸ガス削減案は、取り下げて貰えますか？」

「科学的に使えるとの証明が成されなければ、それはできません。是非先生が入手をしたというデータの詳細を先にしめしてください」

「検討に値するという事でよろしいですか？」

「それは科学的な検証をしてからになります」

「わかりました。本日の持ち時間がきましたので、質問は、ここまでと致します。この件は、引き続き議論したいと思います」

淡々とした遣り取りで武内は質問を終えた。吉永は、いよいよ武内が沈む氷を持ち出してきたと内心、^{じくじ}忸怩たる思いがした。

沈む氷、三十年前に、その研究所を作るように環境庁内で働きかけをしたのは自分であった。しかし、その時も、本当に沈む氷ができるとは信じていなかった。神田の機嫌をとる。それが当時の目的であった。それがまさか、今頃になり亡霊のように現れてくるとは思わなかった。いずれ、その事を武内は問うてくる。追いつめられていたのは武内だけではなかった。吉永も、また、追いつめられていた。

吉永が武内の企みに気づいたのは、少し前に事務所に送られてきた一通の手紙からだ。そこには支笏湖で沈む氷が作られている事や、作っているのは堀田研究所である事などが書かれていた。

沈む氷、^{しやれ}長く忘れていた言葉であったが、その言葉の意味するものは自分が一番よく知っていた。洒落や冗談で飛び出す言葉ではなかった。驚いた吉永は官房調査室や警察などを動員して、支笏湖の件や堀田研究所について徹底して調べた。

その結果、昨年からは堀田研究所のメンバーは何度も北海道に渡っていた。更に驚きは続いた。堀田が有馬の名で支笏湖のホテル跡に、家を建て終えたのは昨年の五月であった。それら堀田達の行動からすれば、たった一冬で支笏湖を凍結させた事になる。

今にして思えば神田勇次郎が、話したとおりの結果に啞然とした。しかし、結果に驚いてばかりはいられない。その施設規模からすれば、国などの強力な機関が行えば、短時間に如何ほどでも沈む氷が作れるのを意味していた。それは物理的な面では間違いなく環境に影響を及ぼすことのできるとの証明になる。

吉永はなんて事だと思った。沈む氷が理論としての話しであれば、幾らでも言い逃れはできる。しかし、堀田研究所という小さな研究所が人目を避けて作った小規模な施設で、日本で八番目に大きな支笏湖を簡単に凍らした。その事実を持って地球温暖化防止に沈む氷が使えると話された時の事を思うと、ぞっとした。

皮肉であった。炭酸ガス二十五%削減案という、国民に負担を求める政策を精力的に推し進め

たのは自分である。その本人が沈む氷の存在を昔から知っていたとなれば、沈む氷に対してどのような検討をしたか、問われるのは必至である。検討をしないと言え、それはそれで問題とされる。では検討したが駄目であったと述べれば、武内は支笏湖の例を挙げて、襲いかかってくる。老かいな武内らしい遣り方に吉永は唇を噛んでいた。

一旦、支笏湖の件が国民に伝われば政府が、いかなる弁明をしても世論は納得しない。この状況では吉永にしても政府にとっても、最善の方法は、支笏湖の件が表にでるまえに、闇に葬る事であった。もはや時間はなかった。

神田の所から戻った千春と美佐子は、純粹に能力だけ見れば沈む氷は、地球温暖化に使えると認めていた。危険なことではあるが武内代議士は、それを選挙の切り札と考えている。それも間違いないだろうと思った。

それらを元に、千春は沈む氷発見の手掛かりとなった袋田の滝の、凍結とは何であったかと考えていた。千春は、袋田の異常凍結から、高萩の沼に作られた沈む氷に辿り着いている。武内達の計画に、袋田の滝の異常凍結を加えても、何も生まれてはこないし、返って試験段階で事が発覚する危険性があった。

どのように考えても武内の計画に、袋田の異常凍結は必要ない。武内の最終目的は、支笏湖を凍結させるにある。そこから見て高萩の沼の凍結は、実証試験の第一段目であったと推測できた。

千春は実験が、どのような行程で進められるか自分自身、学生のとときに実験に携わった経験があるだけにおおよそわかっていた。

支笏湖凍結が最終目標であれば、高萩での実験は実証実験の一段目である。ここで色々なデータを集めて、目的である支笏湖に応用していく。支笏湖を凍らし始めているのであれば、すでに高萩の沼での試験は、済んでいると見るのが普通の考えである。まして目的が実証試験であれば、それは人に知られては不味い事である。事実、高萩の沼にあった山小屋は坂口が死ぬと、いつのまにか撤去されていた。そこから見ても、まだ、沈む氷の件は表には出したくないのがわかる。

何故、人々から不審を買う袋田の滝を、二年に渡り凍結させる必要があったのか、大きな謎であった。

坂口は袋田の滝近くに土産物店を出す、坂口商店と云う小さな店の、二男坊として生まれていた。学生の時から地元を離れたために、駐車場の管理人が坂口商店の二男と気付かなかったとしても、それは不思議ではない。

駐車場の管理人さんの話しによれば、坂口はいつも一人であったと話していた。それからして高萩の沼は、坂口が担当していたとの予想ができた。そうなると、あの沼を選定したのも坂口であった可能性は強い。坂口が沼の構造を知らずに選定するのは研究者としてあり得ない。

あの沼を凍らせれば袋田の滝が凍結するのは、坂口であれば当初から容易に想像できた筈で

ある。まして、大子から高萩にかけては広大な山岳地帯、探せば山の中の沼など他にも幾らでもある。滝に近い高萩の沼でなければ成らない理由はない。しかし、坂口は、あえて袋田の滝に続く高萩の沼で試験をした。

坂口を調べても、これといって悪い噂もない。おしなべて帰ってくる答えは、もの静かな優しい男。

美佐子が調べを進める中で賑わう袋田の滝を見て、袋田の滝が凍る事は悪い事ではないと述べた後に続けて、この光景を坂口は遠くから見たかったのではないかと、少し淋しいような顔で話した事があった。

千春も、また坂口は、最初から袋田の滝を凍らせる。その目的を持って、あの沼に決めたと思った。沼から出る水の温度を氷になる直前にしていた。これは偶然に出来るものではない。入る水の量や温度、沼全体の水の流れを予測したうえで、水面に張る氷と沼底の氷の間隔を調整して可能となる。

滝を凍らすには沼から出る水温は、限りなく氷に近い温度の方が効果は高い。千春が沼の水温を測定したのは、坂口が最後に沼に行ってから半月近く経っていた。坂口が亡くなった直後に水温を測れば、おそらく限りなく零度近い水温であったと思った。

坂口にすれば沈む氷を作るより、滝を凍らすために、心血を注いでいた。あの低い水温が、それを物語っていた。

袋田の滝の凍結、頭を悩まされた問題ではあったが、それがあったから自分も、高萩の沼に作られた沈む氷を発見できたのだと千春は思った。

三十

環境問題を調べていた美佐子が千春に声を掛けた。

「日本人は結構素直なんだね」

「どうして」

「いい、アメリカではメール流失問題が起きた後の世論調査では、化石燃料の使用が地球温暖化の原因と考えているのは、学者で八十四%、一般市民では僅か四十九%しか居ない」

「たしかにアメリカの調査では、そうになっていたな」

千春は、アメリカの調査結果は当然かなとも思った。IPCCは国連傘下の組織であり、中立性の担保が求められる組織である。その組織に疑惑が持たれる事、自体が問題である。まして、この組織は科学者集団によって形成された組織である。そこの組織が出してきた報告書の内容について、知見の乏しい一般人が理解をして判断をするのは難しい。

だからといって全てを信用してよいとなれば、科学者集団の出してきた報告書は絶対的なものになり、危険極まりないものとなる。まして現在社会を考えれば、どんな組織であれ、多かれ少なかれ利権が絡むのが常である。であれば、やはり一般人も監視をする必要がある。ただ、監視といっても報告書の真偽が問えない一般人が、それでも判断をするとなれば、残るのは組織そのものの信頼性で判断をするよりない。

どんなに良い報告書であっても、それを作った組織に信用がなかったら、一般人は、その報告書を信頼しない。そのような方向づけをもって世論を高めれば、おのずと組織も身を正す。その意味ではアメリカの調査結果は、疑惑を持たれた組織が信頼性を高めるには必要であろうと思った。

「メール問題は、よその国では結構大変な事になっていたわ。武内は、IPCCを問題にする気かしら？」

美佐子の言葉に千春は、少し首を捻った。

「いや違うな。武内の質問内容と一致しない」

千春は、武内が、これまで環境委員会で発言した内容を、打ち出した用紙を美佐子に渡した。しばらく美佐子は、それを読んでいた。

「武内自身、地球温暖化と炭酸ガスとの関連を、否定しているわけではないね」

「そのようだな。武内の発言内容は、沈む氷は温室効果ガス削減の代わりに使えるとの趣旨。まあ、それはそうだろう。武内にすれば沈む氷を使うのに、意味を持たせないとならない。地球温暖化、そのものを否定すれば、沈む氷も必要なくなる」

日本政府は、地球温暖化防止の為に炭酸ガス削減目標を決めて、各国に明言した。しかし、炭酸ガス削減は産業界を始めとして、国民一人一人に負担が伴ってくる話しである。

ここで沈む氷により、地球温暖化がはっきりと防止できるとなれば、産業界は時間をかけて脱化石燃料に取り組めば良い。現在野党となった自由遊民党が、温室効果ガス削減案に変えて、沈む氷を使う事を施策として打ち出せば、産業界は自由遊民党を応援する。まして、現政権で炭酸ガス削減案をとりまとめた吉永環境大臣が、沈む氷の件を知っていたとなれば、吉永を含め政権与党に対する国民の反発は大きなものになる。

沈む氷が武内の切り札であれば、武内にしても地球温暖化、そのものを否定はできない。

「沈む氷が、まともに公表されて見ろ。利害が複雑に絡んで成り立っている世界からも現政権は見放される」

千春が各国の利害関係と述べたのには理由があった。地球温暖化問題は一九九二年のサミットで取り上げられると、現在ではサミットの主要議題となっている。そのサミットの第一回開催理由は一九七九年に起きた第一次オイルショックによる原油の値上がりや輸出規制、それに続く不況について、当時の西側先進国首脳が集まって国際会議を持ったのが始まりである。

当時は、まだ冷戦で西側、東側陣営が鋭く対立をしていた時代である。アメリカを始めとする西側先進国は、中東などからの石油に依存していた為、石油がなければ、いざ戦争となっても戦う事もできない。オイルショックは西側先進国にとって、国の安全保障に直接関わるものであった。現在は、東西冷戦がなくなったとはいえ、宗教や部族対立の火種を抱える中東が不安定な地域であるのに変わりはない。

国の安全保障に影響を及ぼす中東地域の石油に対する依存の低減は、いまでも不可欠と考える国は多い。

地球温暖化による脱石油は、国の安全保障の側面からも歓迎すべきものである。勿論、国によ

って考え方に違いはあるが、表に出てはこなくとも、地球温暖化による脱化石燃料の施策に、国の安全保障を絡ませて考えている国も多いのはたしかである。

それだけではない。産油国、排出量取引を巡るヨーロッパ諸国などの思惑、アメリカ石油メジャーと繋がる国会議員の動向などが複雑に絡む側面があるのが、地球温暖化問題であった。

日本から沈む氷により地球温暖化が防止できるとの情報が発信されれば、日本政府との間でさまざまな摩擦が表面化するおそれがある。

「外交は如何に自国の利益を優先させるか。沈む氷を持ちだされて面白くない国も現れる」

「国際的に現政府の評判が落ちれば、それは国内にも伝播する。政権を取ろうとしている武内に、国の評判を落とす事への躊躇はないのだろうか？」

「政権の座に着く。それが最大の目的の前には国さえも関係なくなるのかも知れない」

千春の言葉に、美佐子も、それが権力というものの現実かも知れないと思った。

「武内に、その考えがあれば多少の違法には目をつぶり、確実に環境改善に沈む氷が使えるとのデータを集めていたとしても、不思議ではない」

「それが支笏湖」

「そうだ。高萩の沼でした試験を、規模を拡大して支笏湖でした」

「しかし、それを知られたら武内の政治生命は終わるのではないのか？」

「いや、そんな事はない。武内と直接関係があるのは北山産業だ。実働部隊である堀田達は独立した研究所を創設している」

「.....秘書と代議士の関係を、武内が持ち込む」

美佐子が苦々しくいった。

「そう、堀田達が口を割らない限り武内に類が及ぶことはない」

「その堀田達は自衛隊に捕らわれたと見るべきか？」

「状況からすれば、自衛隊の手によって拉致されている」

「堀田達が口を割らなかつたら」

「まだ、武内は沈む氷の件を環境委員会で触れているだけで、支笏湖の件は明かしていない。...
...今なら、政府にすれば、沈む氷を闇に葬れる.....」

そこまで話しが及ぶと二人の顔色が変わった。

「支笏湖の件が表に出る前に、邪魔者を消す？」

「与党が与党で居るためであれば、ないとは言えない。一一次は、武内」

政府があらゆる手段を講じれば、支笏湖の沈む氷は表面化せずに済む。しかも、物的な証拠である沈む氷は時間が経てば消えてなくなる。今、最も政府にとって邪魔なのは、沈む氷の存在を知る武内になる。

「可能性はある」

「東京か？」

「美佐、東京に行くことがどのような事かわかるな。お前はこれ以上拘わるな」

いまの状況から云えば、警察上層部や国が拘わっている可能性は高い。そんないざこざに美佐

子を巻き込みたくないと思った。

「とりあえず東京だ」

美佐子が、千春の目を正面から受け止めていった。

「美佐、それでいいのか？」

厳しい表情で千春が詰め寄った。

「私は警察官、犯罪が有れば解明するのが仕事。相手を見て、ころころ変わるようなら警察官などやってられない。千春、お前だって相だろう」

しばらく千春は口許を尖らし、美佐子を見ていた。

三十一

千春と美佐子は武内代議士の予定を調べると、影から武内代議士を見守っていた。

千春達は、数日後の夜、赤坂の料亭に入る武内の後を追った。二人は物陰から、料亭の入り口を見張っていた。

二人の目に、遠くの電柱の影に隠れるように立っている、一人の男の姿が映っていた。

「あの男が武内を襲うようなら私が行く」

「いや駄目だ、僕が行く」

「心配するな、お前よりは強い」

「あのな、そんな問題ではないだろう。相手は銃を持っているかも知れない」

「それはない、武器は刃物だ」

「どうして、わかるんだ？」

「簡単だ。狙う人間が代議士なら銃は使わない。銃で代議士が殺されて見ろ。最初に警察は背後関係や銃の出所処を徹底して調べる。刃物なら、個人の怨みや単独犯でも済む話だ」

なるほどと千春も思った。刃物なら誰でも簡単に入手できる。犯人が単独犯を主張すれば、単独犯として事件が終わる可能性は強い。銃のような物騒なものを使うよりは、武内が狙われた動議の理由付けを曖昧なものにするには、何かと都合が良いのは確かだろう。しかし、その考えは美佐子の一方的なもの。確実に抹殺をすると考えた場合、銃の選択もある。

「心配なら、いつでも銃を使えるようにしておいてくれ」

「無茶をいうな、銃を持ってないのは美佐も知っているだろう。僕が行く」

その時、料亭の入り口に女将達の姿が見えた。周囲には秘書らしき男もいる。その様子からすぐに武内が出てくると思った。千春は電柱の影にいた男の姿を追った。

男が電柱の影から離れた。千春が足を踏み出そうとしたとき、

「心配するな、男のお前が近づけば相手は警戒する。一応、私は女だ」

小声で美佐子が耳打ちすると、そのまま千春を制して美佐子は歩き出していた。遅れた事にしまったと唇を噛んだが、今更美佐子の後を追うわけには行かなかった。

男は武内が現れるタイミングを見計るようによたよたと歩いていた。数人の男達が、料亭から出てきた。なかに武内の姿もあった。

少し男の後を離れて歩く美佐子の姿を、男がちらりと見た。美佐子も、また、タイミングを見計らっていた。美佐子は足早に進むと料亭の入り口より手前で男を追い抜いた。

その直後、男が足早に武内に向かう姿があった。その瞬間、ずっと男に近づいた美佐子の足が男の足にかけられた。

男は片手にナイフを握ったまま、もんどりを打った。素早く動いた千春が、その男の手を蹴り上げ、ナイフを飛ばし男を押さえ込んだ。周囲の男達が、茫然とその様子を見ていた。千春が警察だと叫ぶと、その男達も我に返り、倒れた男を押さえつけた。すぐに千春は男に手錠を掛けた。

襲撃者は一人と限らない。茫然とたたずむ武内に向かい千春が怒鳴った。

「離れろ！ 武内さん、あんたは狙われている」

その声に千春の回りにいた男達は、慌てて武内の回りを取り囲み、周囲に目を配りだした。

千春の発した言葉に、押さえ込まれた男は「違う、俺は殺す気はなかった。ただ、脅すように頼まれたただけだ」と叫んでいた。

襲撃者は男一人のようであった。不審な人物が新たに現れる様子はなかった。周囲を警戒していた美佐子が、携帯電話を手に警察に連絡をした。

千春は武内の関係者に警察がすぐに来るから、この場所から離れないよう伝えたと、手錠をかけた男を自分達の乗ってきた車に乗せて、男の目的や誰に頼まれたか問い質した。

男の口からは、ネットで依頼を受けた。脅すように頼まれただけだとの答えが返ってきた。

その頃、武内は青ざめた顔でいったい何故、自分は襲われたのだと自問自答した。男はナイフを持っていた。殺意があったと思った。政治家などしていれば、自分の知らないところで怨みの一つや二つ買っていて仕方はない。そうは思っても、命を狙われるほどの理由となると、すぐには思い当たらなかった。

まもなく通報を受けた警察官が現場に来たため、千春達は状況を説明して犯人を引き渡すと、その場を去った。

翌日の新聞に武内を襲った男は佐川啓治四十二歳、現場で男が千春に語ったような事が記事になって流れていた。

武内が都内の料亭から出る際に、暴漢に襲われてから数日が過ぎた。

最初は何が起きたのか武内にも解らなかった。しかし、時間を置いて考えて見ると支笏湖から堀田達が消え、北山産業に地検が入ったりした後に、今度は自身が狙われた。

ついに吉永が自分の命まで狙いだしたと思った。支笏湖の問題は、まだ表面化してない。そして今は冬である。春になり時間が経たなければ支笏湖の異常は表面化しない。それまでに自分の口を塞げば、支笏湖の凍結は単なる異常として終わらせる事が政府ならできる。

権力という魔物に取り憑かれたちみもうりよう魑魅魍魎の集団である。それくらいの事はあってもおかしくない。

こしゃくな真似をしおってと武内は、恐れよりも吉永に対する怒りを覚えた。

唇を噛んで考えていた武内の口元が緩んだ。吉永は焦っている。そう思うと武内は自分が狙われた事で、かえって余裕が生まれた。

それは堀田達が、何も吉永に話してないと考えられるからであった。吉永も裏で動き回るのを得意とする政治家である。堀田達が全て話していれば、それをネタに吉永は交渉を持ちかけてきた筈である。堀田達からは何も得られなかった。だから、あのような強引な手段に踏み切ったと武内は思った。

ただ、そうなると支笏湖の件を、いつまでも出し惜しみしている訳にもいかない。支笏湖の件を知られたくないから、命まで狙ってきた。それが公おおやけになれば命を狙う意味はなくなる。支笏湖の凍結を表に出す、それは自分を守るに必要なものであった。武内は次の環境委員会で、支笏湖の異常凍結を吉永にぶつける決心をした。

三十二

武内が、次の委員会で支笏湖の件を表に出すと考えていた頃、吉永大臣に一通の報告書がもたらされた。その内容に触れた吉永は、どうにか間に合ったと、ほっと胸をなでおろした。

吉永は支笏湖で作られている沈む氷を知ったときから、武内一成にある疑問を持っていた。その疑問とは武内が手がけた沈む氷は、余りに神田勇次郎の考えたものに似ている。いや、神田勇次郎が考えたものだと思った。

吉永は神田勇次郎が死んだとき、警察の事情聴取を受けている。そのとき警察は、神田勇次郎の論文を捜していた。吉永は、支笏湖の件を知ったときから、神田裕次郎と武内の過去の関係を徹底して調べていた。

これで武内をとめられると思うと、吉永は、早々に武内に電話をした。

「武内か、大変だったな。お互い身辺には注意しないとな」

吉永は、昔のように馴れ馴れしく呼び捨てにしてきた。

「心配かけたが、どうって事はない」

襲わせたのはお前だろうと言いたい気持ちを武内は抑えて、平静を装った。

「それは良かった。ところで武内、支笏湖の件、どうするつもりだ」

「やはり、お前は支笏湖の事を知っていたな」

「そりゃ、知っていたさ」

「それで俺を狙ったのか？」

「馬鹿を云うな、俺は現職の大臣だぞ。そんな事するわけないだろう」

「口では何とでもいえる」

「武内、お前、本気で俺が狙わしたと思っているのか？ 冗談ではないぞ！」

強く否定する吉永の声が電話の向こうから響いた。

「そうか、まあ、そんな事はどうでも良い。用件を話せ」

「そうだな、俺と取引をしないか？」

一瞬、取引との言葉に武内は、堀田達が何か喋ったのかと不安になった。それでも武内は冷静

を装い話しを続けた。

「取引？ おかしな事をいうな、俺の方には取引をする理由はない」

「武内、お前が支笏湖を凍らしたのはわかっている」

「いや、俺が凍らした訳ではない。もっとも支笏湖の資料なら持ってはいるが。それとて、ある人間から持ち込まれたものだ」

話しながら、武内の不安は増していった。

「さて、それはどうかな」

「何か、証拠でも掴んだか？」

思わず、武内は、そう聞かずにいられなかった。

「調べればわかる事だ」

「……………」

吉永がふと漏らした言葉から、武内はこの勝負、勝ったと思った。吉永が調べればわかると言ったのは、まだ堀田達は何も話してないのを、はからずも吉永が述べたに等しい。

堀田達にしても、自らが地球温暖化防止の為にしたという理由が、どんな場合でも自分達の罪が一番、軽く済む道であると知っている。迂闊に武内に頼まれたなどと話せば、どう足掻いても悪人の汚名は免れない。まして、武内が計画通り総理大臣になれば、状況は一変するのも知っている。そして最後は金である。やがては堀田達のところにも沈む氷の権利により莫大な金が回り込む。堀田達には二重、三重に口を割らない理由が存在していた。

そんな簡単に口を割るような堀田達ではない。そう思い直した時、この勝負、勝ちだなと電話を握る武内に笑みがでた。

「吉永、早とちりはするなよ。俺は沈む氷を作らしては居ない」

「……そうか、あくまで白を切るんだな。まあ、良かろう」

二人とも互いの腹の中を探っていた。

「武内が支笏湖の資料を誰かから貰った。まあ、それならそれでも良い。ところで、武内は本当に沈む氷によって、地球環境は変えられると思っているのか？」

吉永が話題を変えてきた。益々、堀田達は何も話してないと確信をした。

「出来るだろう」

そうは言っても武内とて沈む氷を使おうとすれば、今度は別の意味での環境問題に発展すると知っている。仮に北極で沈む氷を大量に作り出せば、北極圏の近くの国々が寒冷化に悩まされるようになるかも知れない。沈む氷を使うには、そのような環境変化を起こす国との政治交渉なしには使えるものではない。だから、それを強力に推し進めるには、自らが総理大臣になる必要があった。

「相当の自信だな。果たして各国が旨く同調するかな」

武内には、その自信があった。だから手を染めた。しかし、それは、あくまで選挙後の事である。今、ここで吉永と話しても意味はなかった。

それに強かな武内は、そこにも保険をかけていた。より大きな利益を得るには巨大プロジェクト

トに成長させる必要があるが、それはあくまで理想の姿であった。

武内に綺麗事は必要なかった。沈む氷が仮に温暖化防止に使えなくてもかまわない。使えるか、使えないかは二次的なものであり、まずは温暖化防止に使えるものとして国策に祭り上げてしまえば研究・開発として予算が得られる。その時点で武内達に利益が転がり込む。そのためにも選挙に負ける訳にはいかなかった。

「吉永、お前も政治家なら、国民がどう反応するか。それが尤も重要だと知っているだろう。政治家同士が、国民の居ない所で、できる、できないと言い争っても意味はない」

「そこが、お前の狙いか？」

「そうだ。この件を表に出した時、国民や産業界がどう反応するか、それが全てだからな」

吉永は渋い表情をしていた。たしかに武内のいうとおりのことである。結局は聞いた国民がどのように判断するか、問題はそこにある。少しでも可能性があれば、炭酸ガス削減案により不利益を受ける国民の反感は高まる。選挙はいかに国民から多くの投票を得るか、それに尽きる。国ができないと声を大にして叫んだところで、国民ができると思えば、それを唱える人間に票は集まる。

「選挙を目的とした沈む氷、旨いもの考えたな」

「いや、俺は単に判断材料の一つを国民に投げるだけだ。他国との調整などは選挙とは関係ない話だ。国民にしたって、そんな先の事に興味はない」

野党である武内にすれば、まずは選挙に勝つ。それが最大の課題である。しかし、武内の言葉とは裏腹に、沈む氷の権利を握った武内からは、したたかな計算の臭いが漂っていた。

「いい金蔓を掴んだな」

「金蔓、なんの事だ。地球環境を改善したいと願うのは、誰でも同じだろう」

「そうかな、どうせ国策にして沈む氷にじゃぶじゃぶと税金をつぎ込んで行く。それがお前の本当の狙いだろう」

「吉永、口が過ぎるぞ！ 好い加減な話しをするでない」

「そうか、俺には全てが見えている」

「……馬鹿な考えは起こすなよ。沈む氷の件は、俺だけが知っている訳ではない。俺の周りの者は既に知っている。いいか、今更、俺を消しても遅い」

「何度も同じ事を言わせるな！ 俺はそんな事はしてない」

吉永が苛立ちを隠そうともせず、声を荒げた。

「違うと云うのか？」

「当たり前だ！ 俺にはお前を襲わせる理由はない。それにお前の行動をとめるのは簡単にできる」

「俺をとめられる？」

「武内、お前は昔、俺を嵌めようとしたな」

「嵌める？ 何をいっている」

「残念だったな。当時の俺に海外出張のアリバイが有って」

「……訳のわからん事をいうな」

「とぼけるのか。それじゃはっきりいう。神田勇次郎を始末したのはお前だろう？」

その言葉に武内の電話を持つ手が、かすかに震えているように見えた。

「……なに巫山戯ている。俺じゃない」

「そうかな、神田勇次郎の死。俺には出来過ぎていて、おかしいと感じたよ」

電話の先で、今度は吉永の目が、残忍さを帯びた目になっていった。

三十数年前に、突然、神田勇次郎が雪の中から凍死体で発見された。吉永は、その頃、神田を何とかしなくてはならないと考えていた時だけに、吉永にとって神田の死は好都合であった。多少警察から疑われても、海外に居たとのアリバイもあり吉永にすれば、その時も自分は運を持っているとほくそ笑んだ。

ただ吉永自身、これまで長いこと神田勇次郎は酒に酔って、凍死したと思っていた。しかし、武内が沈む氷を作っていると知った吉永は、どうして武内に沈む氷ができるのかとの疑問を持った。

答えは一つしかない。当時、警察が探していた神田勇次郎が書いた論文を、武内が持っていたと考えれば納得できる。神田勇次郎と武内の間にも何かあったと気づいた吉永は、国家権力を最大限に使い、当時の武内について徹底して調べた。

「なあ、武内、神田勇次郎に酒を飲ませて、沈む氷の論文を奪ったのはお前だな」

「違う。論文など俺は知らない」

「嘘を言え、神田は俺のところだけでなく、お前の元にも通っていた。すでに調べはついている」

「……たしかに、神田勇次郎は知っていた。ただ、それだけだ」

「まあ、俺に罪を着せようとした。それは不問にしてやる。俺は、心の広い人間だからな」

「俺は何もしてない」

「そうか、それならそれでよい。俺達は警察ではない。三十数年前の事件の真相などはどうでもいい。しかし、お前には当時、神田から沈む氷の論文を奪いたい理由があった。それを証明するのは簡単だぞ」

「……………」

「調べたんだよ。心当たりがないとは言わせない。――武内、さっきお前は選挙は世論だと話したばかりだな」

「……それがどうした」

「当時、論文を奪いたいと考えていた人間が、いま、その論文によって沈む氷を作った。それを知った有権者が、お前をどう判断するかだ。政治は世論だ。証拠など面倒なものは必要ない。三十年前の事が世間に流れたとき、それを判断するのは警察でもなければ、もちろん俺でもない。有権者だ。全ては有権者が判断をする。このスキャンダルにお前、勝てる自信があるか？」

吉永にしても武内が直接、神田を手に掛けたのか、その辺はわからない。しかし、それよりも武内が神田勇次郎の論文を持っていて、更に、その武内には当時、論文を奪い神田勇次郎を消し

たいとの理由が存在していた。一般の人間ならいざ知らず、政治家にとっては、その事実の重なりから生まれる世論が重要であった。政治家は選挙に落ちたら、ただの人である。

「だから、言ってるだろう。沈む氷は新たな技術だ。神田の考えた物とは違うと」

「よせよ、そんな言い訳が俺に通じるか。俺は神田勇次郎が、どのような方法で沈む氷を作ろうとしていたか知っている。多少の資料なら今も手元にある」

「……………」

元々吉永は、神田の件を本気で扱っていた訳ではない。資料など手元に残ってはいなかった。武内との駆け引きであった。しかし、聞いていた武内にすれば、研究所を作ろうと画策していた吉永の手元に、神田の資料があると言われれば、それを否定するだけの自信はなかった。

「なあ武内、友として忠告をする。沈む氷の件は忘れろ」

「脅しか？」

「どう判断するかは、お前の勝手だ。じっとしていれば代議士の地位まで失う事はない」

全て調べられていたと思うと武内は、強く唇を噛み悔しさを顕わにしていた。

「……吉永、もう一度聞く。俺の命を狙ったのはお前ではないのか？」

「俺は大臣だぞ。お前の弱みを掴んでいる。何故、危険を犯してお前を襲わす必要がある。よく考えて見る事だな」

どこまで吉永が本当の事を話しているのか、武内にはわからなかった。しかし、少なくとも吉永が自分の過去を洗い出している。それが世に出れば、おそらく自分の政治生命は絶たれる。いや、よしんば政治家として残れても総理の椅子は遠のく。自分が総理大臣にならなかつたら、沈む氷に利用価値はなくなる。武内は、悔しさと怒りに満ちた形相で強く唇を噛んだ。

吉永は武内との電話を切ると、これで武内は動けないとほっと胸をなでおろした。

第八章 影の人物

三十三

武内が襲われて十日余りが過ぎた。ある週刊誌が沈む氷についての特集をおこなった。その記事の内容は、温暖化対策の切り札となる沈む氷というものが有り、それは北海道の支笏湖で密かに試験が行われていたとするものであった。

最初の週刊誌が出たときに、吉永は週刊誌を手に暗い事務所の中から、怒りに満ちた形相で武内に電話をしていた。

「武内、お前、一体何を考えている。沈む氷の件はすでに終わった話だろう」

「週刊誌の記事は俺ではない」

無然とした武内の声が電話の向こうから伝わってきた。

「この事を知っているのは、俺とお前だけだ。お前以外に誰がいる」

「違う。俺だって自分の政治生命まで賭ける気はない」

真剣な武内の声であった。

「だったら、あの週刊誌の記事は何処から出た！」

「……わからん」

武内が破れかぶれの手にてた。吉永は週刊誌に記事を書かせたのは、武内だと思っていた。「記事がでた以上、今更言い訳をしても始まらないが、お前は、俺の過去を調べているのだろう」

「それは調べた」

「だったら俺に公表ができるか、できないかわかる筈だ！」

苛立ったのか、少し武内が声を強めて吉永に告げた。

「それに吉永、お前は堀田達も押さえている！」

「おかしな事をいうな。自衛隊が到着したときには、堀田研究所の人間は姿を消していた。お前が事前に逃がしたんじゃないのか？」

「俺が？ そんな馬鹿な！ じゃ、堀田達は何処に消えた」

「そんな事は俺に言われても困る」

堀田達を逃がしたのは、武内ではなかった。吉永は何が起きているのだと思った。そのとき吉永は、事務所に送られてきた一通の手紙を思い出した。

――居る。俺達の他に、もう一人、支笏湖の凍結を知っている人間が。しかし、それが誰かとなると吉永にもわからなかった。

三十四

最初の記事に触れたとき千春は、武内がいよいよ自分の身辺を考え始めたと思った。武内にしても自分を狙ったのは、吉永、あるいは政府筋だと気づいているだろう。このまま放置すれば、何れは闇に葬られるとの、危機感を持ったとしても不思議ではない。

秘密を持つ事で狙われるのであれば、沈む氷や支笏湖の件を公にすれば、その手の筋から狙われる理由はなくなる。

一方、事情のわからない早坂内閣は当初、沈む氷の件を必至にうち消そうとした。しかし、週刊誌によって支笏湖の件に火がつくと、政府内にも疑問を持つ人間も現れ、戸惑いは隠せなかった。政府としても支笏湖の実体を知る必要に迫られると、内々で調査団を派遣していた。しかし、報道機関の反応は、遙かに政府を上回っていた。すぐに報道機関では支笏湖の実態を調べると、支笏湖の底に沈む氷があると伝えた。そればかりか沈む氷の製造能力や、支笏湖凍結に要した時間なども可成り詳しく伝えられた。

沈む氷は物理的に地球温暖化に十分対応可能なものとして報道されると、支笏湖を凍結させたとの衝撃的な出来事と相まって、センセーショナルなニュースとして報じられた。

世間が沈む氷の件で騒然とし始めた中、千春は、武内が環境委員会でどのような発言をするか注目していた。現在は、国会での各種委員会の様子などは、インターネットで誰でもリアルタイムに知る事ができる。

週刊誌が騒ぎ立てる中で開催された、環境委員会の席に武内は姿を見せなかった。千春は訝しながらも、次の環境委員会に注目していた。ところが、二日後に開かれた環境委員会にも武内は

姿を見せなかった。

「やはり武内は用心をしているのかしら」

「いや、おかしい。たしかに週刊誌には支笏湖の件が現れた。しかし、その支笏湖と武内との関係を示すものはない。もし、武内が本当に自分の身を政府や吉永から守ろうとするのなら、委員会で自らの口で、支笏湖凍結を使い政府を攻める筈だろう」

「そうか、今の状況では支笏湖凍結と武内は結びつきがない。武内が消えれば、マスコミの温暖化に使えるとの報道に、政府は真っ向から反論もできる」

「そう、政府などの巨大組織から身を守るには、武内、自らが、その渦中に飛び込まないとならない。渦中に飛び込むとは支笏湖凍結データなどの詳細を委員会で話せば良い事ぐらい武内と知っている筈だ」

国会内で襲われる、それは考える必要はない。それでも環境委員会に姿を見せようとしないうちに、千春は何か違和感を覚えた。

武内が環境委員会を欠席して数日後に発売された週刊誌に、今度は沈む氷は北山産業が違法に作り出したものとして、その裏に野党代議士の影があるとする記事が載った。それは実名は伏せているものの、武内を示唆する内容のものであった。

――吉永側の反撃？ 一瞬、その報に触れた千春は、そう考えた。その後も、週刊誌の記事は、吉永と武内の暴露合戦の様相を見せ始めていた。ついには吉永大臣が沈む氷を昔から知っていたとの報まで流れた。

「これではどちらにしても潰しあいだね」

政治家同士の醜い潰しあいの様相に、失望したように美佐子が、眉をひそめながらいった。その言葉に、ふと美佐子をみた千春の表情が変わった。

「どうした千春？」

「まるで、それを願っている誰かが居るように見えないか？」

少し驚いたように美佐子が千春をみた。

そのとき千春の脳裏に一人の男の姿が、はっきりと浮かんでいた。千春は、その男の姿を思い浮かべながら、もう一度、一連の事件について考えてみた。

現在の自由遊民党が選挙に破れ下野したのは、今から三年前であった。

武内が沈む氷を政権奪取の手段と考えたとすれば、それは三年前の九月に行われた選挙に敗れてからになる。

堀田達が堀田研究所を立ち上げたのが、選挙から半年後の春先。その年の冬には袋田の滝で異常凍結が起きていた。そこから考えると、その時、高萩の沼には沈む氷が作られていた。堀田研究所の坂口は、研究所ができてから僅か半年で、高萩の沼に沈む氷を作った事になる。それは余りに早いと感じた。

神田三郎は、父勇次郎の論文は完成してなかったといった。その意味を千春は考えた。

堀田達が作り出した沈む氷は、神田勇次郎の論文を元にはしているのは間違いない。その論文は書き終えてなかった。いや、書き終えたとしても、それは論理的なものだけである。半導体レー

ザの研究が完成して実用段階になったのは、勇次郎が亡くなってからになる。従って、この事件が起こるまで沈む氷は一度も作られていなかった。

このように物理的要素の強い実験では理論を実践するには、装置個々がかかえる問題を解決しながらでないと試験は進まない。理論で全てが解決できるのであれば、実証試験など最初から必要ないものになる。

試験は、まず試験計画が練られて、そこから使用する試験機材の設計、製造となる。しかも、始めて行う試験であれば、いきなり野外での大きな試験とはならない。最初は試験室で氷を作り、設計した機器で考えた通りの氷ができるかなどの確認をして、それから本格的な大きな沼での実証試験になる。沼で実証試験をするには装置も変えないとならない。

時間を追えば坂口達は何のトラブルもなく、未完成の論文を元に、この行程を僅か半年でおこなった事になる。

――既に沈む氷を作っていた人物がいれば話しは別になる。

そう、実際に沈む氷を作り、そのノウハウを持つ人間がいれば、短期での製造もできるのであった。

沈む氷を作れる人物、それは神田三郎しかいない。神田三郎は学生の時に、神田勇次郎の手伝いをしていた。神田三郎の頭には、その時から沈む氷の製造図が用意されていたのかも知れない。

千春は、神田三郎との会話を振り返っていた。今にして思えば、幾つか引っかかる。

神田三郎は簡単に沈む氷を、大量に作れると言い切った。学者は自分が実践してきた事でないと言い切ったりはしない。確実に知り得た知識でなければ、普通は可能性の問題として、できるかも知れないと話すのが普通である。それを神田はしなかった。そればかりではなかった。千春が高萩の沼を想定し施設の規模を聞いたとき、簡単に計算によって施設の大きさを求めた。沈む氷に興味がないと言っていた神田三郎が、何故、そこまで詳細な計算が出来たのか。これもおかしい。施設規模を計算で求めるなどは、実際に沈む氷を作ってなければ出来るものではない。

三十五

千春と美佐子は神田三郎の元を尋ねた。

「ついに気づきましたか」

二人を迎えた神田三郎は笑顔でそういった。

「やはり、先生でしたか」

神田が静かに頷いた。その時の神田の表情には、すべき事はしたとの満足感のようなものが漂っていた。

「先生は病気にかかっておられる。今回の件は、それと関係があるのですか？」

千春達は、ここに来るまでに神田三郎について調べをしてきた。その過程で神田がガンに体を犯されている事や、袋田の滝の近くで死んだ坂口が、神田の教え子であった事などがわかっていった。

「私は、そう長くは生きられません。本当は、このまま静かに消えていくべきでした。しかし、それを許さない事情ができた」

「武内が沈む氷に、手を出したからですか？」

「そうです。沈む氷は、世に出しては駄目なものです。しかし、作ろうとしていた者がいた。父の遺作である以上、調べない訳にもいかなかった」

「先生は、それを坂口からお聞きになった」

「坂口君は、堀田という男から古い論文を渡されたとき、それが父の書いた論文ではないかと疑った。それで、そのコピーを持って私の所にきました」

坂口が学生であったとき神田と坂口との間で、沈む氷についての議論をしていた。それを坂口は覚えていた。坂口は手書きの古い論文を見たとき、それは神田裕次郎の書いたものではないのかとの疑いを持ち、それを確かめるべきコピーを手に、神田の元を訪れたという。

「そうでしたか」

「それは消えた父の論文でした。私は坂口君に、父の論文であると告げて、堀田達の行おうとしている事を尋ねました」

神田は、父の死についても知りたかったし、何故、今頃になり沈む氷を作ろうとしていたのかも気になったという。

その時、神田は坂口から、それまで務めていた北山産業から堀田研究所が独立した事や、早々に実験を成功させないとならない、差し迫った何らかの理由がある事などを聞きいた。神田は、坂口に困った事があつたら相談に来なさいと言ってその場は帰した。

その後、神田は堀田のいた北山産業を調べていくうちに、北山産業と現在、代議士をしている武内が繋がっているのを知り、父の論文を奪ったのは武内だったと気づいたと話した。

「私は、先般、小柳さんに嘘を言いました。父の論文は完成してなかったと。しかし、本当は父の論文は完成していました。学会に発表する手はずに、あのときなっていたのです」

「半導体レーザの件は、解決していたのですか？」

「父は、レーザビームの振動数が可変であれば、自分の構想とした沈む氷のできるのとはわかっていました。たしかに、半導体レーザは開発中ではありましたが、論理的に可能と結論が得られ、産業省でも試験を始めていたものです。一応、父はレーザ開発状況を知る為に、経済産業庁の武内の所に足を運んではいましたが、半導体レーザが完成するとの前提があれば、父の論文の骨格に影響を与えるものでは有りませんでした」

「論文を武内に渡す必要はなかったのですね」

「学会に投稿する間際のもので。渡す必要はなかった筈です。――その論文を武内代議士が持っていた。何故、武内が父の論文を持っていたのか気になり調べました」

神田の話によれば、父勇次郎の亡くなった一九八〇年代は、一九七〇年代から普及し始めた電子レンジの低価格が起き、それと同時に本格的なチルド食品が普及したとの時代背景がある。

その頃は、まだ、小さな会社であった北山産業は冷凍食品の発展に伴い需要の増す、ドライアイスに目を付けると、北山産業ではドライアイス製造用大規模工場を造っていた。

その工場は、勇次郎の死んだ翌年に完成している。これを知った神田は、武内が父の論文を持っていた理由がわかったという。

武内は沈む氷、そのものが邪魔であったのではなかった。武内に取っての脅威は、神田勇次郎が考えた製氷システムにある。沈む氷は大きなエネルギーを必要とせず、大量に氷を作らないと意味がない。これは裏を返せば、超低コストの氷が幾らでも作れるとの意味になる。ドライアイスと氷、用途は良く似ている。まして当時は、まだ氷の需要も高い時代であった。それだけに社運を掛けてドライアイス製造工場を造り始めた、北山産業にとって大量の安い氷が市場に出れば、会社存続にも拘わる重大事になる。

「御存じだと思いますが、北山産業は武内の実兄が経営する会社です。武内も政界からの誘いがなければ、何れは北山に戻る人間でした」

「武内は会社存続のために、お父上から論文を奪ったと」

「今となっては真相は闇です。しかし、当時の武内には論文を表に出したくない理由があり、そして、その論文を武内が持っていたのも事実です」

「先生は、武内に復讐がしたかった。それが事件の発端ですか？」

「否定はしません」

「武内側の情報は亡くなった、坂口君から先生は得ていたのですね」

頷いた神田が言葉を続けた。

「坂口君は優しい子だった。父の論文を読んだときから、おかしい事に拘わったと感じたのでしよう」

「先生は、坂口君に試験を勧めたのですか？」

「いえ、当初は、つまらないものに拘わらない方が良くと言って、仕事を辞めるようにと話しました」

「坂口君は？」

「仕事は辞められない。自分は、冷凍関連の研究が好きだ。それにうまくいけば、町起こしになると言って、少し悲しそうな顔で笑いました」

坂口は学生の時、神田と沈む氷についての論争をしている。その時の坂口は、環境を変えられる可能性を持つのであれば、選択肢の一つとして準備が必要ではないかとの趣旨を神田に述べていた。それを神田は思い出しながら話していた。

「町起こしとは、袋田の滝を凍らす事ですね」

「ええ、沢山の人を袋田の滝に集められると言いました。そのときばかりは、暗い表情の中でも目は輝いていた」

「……そこで先生は、細かな試験方法などを坂口君に教えた」

神田が頷いた。

「あの氷は危険なものです。堀田研究所の裏には武内代議士がいると知りました。父の論文が存在する以上、何れ、その危険な氷は作られる。それなら政治家を絡めた事件にすれば、後々沈む氷について、きちんとした議論ができると考え坂口君に試験方法を教えました」

利権絡みで秘密裏に作られた挙げ句、訳の判らない理論により一方的な使われ方をするより、犯罪として登場させオープンな議論を起こさせる。それが神田の狙いであったようだ。

「坂口君を殺したのは、私かも知れない。あの時、もっと強く坂口君をとめていれば、あのような事にはならなかった」

これまで淡々とはなしてきた神田であったが、そのときばかりは顔は崩れ目頭が濡れていた。

神田は自ら述べようとはしなかったが、そこには坂口自身の意志が大きく拘わっていたと千春は思った。

学者肌の人間はみな似たようなところがある。千春自身がそうであるように、一つの物事に取り付かれると回りが見えなくなる。冷凍関係の研究をしていた坂口が、沈む氷を知ったとき、研究者であれば自らも沈む氷を作って見たいとの強い欲求に支配されていたとしても、おかしくはない。坂口は袋田の滝に観光客を呼ぶとの、自分自身に対する言い訳を用意していた。それは、裏を返せば沈む氷に対する坂口の強い感心の現れであったのかも知れない。

「先生、でもあれは事故です」

坂口の死は事故であったのは間違いない。

「いえ、沈む氷を世に送り出すと決めたのは私です。その責任が私には有ります。言い訳のできるものではありません」

神田は自分の責任を全うするかのごとく、静かな声ではあるがはっきりといった。

「……支笏湖で沈む氷を作っていた人間、それを逃したのも先生ですか？」

「そうです。私は、支笏湖凍結の件を吉永大臣に手紙で伝えました。そうなれば何れ堀田達は捕まります。その前に堀田達を逃す為に私は北海道に行きました」

「確実に武内と吉永を戦わせるための仕掛けの一つですね」

神田が静かに頷いた。

「しかし、堀田達は、よく先生の話しに従いましたね」

「私は、坂口君から話しを聞いたときに、すぐに沈む氷の特許を申請しました。武内を含めて彼らは沈む氷で一儲けを企んでいた人間です。権利が全て僕の手にあったのでは、捕まるだけ馬鹿げてますから彼らは、その場を離れました」

「堀田と武内は利権で結ばれていたのですか？」

「間違いありません。武内は政権奪取を手柄に総理を目指している男です。自分が総理になる事が、何を意味しているか判っていた筈です」

堀田達は神田の手に特許権があると知り、その場から素直に離れた。それは利権で結ばれていた事を雄弁に物語っていた。千春も、さすがに神田から告げられるまで武内が政権奪取だけではなく、その先に総理大臣、そして欲も絡めていたとは知らなかった。

武内が総理大臣になれば利権の為に御用学者を使い無理やりでも、沈む氷を地球温暖化対策に使ったかも知れない。沈む氷は、地球環境を守るとの美名を使えば、容易に反対をできない性質を含んでいる。国の最高権力者が舵を切れれば使用された可能性は高い。しかし、一步間違えば大規模地球環境破壊を引き起こすのも沈む氷である。

利権の為にがむしゃらに押し進める、そのような性質のものでは決してない。武内のような男が、その権利を握ったらと思うと、何か背筋に寒いものを感じずには居られなかった。

「武内に男を差し向けたのも先生ですか？」

「ええ」

週刊誌に情報を送ったのも神田であった。

「この後、私は裁判でこれまでの事を全て明らかにします」

支笏湖の情報を吉永に与え武内を暴漢に襲わせ、互いを対立させる。神田は、それらを裁判で明らかにする。沈む氷を危惧する神田にすれば、すでに世に出てしまった沈む氷である。二人の政治家から沈む氷を取り上げるには、そのような方法しかなかったのかも知れない。

神田の取った行動は正当化できるものではない。正当化はできないが、心情としては千春にもわかるものがあつた。

「……沈む氷を玩具にする政治家は許せなかった」

静かではあるが、そう話す神田の目は語っていた。あの男達は政治の世界においては駄目な男達だ。自分の保身や都合だけで動く人間に、政治をする資格はないと。

「沈む氷は神の領域です。自然を人間がコントロールするなど出来ないのです」

「……先生、最後に一つ聞かせてください。地球は温暖化にあるのですか？ それとも寒冷化ですか？」

「すべては自然が決める事です」

三十六

事件が解決して半年が過ぎた。高萩の町にも秋風が吹き始めた頃、早坂内閣は解散して選挙モードに突入していた。

そんななかで美佐子は相も変わらず、居丈高な態度で千春に接していたが、それでもお茶だけは、自分の役目でもあるかのように入れていた。千春は、千春で茶の入れ方が下手だとか難癖をつけながらも、それでも美佐子の入れたお茶を旨そうに飲んでいた。

少し、その後の事件経過を報告すると、堀田研究所の名前や北山産業の件が週刊誌で暴かれたために、隠れていた堀田達は後に警察に自首をしてきた。既に利害関係を失っていた堀田達は、武内の指示で動いていたのを警察で話した。

警察は、衆議院が解散して議員の身分を失しなうのを待って、武内元代議士の事情聴取を始めていた。それによって、武内の選挙への出馬は絶望的になった。

吉永元大臣も、昔の事や恵庭岳への自衛隊派遣の正当性が週刊誌によって取りただされて、今度の選挙での当選は、相当難しいと伝えられている。

沈む氷は実は完成してなかった。本来、神田勇次郎の考えでは、空気中の炭酸ガスを使うのを想定していたが、神田三郎の試験でも、それは旨く行かなかった。

坂口や堀田達も同じであった。坂口は、神田三郎の元を訪れた。坂口の、どうしても袋田の滝を凍らしたいとの強い希望に答え、液化炭酸ガスを使えば良い事をアドバイスした。

支笏湖を凍らす期限が迫っていた堀田達も、空気中の炭酸ガスを使った製造方法は、後から考えれば良いとして、支笏湖凍結には大量の液化炭酸ガスを用いていた。

たしかに、それでも沈む氷はできた。しかし、液化炭酸ガスは、石油精製時に発生する副生ガスを回収して加工したものである。石油から生まれる液化炭酸ガスを使った沈む氷が溶け出せば、それは新たな炭酸ガスの発生に繋がるものである。

神田勇次郎が求めた空気中から得る方法であれば、形を変えるだけで済むが、新たに炭酸ガスが増えるのでは、地球温暖化防止にとっては本末転倒になる。

沈む氷 完

小川 真知貴

『沈む氷』以外にも、幾つかの作品があります。

興味があれば、そちらもご覧ください。